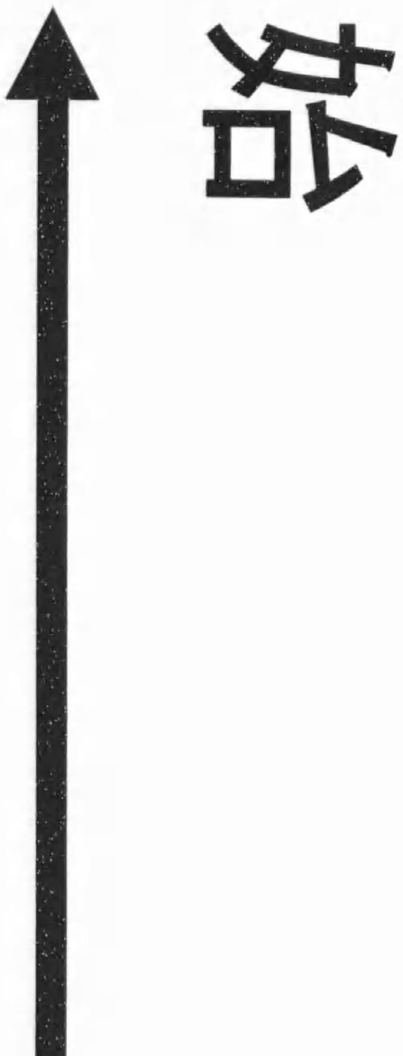
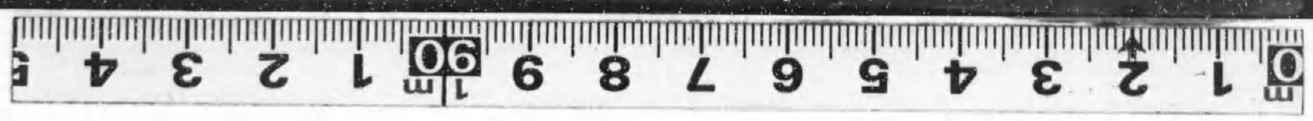
特217
752





特217 0
752

賀川豐彦著

神と聖愛の福音

下關 福音書館版

特217
752

序

不思議なのは、宇宙の現象であり、私の存在である。ぢつと眼を据えて、私の目の前に置かれた机、椅子、紙、書物、壁、靴下、障子、土、樹木、葉……花を凝視してゐると、私は、無生物と生物が、私の前に描く不思議な戯曲そのものに昏倒する位、驚異の世界に釣込まれて行く。それだけで私の宗教が、既に成立するに拘らず、私は更に、第二の不思議國に送り込まれる。

其處は、靜かに秩序を保つて呉れる「物」の世界ではなく、一秒間に十九哩走る地球の速力と、八分間に九千三百萬哩走つて來る光線の速力と、その光の速力をもつて、百年かゝつてもまだ走り了せないと云ふ、大宇宙の大速力の驚異の世界である。その不思議な凡百の世界に統一があり、統一のうちに、複雜な組織が横へられ、宇宙の力は盲目ではなく、人間以上の意匠によつて設計せられたることを、私は泌々と教へられる。これを見ただけで、充分私の宗教が成立するに拘らず、私は更に、第三の不思議なる世界に送り込まれる。

其處には、芥種の中に大きな幹と枝が貯へられ、卵の中に雄鳥が胚胎され、赤ん坊の腦の中に、ニュートンやアインスタインの法則が秘められ、アミーバより人類までの進化が、不思議なる展開として、時間の行進曲の上に展列される。私にとつては、成長の事實程不思議なものはない。この不思議な事實を見ただけで、私は驚異の讃歌を歌へ得るに、更に私を、第四の不思議な世界に連れ込むものがある。

其處は、太陽の輝きと、星と月の色彩によつて飾られる。幾十萬種の植物の葉が、一つとして同じ形のものはなく、みんな違つた葉と、違つた形をして天地を飾る、一つとして同じ花はなく、凡て人間の目には、美しい曲線美と色彩を以て、空間の世界に刻りつけられて行く。その美の世界、それにもまして、動物の不思議な形體と、人體の美の不思議なる組合せによつて、私は、宇宙を衣とし給ふ神が、單に力のみではなく、單に成長のみではなく、美と、優れた姿に、凡てを藝術化し給ふことを信ぜざるを得ない。これだけでも、私は、私の宗教の事實を疑へないに拘らず、私は更に、第五の不思議なる世界に導かれてゆく。

其處は、人間の凡ゆる經驗を通じて、宇宙を着給ふ神が、人間の胸に良心を植付け、その良心を通し、後に來るものに、朗らかに叫び給ふ神秘なる歴史の世界である。歴史の水平線に聳える良心の絶頂がいくつか並ぶ。その架空線を聯絡させると、神の足跡が印せられてゐる新しい雪線が發見せられる。それこそ、神の默示であり、永遠より永遠に物語り給ふ神の放送である。

舊約より新約への物語は、たゞ一編の歴史ではない。それは、良心の峯より峯に歩み給ふ神の足跡の印象記である。

おゝ、絶望と憂慮に慄へてゐる失敗の子よ、お前の上に希望の太陽が昇つてゐるではないか。宇宙を着給ふ神が、十字架の上に絶對の愛を現し、人間の魂に復活のあることゝ、凡ての失敗を神自らが尻拭ひし給ふことを示し給ふたではないか。洞穴に隱れて、神の審判を呪詛する狼の子よ、お前の恐怖は

見當違ひだ。神は懼れの神でなくして、至愛の神だ。審判の神ではなくして、贖罪の神だ。愛だ、愛だ、愛だ、至高の愛だ！　全世界に責任をもつて、全世界の最後の缺點まで責任を負ひ給ふは、キリストの「神意識」のうちに目醒めた、最惡者に對する贖罪の責任感ではないか。この世界凡てに對する責任の意識なくして、人類最後の解放は期待出來ない。この最微者、最惡者に對してさへ、責任を意識する神の如き自覺の中に、經濟的解放も、政治的解放も、社會的解放も、肉體的解放も、精神的解放も凡てが含まれてゐる。これは解放の解放である。それで、紀元一世紀の聖者たちは、これを福音と呼んだ。

人類を解放せよ！　資本主義的壓制より階級制度の桎梏より情慾の鐵鎖より、野獸の暴虐より、人類を解放せよ。そして我々は一つの解放に、更に新しき一つの解放を加へるとき、人類の解放が、キリストの十字架の上に流した贖罪愛の解放以上に出てゐないことを發見する。

福音の鐘よ、高鳴れよ！　村に、町に高鳴れよ、そして最後の人間を解放する迄、鳴り續けるがいゝ。

あゝ、福音よ、踊り出でよ、日本のために忍耐したる福音よ、日本の最後の最微者を贖つてくれ、日本は福音を待つことが久しい。日本の暗い臺所の押入の隅まで、福音の高潮で浸してしまふがいゝ。あゝ、福音の津波よ、日本の罪惡を掻浚へて行つてくれ、生命の颱風が南から北へ進むとともに、私はその福音の津波の來襲することを待つてゐる。聖靈の颱風よ、眞直に、日本の上を南から北に通過してくれ。

一九三〇年五月二十三日

賀川豐彦

武藏野の森にて

著者より讀者へ

この書は新約聖書の手ほどきとして誰にでも解るやうに大摑みに書いたものです。私は、新約聖書を批評的に見ないで信仰的に見ました。この書は私が、二十數年間瞑想したことの結晶したものです。勿論ペーヂが少い爲に書き足りませんでした。それで更に精しいものを讀まうと希望せられる方は、東京警醒社發行拙著「人類への宣言」をお讀み下さい。之は數年前に、矢張り新約聖書を概括的に書いたものです。もしこの書が家庭の禮拜用に、日曜學校の教科書に、或ひは聖書の組の研究に使用せられるならば非常に幸福に思ひます。農村などで同志がキリストを研究したい場合に、この書物などを基本にして研究して下さるとよいと思ひます。

猶、信仰に就て質問せられる方は、遠慮なく手紙を下さい。少し暇がかゝつても必ず御返事をいたします。私は眼病で自分が書けなくとも、妻や友人に代筆して貰つて、必ず返事を書くつもりです。御互に結束しませう。手紙を書くのに躊躇する必要はありません。

終に私はこの書を著作するに當つて、多大の勞をとられた吉本健子姉、黒田四郎氏に感謝する次第であります。

この書は約一年間、私が、各地で講演したものを二氏が筆記せられたものであります。

猶、私の住所は東京市本所區松倉町二丁目、大阪市此花區四貫島大通三丁目、神戸市吾妻通五丁目、兵庫縣武庫郡瓦木村農民福音學校内、東京府荏原郡松澤村上北澤の五ヶ處の中何處でもいゝです。この五つは凡て永久的の計劃をしてゐますから、そこへ御訪問下しても結構です、必ず求道者の方に滿足とはいかなくとも質問に答へる方がゐます。

神と聖愛の福音

目次

第一章　救世の福音——マタイ福音書の概要……一
神の愛を信ずるもの——解放のよろこび——四つの福音書——愛國者イエス——革命か？神の國か？——山上の垂訓——愛の奇蹟

第二章　奉仕の福音——マルコ福音書の概要……九
ローマ人の誤解——無抵抗の抵抗——弟子達の誤解——真心の勝利——大臣病の弟子達——愛と奉仕との社會——ペテロの發見

第三章　博愛の福音——ルカ福音書の概要……一七
理想國と神の國——人間的福音——博愛の精神——宣言の實現——祈禱の習慣

第四章　十字架の福音——ヨハネ福音書の概要……二六
愛の冒險——ヨハネの入獄と死——キリストの意識——官憲の態度——キリストの贖罪意識

第五章　聖靈の福音——使徒行傳の概要……三四
使徒の行動記——ピリポとステパノの行動——世界的運動——イエス行傳として——聖靈行傳として——神の内住と人間の完成

第六章　警醒の福音——テサロニケ前書の概要……四四

パウロの書翰——聖雄の足跡——苦難の蹂躙——キリスト再來の意味——再來思想と慰安——人生の五重塔——豊の子

第七章　勞働の福音——テサロニケ後書の概要……五一
日常生活の宗教化——歡迎すべき審判の日——勞働の福音

第八章　自由の福音——ガラテヤ書の概要……五八
自由、充分自由な福音——神の自由——キリストによる自由——信仰による自由——
靈魂の自由——愛による自由——十字架による自由

第九章　秩序の福音——コリント前書の概要……六六
狂風怒濤時代——パウロの辯明——批評を超越して——性の問題——愛の組織——
復活の福音

第十章　自在の福音——コリント後書の概要……七四
苦惱の彼岸——勝利と自在——道德的自在性——社會と批難に對する自在性——十字
架による自在性

第十一章　恩寵の福音——ロマ書の概要……八〇
道德發狂時代——ロマ書の內容——ロマ文明の批評——生理と救——心理と救——
宇宙の實在と救——歷史と救——救を基礎とする新道德

第十二章　解放の福音——ピレモン書の概要……八七
奴隷文明の確立——監房內の友人——聖愛の社會的實現——自由に最も自由に——
賠償？非賠償？

第十三章　完成の福音——コロサイ書の概要……九五
自律的宗教生活へ——三重の完成——キリストによる新創造——人類社會の完成

第十四章　一元の福音——エペソ書の概要……一〇一
一元的福音——宇宙の歸一——靈肉の歸一——諸民族の歸一——諸文化の歸一——
社會の歸一——生活の歸一——愛による歸一

第十五章　歡喜の福音——ピリピ書の概要……一〇八
パウロの寶玉——苦難の藝術——化身の福音——續進の生活——クリスチヤン萬能

第十六章　實行の福音——テトス書の概要……一二四
實行第一——實行の階段——實行の模範——再生の原理キリスト

第十七章　友愛の福音——テモテ前書の概要……一二九
宗教運動指針——信仰に就ての訓諭——祈に就ての訓諭——指導者の資格に就ての訓諭——宗教生活に就ての訓諭——宗教的社會事業に就ての訓諭——經濟生活に就ての訓諭——友愛の福音

第十八章　剛健の福音——テモテ後書の概要……一三七
剛健なるパウロ——悲壯なる遺言狀——神の徵兵制度——最後の言葉

第十九章　贖罪愛の福音——ヘブル書の概要……一三三
ヘブル書の使命——罪惡意識と贖罪愛の進化——宗教的表象の進步——贖罪愛の形式
とキリストの信仰——贖罪とメルキゼデクの祭司——新しき契約と血——魂の供物と
信仰の試練——新道德と贖罪愛の社會

第二十章　無產者の福音——ヤコブ書の概要……一四三

貧民を愛し給ふ神――小慈と大慈――ヤコブ書と山上の垂訓の類似――ヤコブの完全論――辛抱の福音――ヤコブの批評論

第廿一章　試練の福音――ペテロ前書の概要……一五一
逆境を押切るもの――宗教的迫害と試練――政治的迫害と試練――倫理的迫害と試練
――迫害の驅致と試練――試練の光榮

第廿二章　敬虔の福音――ペテロ後書の概要……一五八
闇に輝く燈明臺――末世末法時代――天への梯子――歴史の結論

第廿三章　聖愛の福音――ヨハネ第一書の概要……一六四
ヨハネ傳とヨハネ第一書――愛による見神――愛による潔め――愛による勝利――
内住する愛――完全なる愛

第廿四章　受肉の福音――ヨハネ第二書の概要……一七一
肉體と完全の姿――神の姿の進展――母性なる教會

第廿五章　兄弟愛の福音――ヨハネ第三書の概要……一七七
感謝と紹介の手紙――キリスト愛の實行――宗教の優越性と愛の優越性――信仰一點
張と愛の宗教

第廿六章　純潔の福音――ユダ書の概要……一八二
キリストの兄弟――性慾脱線時代と宗教――聖淨の生活

第廿七章　勝利の福音――ヨハネ默示錄の概要……一八九
祕密文書――モーセの五書の完成――七つの階段――三つの敵――羔羊の勝利

附錄（パウロ傳年表）

神と聖愛の福音

賀川豐彦

第一章　救世の福音

―マタイ福音書の概要―

神の愛を信ずるもの

單に神を信ずると云ふことと、神の愛を信ずると云ふ事には大きな差がある。世界に神を信ずる者は多いが、神の愛を信ずるものは誠に少い。

然も神が人類を愛し給ふたとの事實は、單なる言葉だけでなく、歴史上にそれが現され、殊にユダヤ民族の宗教的良心を通し、イエスと言ふ人格を通して、最もはつきり我々に描き出されたのであつた。

聖書を讀めば、神のことが文字で記されてゐる。けれどもキリストは聖書を文字で書かず、愛の行動をもつて書き記された。バプテスマのヨハネは、世界を救ふキリスト即ち一大救世主を待つてゐた。その時キリストが、突然大工イエスの姿で現れた。ヨハネは監獄から「あなたは救主ですか？」と質問し

た。するとキリストは然りとも否とも答へず、『盲人は見、跛者はあゆみ、癩病人は潔められ、聾者はき き、死人は甦へらせられ、貧しき者は福音を聞かせらる』（マタイ一一の四―六）と答へて、事實のうちに神の愛の實現があることを示された。

キリストは一生の間自分がキリストだとは明言されなかつた。ペテロが『汝は神の子キリストなり』（マタイ一六ノ一六）と言つた時も、默して居れと言はれた。此所に有名なキリストの秘密があつた。キリストは、我々が想像出來ぬ程、眞面目に天地の神にあやまり、人類の罪の身代りとならうと考へてゐられた。で、キリストは十字架にのぼる迄、自分が救主なる事實をかくされた。そして困難なその事業を完成された時に、『事をはれり』と言はれた。

弟子達は全くこれを理解せず、たゞ恐しい人、凄い人、解らぬ人と考へた。今でも、愛の實行に生きない人はキリストを理解しない。ドイツの神學者達は、『神が父であることゝ、人類が兄弟であることゝを信ずればよい』と言つてゐる。が、それだけなら何もキリストを待たずとも、ストイックの哲學者もパリサイの人も既に說いてゐた。必要なのは單なる思想でなかつた。そしてキリストは愛の實現に努力せられた。神の標準に於ける愛、人間が失敗してもなほ悲觀せず、助け上げる愛を實行せられた。キリストの地上の三十三年の生活に滲み出てゐるのは、神の愛そのものであつた。

神がその無限の愛を地上に吐き出されたのがキリストの姿であつた。『生み給ひし獨子を給ふ』と言ふのはこの事である。キリストの前迄は、神を外側から見てゐたが、キリストに於て、神が人類を如何ば

かり愛し給ふかの證據を發見した。これまでは確信がなく、神に就て、又人類の前途に就て何となく不安であつた。が、キリストを見るに至つて初めて、まだ世界は諦めなくてもよいことが知れた。

解放のよろこび

かゝる愛の記錄の最初が、マタイ傳である。これは傳記でない、マタイ福音書と言ふ。元來福音とは解放と言ふ意味で、解放される喜びの報らせの意味である。日本で福音と言へばすぐ惠比壽さん大黑さんに福をもらふことだと考へるが、福音とはもつと精神的なもの、社會的なものを指す。十八、十九世紀の個人主義的時代には、福音は個人的幸福を意味するとされてゐた。が、聖書をよく見ると、キリストの福音は、經濟的方面、精神的方面、生理的方面、社會的方面、政治的方面の凡てを含んでゐる。貧しいもの、病氣するもの、惱むもの、壓迫さるゝものなど、凡てが解放されることを含んでゐる。かうした深い意味に於る福音を、マタイが經驗した通り記してゐるので、マタイ福音書と呼ばれる。傳記として纏めたものではなく、キリストを通して神が我々を如何に愛し給ふかを示すために纏められたものである。

四つの福音書

福音書はマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネと四つになつてゐるが、マタイは最も古いもので、新約全書の最初に出てゐる。或學者は、マルコが古いと主張するが、はつきりした證據がない。紀元第四世紀のユウセビアスは、ヘブル語のマタイ傳が最初に書かれたものだと言つてゐる。マタイ傳はキリストの死

後間もない頃に書かれたものらしく、最も原始的な形をとつてゐる。エルサレムの二階座敷で起つた事件なども、ごく思ひ出話の形で描かれてゐる。マタイは税吏であつたから、筆まめに記したのであらう。第一、第二、第三、第四章は系圖、誕生、準備時代。第五、第六、第七章は山上の垂訓。第八、第九章が奇蹟。第十章が弟子への教訓。その他八つの譬話（マタイ一三章）旅行の記錄。エルサレムに於ける譬話（マタイ二二、二四、二五章）に、世の終末に關する話（マタイ二三章）等々三年のことが、一かたまりづゝ記されてゐる。その形が面白い。ごく原始的で、恰度マルチン・ルーテルの卓上挿話のやうに、年代順を追はずに書いてゐる。マタイ傳は面影を傳へる所に長所がある。思想の變化などについても餘り順序が立てられてゐないけれども、キリストと民衆とは、早くよりぴつたり一緒になつてゐるやうに思はれる。ルカ傳、マルコ傳は少し離れた所がある。ヨハネ傳は又キリストの「胸の弟子」が記したゞけあつて、親しいキリストの面影が示されてゐる。

元來マタイは愛國的精神が溢れてゐた。マタイ傳はユダヤ人のために書かれた。マルコ傳はロマ人のため、ルカ傳はギリシヤ人のため、ヨハネ傳は亞細亞人のために著述せられた。マタイ傳だけにユダヤの風習や言葉の説明がなく、すつかり解つたことゝして取り扱はれてゐる。それで愛國の精神に燃えた預言者としてのキリストが書かれてゐる。

愛國者イエス

マタイ傳に現れたキリストは、當時の亡國的なユダヤの哀調に同情し、彼等のちりぢりばらばらになつてゆく有樣を見て、憂國の志に燃えてゐるのがよく見える。マタイ傳のキリストは牧ふものなき羊の如きユダヤ民族に心より同情してゐられる。かうした記事がマタイ傳には非常に多い。（マタイ九ノ三六、一四ノ一四）

我々日本人がかゝる事實をほんとに理解するには餘りに國運が進展し過ぎてゐる。これにひきかへ、支那は十八年間内亂が續いてゐる。支那では新しい革命は大抵毎年九月に始り、翌年の夏に終る。そして又九月から起る。それで爭亂の中心地山東省の省民は、ちりぢりばらばらになり、毎年少くて六十萬、多くて百廿萬の人々が大連を經へて、滿洲地方へ流れ込んで來る。船でも十八人で一噸と勘定され、荷物を持つてをれば十三人で一噸として運賃を拂ふ。まるで荷物同樣である。税金を廿年も先取りにされるからたまらない。荷物を脊負ひ、子供をつれ、よろよろになつて上陸し汽車賃四圓五十錢がないので、寒い中をそんなみぢめな姿で、内地の方へ歩いてゆくのである。從つて行倒者が多く、寒い朝など小さい驛で三百人もの死體が横はつてゐる。そしてその死體を何日もそのまゝに捨てゝをくと言ふ有樣である。

こんな光景は日本の現在だけを見てゐては想像もつかない。けれどキリスト當時のユダヤはそれにも劣らぬ有樣であつた。一度はアレキザンダー大王に、一度はシーザーにひどく征服された。イザヤ書には「シナ」と言ふ文字が出てゐるから、支那にも渡つて來たかも知れない。その後世界に散らされ、現在ニューヨークには、ユダヤ民族全體の約一割卽ち百五十萬人が住んでゐる。

かゝるみぢめな狀態を見て、イエスは深く同情せられた。そしてこの場合に大きな問題となつたのは、此窮狀を救ふに、革命を以てすべきか、愛の實行によるかであつた。ユダヤ人は革命によつてローマの勢力を驅逐せんとし、キリストは愛の福音を說かれた。

革命か？神の國か？

マタイ傳には暴君の記事が多い。キリストの御誕生の時、ナザレの幼兒を殺したヘロデ王が最初に現れて來る。彼は自分よりもすぐれた神の使が來ては、自分の地位が危いと言ふので、殘酷にも二歲以下の嬰兒達を殺害した。けれども却つて彼は間もなく死んでしまつた。そしてその子が王位に登つた。

キリストの親族にあたるヨハネが起つて、國民に悔改を叫び、一大宗教運動を始めた。キリストは謙遜にも、此運動に參加した。アンチパスと言ふ小ヘロデは、自分の弟ピリピの妻を橫取りしたとヨセファスの記錄に記されてゐる。これをヨハネが或市場で罵つたゝめ、捕へられて、マケラスの獄に投ぜられた。キリストの傳道は實に此時より始まつたのである。ヨハネの捕はれた附近にぐずぐずしてゐては危ないと言ふので、すぐ北のガリラヤ地方に引きあげ、そこで傳道せられた。マタイ福音書には主として此のガリラヤ地方の記事が多い。

山上の垂訓

そのうちで一番美しいのは有名な說教集、山上の垂訓である。世界に於るあらゆる倫理道德の中で、これほど纏まつた、完全な、望ましい實行的な、そしてうるはしい教訓はない。高山樗牛はこれほどほ

がらかな教訓は他にないと言つたが、當時の師範學校の教科書に山上の垂訓は編纂されてゐた。今日ならば別段珍らしくはないけれども、明治三十年頃としては思ひ切つたやり方であつた。

實に孔子、釋迦、ソクラテス等の諸聖人の教に劣らぬは勿論、寧ろすぐれた立派なものである。それは神を基礎としてゐる。孔子も釋迦もソクラテスも皆神を基礎とせず、神を說いてゐない。然しキリストは神の如く完全なれと說かれた（マタイ五ノ四八）即ちキリストの教訓は宗教道德を基礎とし、宇宙大の神の道德を根本としなければならぬと教へられた。敵を愛する精神も、人の力では不可能なことであるが、神の力が加はる時に可能となつて來る。（マタイ五ノ四四、四五）愛の精神が神の標準に迄高められ深められる時に、敵をも愛せずにはをれなくなる。神を中心にし、愛の生活を送る所に、在來の凡ての貴い道德を完成するのだと教へられた。

私は孔子の教訓、釋迦の教理、ギリシヤの哲學に對して必ずしも反對しない。それ等はキリストに於て完成すべきものだと考へてゐる。（マタイ五ノ一七）佛教は人の悟を中心にして出發する。孔子も鬼神を說かず、『生を知らず、いづくんぞ死を知らん』と言つた。ソクラテスも宗教を語らなかつた。故に世界の聖人のうちで、眞に宗教を基礎としたのはキリストのみで、此點に於てもキリストは世界獨步である。

愛の奇蹟

然もキリストは言葉のみの教訓ではなく、行動のうちに愛の實現を期せられた。奇蹟も亦愛の實現である。奇蹟は見せるため行はず、藥の買へぬ貧乏人、不治の病者、癲病人、死者等に對して愛の奇蹟と

して行はれた。愛は奇蹟である。母の愛、民族への愛は奇蹟の動力となる。キリストは十字架の運動をもつて愛を實現せられた。十字架は奇蹟のうちの奇蹟である。贖罪の血によつて人を救ふ偉業が完成された。

ギリシヤ時代には人を殺しても罪だとは知らなかつた。それと等しく文明になつても罪を悟らない。ヨーロッパ戰爭で二千六百萬の人命を奪つたけれども、別に罪を犯したとは思つてゐない。日本でも維新迄は人を殺しても平氣であつた。罪惡意識がぼんやりしてゐて夢心地であつた。昔は何か神にすまぬから、羊の血で洗つてをかう位に止まつてゐた。が良心が目醒めて來ると、神の御前にどうしても赦罪しなければならぬと考へ出す。キリストはそれを眞劍に思ひつめ、遂に十字架の死をとげられた。マタイが一番詳しく記してゐるのはその點である。（マタイ二六ノ二八）言葉で神を基礎とした愛を敎へると共に、行爲によつて神を基礎とした愛を示し、自分の意識に於て人を救はんとする愛のために死なれたのがキリストであつた。言葉は預言者として、行爲は王として、意識は祭司としての生活をせられたのはキリストであつた。そしてこの深いキリストの死、預言者、王、祭司として見たるキリストを書かんとしたのがマタイ福音書であつた。

父なる御神、

我々は半分程も眠り、イエス・キリストが深い愛をもて、神の御愛を人間の歷史に語り給ひしことを忘れ勝ちであります。目を醒ましてキリストが如何ばかり懼めるものゝため、苦しめるものゝために盡し給ひしかを悟らしめ給へ。我々が眠る時、キリストが千九百年前に如何ばかり人のゆくべき道について煩悶し、救を完成せしめんために苦しみ

給ひしかを思ひ起さしめ給へ。我々もちいさいながら、キリストの道を蹈み、言葉と行と意識とに於て十字架愛をはつきりと示すものとならしめ給へ。主イエス・キリストによりて願ひ奉ります。アーメン。

マタイ福音書の梗概

第一章　系圖—誕生告示
第二章　誕生及びエジプト逃避
第三章　ヨハネの運動とイエスのバプテスマ
第四章　イエスの誘惑—ガリラヤ行—弟子召集
第五章—七章　山上の垂訓
第八章—九章　奇蹟一束
第十章　弟子への訓諭
第十一章　ヨハネとイエスの關係
第十二章　イエスと周圍の人々の最初の衝突
第十三章　譬喩八つ
第十四章　王とイエス
第十五章　イエスと因習
第十六章　イエスとカイザリア旅行
第十七章　變貌
第十八章　敎訓一束
第十九章　ペリアにて
第二十章　エルサレム旅行
第二十一章—二十二章　エルサレムにての行動
第二十三章　パリサイ攻擊
第二十四章—二十五章　終末と審判の譬喩
第二十六章　イエスの告別と審判
第二十七章　十字架
第二十八章　復活

第二章　奉仕の福音

—マルコ福音書の梗要—

ローマ人の誤解

マルコ傳は奉仕の福音書である。キリストの使命は、神の愛を人類にはつきりと示すことであつた。然るにローマの人々は誤解して、キリストは反逆者であり、ローマ帝國を詛ふ危險人物だから死罪に處せられたと考へてゐた。ジュリアス・シーザーがユダヤを亡ぼしたのは、紀元前七十年程前であつた。その甥のオーガスタス・シーザーの時にキリストはベツレヘムに生れた。

ローマに對して革命を企てた人も多かつた。使徒行傳第五章の三十六節には、謀反の起つた二つの場合が記されてゐる。即ちチユウダとユダの革命であつた。しかしローマの軍隊は強かつたから、ユダヤの國を自由に治める位は何でもなかつた。

然もユダヤはごく狹い。三四百万人位しか人口がない故、これを左右するのは何でもなかつた。何しろ四國全體と餘り變らぬ程であつた。けれども神に特別な選びを受けたアブラハムの末裔だと言ふ自尊心を把持し、獨立心に燃えてゐた。いかにかして獨立國を造りたいと、飽迄戰つたのは實に勇しかつた。餘り最後迄爭ひ盡したので、今日では跡型もないほど踏みにぢられてゐる。徹底したものである。キリストの死後二世紀の終まで革命をし續けた。そしてキリストの豫言通り、瓦の上に他の瓦が殘つてゐない程つぶされた。

散らされたユダヤ人は、最初エジプト、或は地中海の各地——カルセーヂ、モーア、スペイン、オランダ、イギリス、ドイツ、ロシヤと追はるゝまゝに逃げまわつて、漂泊しつゞけた。その慘憺たる狀態は實に同情すべきものがある。歸るにも荒れ果てた土地で、現在ユダヤ人は僅かに五万人である。英國政府が骨を折つて新ユダヤ國の建設を叫んでも、アラビヤ人が七十万人もゐて、都市が出來ない。かうした悲しい時代に十字架の死を遂げたキリストは、單なる謀反人として殺されたのだとしか考へられてゐなかつた。

無抵抗の抵抗

マルコ福音書はローマ人にあてた福音書で、ローマ人は讀んで薄氣味の惡い氣持になつたことであらう。反抗は決してしなかつた。無抵抗の抵抗で、印度のガンヂーが現今實行してゐる所に外ならない。けれどこれこそ三百年の後に及んで、遂にローマに對して完全なる勝利を獲たキリスト教の力であつた。その原動力は何であつたか？奉仕そのものであつた。

此事實をローマ人に說明するため、ペテロが弟子のマルコ、即ちキリストの又弟子に筆記させたものが此書物である。それでペテロのことが馬鹿に多く書かれてゐる。マタイ傳はユダヤ人のために記された。が、マルコ傳はペテロの香がする。ルカ傳はパウロの香が漂つてゐる。ペテロは無學の人であつたが、最初からキリストに從つてゐたゝめ、キリストのことならばよく知つてゐた。

弟子達の誤解

キリストの生きてゐられた時に、弟子達は終まで誤解しつゞけて來た。恰度アインスタインの相對性原理を小學生が研究するやうなものであつた。キリストの精神が何だか解らなかつた。あの有名なパブテスマのヨハネがほめたから、きつとユダヤの王になるにちがひない。從つて自分もゑらくなるのだと思つてゐた。今日でも教會へ來るのは修養して成功するためばかりだと考へてゐる人がある。成程神を信じて正しい生活を送れば、自然成功する。然しそれだけならば、頗る主我的な個人主義的な考へ方である。で、キリストの心持は、弟子にさつぱり解らなかつた。

第一章から、キリストが朝早く何所かへ行つて姿を消したので驚いてゐた。『先生はをらんぞ。どこへ

いつたんだ？』とさがしまわつた。寂しい所でぢつとしてゐるキリストを見付けて『先生皆がさがしてゐますぜ』と言つてゐる。キリストは民衆から離れて靜かに瞑想し祈つてゐられた。先生と弟子との間には大變な距離があつた。そして此調子は終まで變らなかつた。

例へば、キリストの先生のヨハネが、ヘロデアンチパス王に殺され、民衆が怒つた餘り、もう辛抱出來ぬ、革命を起さうとした時もさうであつた。勿論この事はマルコ傳には省いてある。革命の陰謀があつたと書けば、すぐ發賣禁止になるから、食はず飲まずに民衆がついて來たとだけ書いてある。がヨハネ傳第六章には『彼等王となさんとせり』と書いてある。ヨハネ傳はローマ帝國の勢が少し弱つた時に書れたから、遠慮なくあからさまに記錄してゐる。同じことを書いても、ローマ人に送るマルコ傳と、アジヤ人に送るヨハネ傳とにはこれだけの相違がある。そこが面白い。

そして五千人にパンを喰べさせたのが興味深い。社會運動をせぬ者にはこゝらの呼吸が解らない。腹がへつて動けぬ迄やりまくる。キリストはこれらの民衆を更に徹底的に導くために先づ落ちつかせた。大きな勢力にはとても勝てないから、神の力によつて精神的な勝利を獲ようとした。がこの時も弟子は何が何だか解らなかつた。

良心の勝利

道德の腐敗したローマには、神と良心で勝つより仕方がない。眞理に立つ時、ローマの勢力がこれだけ踏みにぢつても、最後には必ず勝つ。良心さへしつかりしてをれば、國は破れない。日本でも大和魂

さへしつかりしてをれば大丈夫である。然し監獄が大臣の別莊になり、市ケ谷監獄で内閣が組織されるようでは心配である。

キリストは神が良心の中央にありさへすれば、ローマが亡んでも神の國は亡びないと主張した。ガンヂーも部屋に十字架をかけ、印度の獨立のためキリストの方法を實現せんとしてゐる。そして軍權以外の自治權を確立するに至つた。所がキリストの弟子達はそれが解らなかつた。それで見當違ひの事ばかりしてゐた。

キリストは三十歳で傳道を始め、三十三歳の春迄三年三ケ月位傳道した。初の一年は豫備時代で、次の一年はガリラヤ時代で海岸や山上の說教があつた。次の一年はヨハネが殺され、革命の氣勢が盛んになつたゝめ、キリストは公然と町へ這入れぬことゝなつた。這入れば騷動が起りさうであつた。それで更に旅行をつゞけ、カペナウムから、外國へ居を避け、ツロ、シドンに赴いた。そして革命の熱がさめた頃歸らうとした所が、歸つて見るとやはり、四千人がつきまとつた。キリストではなければよい指導者がないと言ふので、革命黨が大勢つめかけた。がキリストははつきりと、自分は革命する意志がないから歸つて呉れ、良心と愛とをもつて戰ふのだと言はれた。そしてもう一度外國に旅立つた。

大臣病の弟子達

北方カイザリヤ・ピリピへ旅してゐた時、弟子は時運の急なるを感じて、今度こそキリストはえらいことを仕出かすにちがひない。神通力をもつてローマをやつつけるにちがひないと思つた。それで內閣

組織の相談をした。ペテロが内務で、ユダが大藏でなど言ふ調子であつた。そこでキリストは、『人々は私をどう思つてゐるか』と質問された。『ヨハネの生れ變りとか、エリヤの再來だと言つてゐます』などと答へた。實際さう思つてゐたので、ヨハネやヤコブはサマリヤ人を火で燒きつくしたらいゝと言ひ張つた。『君等はどう思ふか』と重ねて質問されると、ペテロは早速、『モーセ、エリヤ、エリシヤ、ヨハネなどより偉い、神の子キリストです』と答へた。

それで『そんなことを人に口外してはならないぞ』と命じてから、『わしは近いうちに捕へられ、學者長老達に苦しめられて、十字架の死を遂げるのだ』と諭された。ペテロは驚いて、『一寸、一寸、先生』と言つて、袖をひつぱつて傍へ連れてゆき、『先生あんなけちなことを、人前で言つて下さつては困ります。先生はゑらいお方だのに、何を言つてゐられるのです。王樣になるときまつてゐる方が、景氣の惡いにも程があります』と言つた。キリストは鋭いお言葉で、『惡魔！わからん奴ぢや。おまへは人のことのみを思ひ、神樣のことを思はない！』と叱りつけられた。

弟子達は解らない。けれど兎に角、ゑらい人だからついてゆくに限ると思つて從つていつた。その歸り路でも、やはり大臣になる話で持ち切つた。家につくとマルコ傳第九章の三十三節以下にある通り、『道すがら何を話してゐたか』ときかれた。が皆默してゐた。すると『頭たらんと思ふものは、奴隷となれ』と敎へられた。弟子達は又けちな話が始まつたと思つた。

愛と奉仕との社會

いよいよキリストは覺悟を定めて、エルサレムに向はれると、第十章にある二人の弟子の母が來て、又大臣にされんことを願つた。徹頭徹尾、弟子達は、キリストが十字架にかゝつて贖罪の血を流すのが、ほんとの勝利だと云ふ眞理を理解出來なかつた。犧牲の血によつて神の國が完成されると考へられなかつた。

別離の宴になつてもまだ解らない。マルコ傳第十章四十五節以下に『人の子は支配者としてでなく、却つて十字架にかゝる』と記してゐる。革命だけでは民衆を結束させることは出來ない。眞の社會はばらばらでなく、縱糸と横糸とで織り合はせたものでなければならぬ。大臣だけでは眞の社會が出來ない。旗振りも、肥料汲みも、敎員も、巡査もなければならない。神の國に於ては、大臣と同じやうに働くものも尊敬せられる。弟子は個人主義的の立場から王や大臣のことばかり考へてゐた。が一人であつては王も淋しい。野原の中の玉はみちめだ。大將一人で戰爭は出來ず、船長一人で一萬噸の船は動かぬ。眞の社會は使はるゝものゝ崇められる所だ、解つたか？と敎へられた。が弟子達はに解らなかつた。

キリストはとうとう犧牲の血を流してまでも、その道を進まれた。愛と奉仕の精神が生れて來れば、神の子の姿が現れる。レーニンやトロツキー一派の革命ではない。いやしい仕事をも喜んでなすやうな社會を建設するためには十字架が必要であつた。

ペテロの發見

ペテロは此の大眞理が、キリストの死後になつてやつと解つた。これはローマ帝國にとつては表面上

最も安全な思想であつたが、一面から云つて最も恐しい脅威であつた。氣のつかぬ間にとうとうキリストの死を通して、永遠の勝利が獲得されたのである。

父なる御神

我々は誠に悟のにぶいもので、社會が愛と奉仕によつて出來ることを忘れ、武力と喧嘩をもつて進まうと致します。しかしキリストは我々の往くべき道を示して下さいました。つまらぬ十字架の道であつても、默々として御跡を蹈み感謝しつゝ勞働に從事し、愛と奉仕を通してのみ眞の社會が完成されることを考へて進まして下さい。ともするとなまけんとするなさけない心に溢れてゐるものでございますが、どうぞこんなけちな考をふり捨てまして、心より主の御旨を悟り、もう一度考へなほして、謙遜なる、柔順なる心持を抱き、雄々しく神の國運動の勇士として立たしめて下さい。主キリストによりて祈ります。アーメン。

マルコ福音書梗概

第一章 一—八 洗禮者ヨハネ 九—十一 イエスのバプテスマ 十二—十三 誘惑 十四—十五 イエスの說教十六—二十二 最初の弟子 二十三—二十八 惡鬼につかれたものを癒す 二十九—三十一 ペテロの姑癒さる 三十二—四十 多くの病人癒さる 四十一—四十五 癩病人癒さる

第二章 一—十三 癱瘓患者を癒す 十四 マタイを召す 十五—十七 稅吏及罪人と食す 十八—二十二 斷食に就て 二十三—二十八 麥の穗をつむ

第三章 一—九 手なえたる者を癒す 十 多くの病人をいやす 十一—十二 穢れたる靈をいましむ 十三—二十一 十二使徒を選ぶ 二十二—三十 惡鬼につかれたりとの惡評に對しての言明 三十一—三十五 眞の兄弟は何人なるかを言明す

第四章 一—十三 種蒔の譬 十四—二十 譬の味 二十一—二十五 光と燭臺 二十六—二十九 秘かに成長する種の譬 三十—三十四 芥種の譬 三十五—四十一 暴風を鎭め給ふイエス

第五章 一—十二 レギオンとイエス 十三—二十四 惡鬼豚に入る 二十五—三十四 血漏の女を癒す 三十五—四十三 ヤイロの娘を甦す

第六章 一—六 故郷に尊ばれざるイエス 七—十三 十二の使徒の派遣 十四—二十六 イエスに關する各種の批評 二十七—二十九 バプテスマのヨハネ殺さる 三十—三十三 十二使徒歸る 三十四—四十七 五千人に食を與ふ 四十八—五十二 海上を歩むイエス 五十三—五十六 イエスに觸るるもの癒さる

第七章 一—七 手を洗はざるに付パリサイ人の攻擊

八—十三 傳說に依る神のいましめに就て 十四—二十三 人をけがすもの 二十四—三十 スロ・フエニキヤの娘をいやす 三十一—三十七 聾音者を醫す

第八章 一—九 イエス四千人に食を與ふ 十—十三 パリサイ人に徵を與ふる事をこばむ 十四—二十一 弟子にパリサイ人とヘロデのパン種をつゝしめと戒む 二十二—二十六 盲目者をいやす 二十七—三十三 十字架を豫言す 三十四—三十八 迫害に耐ゆべき事を敎ゆ

第九章 一—十 イエスの變貌 十一—十三 エリヤのことに付弟子に敎ゆ 十四—二十九 惡者の惡鬼を追出す 三十—三十二 十字架を豫言す 三十三—三十七 謙遜に就ての敎訓 三十八—五十 彼に適せざる者をつまづかせざるよう敎ゆ

第十章 一—十二 イエスの離婚論 十三—十六 子供達を祝福す 十七—二十二 永生に就て富者と語る 二十三—二十七 富の危險を語る 二十八—三十一 福音の爲めに總てを捨つべきを敎ゆ 三十二—三十四 彼の死を豫言す 三十五—四十五 二人の弟子に苦難を敎ゆ 四十六—五十二 バルテマイの目を開く

第十一章 一—十一 イエスのエルサレム入城 十二—十四 イチヂクの木を呪ふ 十五—十九 宮を潔む 二十—二十六 信仰をあつくし敵を許す可き事を敎ゆ 二十七—三十三 敎の權威に就ての問答

第十二章 一—十二 葡萄園の譬 十三—十七 納稅 十八—二十七 復活 二十八—三十四 律法 三十五—三十七 ダビデの裔に就ての討論 三十八—四十 パリサイ攻擊 四十一—四十四 寡婦のレプタの賞讃

第十三章 一—三 七 エルサレム滅亡と終末の豫言

第十四章 一—二 祭司等の謀計 三—九 ナルダの香油を浴ぶるイエス 十—二十一 ユダの反逆 二十二—三十一 聖晩餐 三十二—四十二 ゲツセマネの祈 四十三—五十二 捕縛 五十三—六十五 審判 六十六—七十二 ペテロの卑怯

第十五章 一—十五 ピラト、イエスを審判す 十六—四十一 十字架 四十二—四十七 葬式

第十六章 一—十九 イエスの復活

第三章 博愛の福音

理想國と神の國

—ルカ福音書の概要—

ルカ福音書は、ギリシヤ人で、パウロの愛弟子醫者ルカが、書いたものだとされてゐる。

シリアのアンテオケはギリシヤ人の町である。そのアンテオケにテオピロと云ふロマの貴族が住んでゐた。ルカ傳はその貴族に宛てた福音の説明である。それはルカ傳第一章四節に書いてある。

テオピロ閣下よ、汝の教へられたる事の慥なるを悟らせん爲に、これが序を正して、書贈るは善き事と思はるゝなり

（ルカ一ノ四）

この序文とヨハネ傳の序文とを比べると、如何にルカ傳の序文が、人間的であるかゞ判る。ルカはは つきりと人間的立場から書いてゐるから、その考でこの手紙を見なければならぬ。而も歴史的であり、研究して書いてゐる。想像で書いたものではなく、ギリシヤ的頭腦、科學的精神をもつて書いてゐる、それと共にルカ傳は情熱的である。英國キリスト教社會運動の鼻祖であるケムブリッヂ大學の教授、フレデリック・マウリスが、同志と研究したのは、ルカ傳であつた。マタイ傳が、その中心の問題として天國を書いてゐるのに反し、ルカ傳は神の國をその中心としてゐる。で、マウリスは神の國の思想の下にルカ傳を綴つてゐる。

ルカ傳は殆ど完全なギリシヤ道徳を結晶さしたものである。それは聖人ソクラテスも及ばぬ、またギリシヤの七賢人も及ばない思想を、イエスの教の中に發見したものである。その根本思想はプラトーの理想國にも比すべきもので、恐らくこの醫者が書くときに、イエスの神の國とプラトーの共和國とを比較して書いたに違ひない。プラトーの共和國に於ては賢人が支配し、智者が高められ、弱者貧民が、疎外せられるに反し、イエスの神の國に於ては貧民が救はれ、精神のいためる者が慰められ、反社會的囚

人が釋放せられ、盲人が見せられ、奴隷階級が解放せられる處の、（ルカ四章）理想國である。ギリシヤ人が曾て夢にも見なかつた新しい理想國である。プラトーの理想國に於ては、凡ゆる感情が排斥せられ、詩人までが斥けられる理智一點張の世界である。イエスの社會では、愚劣極まる囚人や、女子供迄が自由に伸び得る特權が與へられてゐる。而もその國は、一區域一地方に限られず、世界を包含し、世界を支配し、權威もて臨まず、愛もて密着する處のものである。イエス前五世紀のプラトー、ソクラテスでさへ及びもつかない理想國が出現してゐる。ルカ傳は、この驚くべき理想國を目の前に描出し、この不思議なる事實を基礎にして書き綴られてゐる。高慢なるものに侮蔑が與へられ、精神革命が漸次に社會改造に及んで行くことを記述してゐる。

人間的福音

彼はギリシヤの文學的素養をもつて、初め三章は美しい詩を組合せてゐる。マタイのやうに系圖を持ち出さず、人が悦ぶやうな讃美歌をもつて始め、而もその讃歌は、恐ろしい時代の俗惡な傾向に對する精神革命的な詩である。マリアの讃歌の如きは、曾て女の口から洩れたものとして最も大膽な革命的詩である。而もこの著者は、それをロマの戸籍調査と喧付けて考へることを忘れなかつた。一方に於てロマ帝國の組織の整つた、統計的な計劃が實行せられた時に、イエスの運動が始まつた。このコントラストが面白いではないか！

ロマは世界最初に國勢調査を行つた、そしてその最初の晩にイエスが生れた。民衆は混亂に陷れられ、

イエスはその混亂の最中に人間の住む家に泊められないで、馬小舍の中に呱々の聲をあげたのだつた。ルカはこの馬小舍の光景を美しく書いてゐる。彼は凡ゆる方面から、低い地位にあるものが、イエスを圍つて大きな歡喜のあつたことを書いてゐる。初めから瑞兆があつた。老人が喜び、女が惠まれ、勞働階級が嬉しがつたことを記してゐる。

けれどこの著者は、マタイ傳のやうに豫言的立場から取扱つてゐないで、三人の博士が東から來訪したことなどは書いてゐない。さう云ふ偉い學者とイエスを結付けないで、たゞ老人や勞働者や地位の低い女とキリストを結び付けたところに面白味がある。さう云ふ風に書出した著者は、次にすぐイエスの神の國の宣言をその幕あきに出してゐる。ルカ傳第四章に現されてゐることは實に痛快なことである。イエスは故郷ナザレに歸り、神の國の宣言をなし、神の國運動がイザヤとエリヤの預言の繼續であることをはつきり示してゐる。

それから後のガリラヤの記事は、マタイ傳やマルコ傳と餘り變らない。しかしルカは、マタイやマルコが載錄しなかつた記事を澤山持つてゐる。そしてその片言隻語が凡て愛の現れであることに我々は驚嘆する。恐らく之はパウロの友人などの言を多く集めたものであらうが、例へば、パウロの泊つたピリポの家庭、パウロの泊つたエルサレムの女の家庭、或ひはマカの叔母さんの家庭などが材料を提供したと見える。さう云ふ女の人に關したものが同情深く書かれてゐる。それがルカ傳の特徴である。

博愛の精神

ヨハネ福音書には、エルサレムの權力者が話した記事が載つてゐる。恐らくは、ニコデモやアリマタヤのヨセフが裁判官の立場からイエスに對する考を、弟子ヨハネに話したに違ひない。ルカは他に書かれてないペリア地方のことに就て記してゐる。ペリアの地方に於るヘロデとキリストの關係は他の記者が全然忘れてゐたものである。その頃キリストが、最も熱情的に彼等を救はんと思ひ、神の國を打ち建てようと云ふ時だから、非常に人情的な救はんとする意志がルカ傳には横溢してゐる。人間は油斷するとすぐ人を救はんとする意志を失ひ易く、救はんとする意志を持續することは困難である。私は修道院の記事を讀んで感じた。修道院でさへフランシスが死ぬとすぐに分裂した。あの戒律の嚴しいベルナルドの團體もばら〳〵になり、あの優れたアントニーの運動でも、アントニーが死ぬとすぐばら〳〵になつてしまつた。それは人格の力を受ける人が油斷するからで、單に教義に就てのみ云ふのでなく、何十年間それがいゝ狀態にあるといゝが、戰爭があつたり、經濟的變化や天災があるとばら〳〵になるものである。パウロのやうにキリストの精神を受繼いだ人が出なかつたとすれば、折角のキリストの精神もそのまゝになつたのではないかと思はれる。が、幸にも神はパウロを召出し、そのパウロにルカを與へて、斯ういふ福音を書き傳へられたことは嬉しい。

私はルカ福音書を讀んで、平素忘れ勝ちな愛の運動を痛切に感ずる。ちよつと油斷すると御馳走を食ひたいとか、いゝ家に住みたいとか云ひたがる者に、キリストはその要所要所にちやんといゝ言葉を置いて居られる。それが失はれんとした羊の話であり、失はれたる金子を尋ねる氣持であり、放蕩息子を

迎へる氣持となつて出てゐる。

第十章には乞食に對する熱情を書き、第十九章には、嫌はれてゐる代表的賣國奴ザアカイの家にイエスが泊られたことが書いてある。さうかと思ふと、第十三章には、暴君ヘロデに對し敢然と挑戰して居られる勇しいイエスの姿を現してゐる。「往きてかの狐に云へ……」（ルカ一三ノ三二）と、イエスがヘロデの退去命令をきかない事を書いてゐる。

宣言の實現

また、キリストイエスがナザレに於て宣言した事をルカは忘れずに書いてゐる。即ちイエスが實行された事である。キリストは貧しき者の友であり、貧しき者を醫された。貧しき者は幸だと云はれたと云ふことが、第六章二十節に出てゐる。同じ記事がマタイ傳には「心の貧しき」となつてゐるに拘らず、ルカ傳には單に貧しきものとなつてゐる。キリストは貧民を祝福せられたのである。而もキリストは心傷める者に味方をせられた。キリストが貧民を憐むことは乞食の友に接近して病氣を治されたことによつてもわかる。即ち罪人と云はれ、俗人と呼ばれ、侮蔑せられ、排斥せられた人々をキリストが却つて愛せられた記事が載つてゐる。

一例を擧げれば第七章の終に、うるはしい女に對する同情の話が出てゐる。町で評判のあばずれ女をイエスがかばつた。或ひはザアカイに對する愛、何れにしてもキリストが人を愛する時に、忍耐力を持つて居られたことを譬話の中に我々は知る。第十三章六節—九節に出てゐる無花果の話にしても、肥料

することを「今年も容せ」と云つて、結果があがらなくとも今年も容せと云ふイエスの同情深い憐み深いことをルカは書いてゐる。況して囚人を解放することをキリストは忘れて居られる筈がない。罪人の友、人殺し、姦通、强盜、嘘付、貪慾者にキリストが全く同情せられたことをルカは記してゐる。キリストは人を殺すやうな男を十字架にかゝる最後まで勞つて、强盜のために救の確信を與へられたことは、ルカ傳だけの記事である。（ルカ二三ノ三九）第七章の女に對する同情、ザアカイのやうな貪慾者に對する話、ペテロのやうな嘘付者に對する同情を精しく書いてゐるのはルカ傳に限られてゐる。それはキリストが、口先で云はれたのでなく、實行せられたのである。或ひは盲人の話にしても、キリストの生理的救がある。また癲病に對する記事はルカ傳のみである。況んや被壓迫階級に對する記事は勿論のことである。ヘロデに對するイエスの言葉もルカ傳特徴のものである。特に、子供、女に對する同情は、ヨハネ傳は勿論、マタイ傳その他にも書いてない。

祈禱の習慣

又キリストの神の國は口先の宣傳によらず、實行にあることを記して、その根柢としてキリストが祈の人であつたことを忘れてゐない。例へば、バプテスマを受ける時も、弟子を擇ぶ時も、變貌のときも、ゲッセマネの祈にしても、祈に關する記事はルカの記す處であり、キリストの運動が祈により始められてゐることを決して忘れてゐない。バプテスマの時も「祈れる時」とルカ傳には書いてあるが、他のものには書かれてない。或ひはマルコ傳はたゞ變貌だけしか書いてないが、ルカは祈れる時と書いてゐ

る。またルカ傳によれば、イエスは夜通し祈つて弟子を選擇して居られる。斯うしてルカは、キリストの凡ゆる社會運動は、祈が基礎になつてゐることを忘れてゐない。

そのやうにキリストは社會愛を實現し、經濟的理想から云つても、模範的活動をせられたが、その根柢は祈であつた。これが大切である。世の多くの社會的運動家は、祈を忘れてゐるが、神に祈つて始める運動は、滾々として盡きざる原動力を與へられるものである。最後の階段に到つてまでも、祈り給ふたことを書いてゐるのは矢張りルカである。

要するにキリストが人を愛し神を愛してゐられる二つの方面を完全にあらはしたのがルカである。ルカはそれを、銀線のやうな琴の音をもて書き出した。ルカ傳のやうなものは實になつかしい。マルクスの本を見ると、憎しみがあるが、ルカ傳には人を愛する理想的の國が目の前に見える。それが我々の宗教である。

宗教と云ふのは祈つてばかりゐないで、それを實現することにある。單にキリストはユダヤ民族を愛したのでなく、ギリシヤ人をも、世界人類をも愛し給ふたことがルカ傳にはよく出てゐる。ナザレの宣言の第一にしても、ユダヤ人よりもギリシヤ人が救はれて、却つて高慢なるユダヤ人が救はれないのだと書いてゐる。即ちアメリカ人やイギリス人がキリストに到達するのみでなく、日本人も救はれるのである。ルカは即ち世界主義者を書き、神の國インタナショナル、God International を唱へたことを書いて、それを實現するために、キリストは十字架につき給ふた。ルカはギリシヤ的筆法で、その裁判の

行違ひまで書いてゐる。キリストがパンをさいて人に與へられたこと、そこにもキリストの同情があらはれてゐる。ルカは餘りにもよく、理想的人物を理想的に書き出してゐる。我々はルカ傳を讀んで、眞の慰めと悼びを感じるものである。

きよらかな朝日を昇らせ給ふ天の父なる神

我々の魂の曇つてゐるものを天に昇らせ、その慈しみをもて我々を圍み、きよめて下さい。その祈り給へるとき姿變り給ふたキリストが、きたない人間の魂を捉へて、神の子の姿をうつし、まことに、神の愛が人間に浸込む時に、すつかり變つたものになることを敎へられて感謝いたします。マルクスが何であらうが、バクーニンが何であらうが、それが人類を永久に解放するものでなく、主のほかに生命の感激を覺えるものがないことを示されて感謝いたします。もう少しキリストの精神を我々の心に敎へて下さい。我々のために十字架に懸り給ふたキリストにより、この祈と、願と、讃美を捧げます。アーメン

ルカ福音書梗概

第一章　イエスとヨハネ誕生の豫告—マリヤの詩—ヨハネの誕生
第二章　イエスの誕生—宮への献身—十二歳のイエス
第三章　ヨハネの説敎—イエスのバプテスマ—イエスの系圖
第四章　誘惑—ナザレの宣言と排斥—カペナウム—二つの奇蹟—ガリラヤの宣傳
第五章　シモンの漁—癩病のきよめ—癱瘓を癒す—レビの召應、新運動
第六章　イエスとパリサイと安息日問題(麥摘と癒)—十二弟子と弟子への山上説敎
第七章　百卒長の僕を癒す—ナインの寡婦の息子の甦—ヨハネとメシヤ—女と罪の赦し
第八章　巡回傳道—自然的譬喩—母と兄弟とイエス—湖上の嵐—レギヨンの癒—十二年の血漏の女の癒—ヤイロの娘の甦
第九章　弟子派遣—イエスの隱退—五千人へのパン—弟子の告白—變貌—惡鬼につかれたる少年の癒—弟子の偉大競爭—エルサレム直面—サマリヤと天の火
第十章　七十人派遣—永生の問題とよきサマリヤ人の譬喩—マルタとマリヤ
第十一章　祈禱について(主の祈)—イエスと狂的分子—イエスと豫言者—イエスのパリサイ攻擊(四二—

五二

第十二章　（譬）イエスの教訓—靈魂の馬鹿者—（譬）主人と僕—革命的願望
第十三章　（譬）三年を待つ園丁—十八年鬼につかれた女癒さる—芥種とパン種の譬—エルサレム直行—閉されし門—ヘロデのイエス排斥—エルサレムの爲に悲しむ
第十四章　再び安息日問題—宴會の上席—貧民弱者召宴—十字架と覺悟—戰爭豫算
第十五章　（譬）失はれたるもの三つ—羊—十枚の貨幣の一つ—放蕩息子
第十六章　慾深き番頭—パリサイと番頭の狡猾と地上の富—離婚問題—乞食ラザロ
第十七章　最微者への愛—罪を赦せ—食卓の譬—十人の癩病人—神の國は何時來るか
第十八章　祈の奬勵の譬二つ—寡婦と稅吏の祈—富者と天國—一切を捨てゝ—十字架の豫言、バルテマイ
第十九章　ザアカイ—遠國へ行く王の譬—乘らざる驢馬—エルサレム入城
第二十章　論爭の日—ヨハネの位置—農園の譬—稅金問題—甦—キリスト論—パリサイ攻擊
第二十一章　レプタ二枚を献ぐる女—神殿の運命—終末の日
第二十二章　ユダの反逆—訣別の宴—ペテロの失敗—ゲツセマネ—捕縛—祭司長廳の審判
第二十三章　ピラトの審判—ヘロデの審判—再びピラトの審判—十字架
第二十四章　イエスの復活—エマオにて—エルサレムにて十一人に現る—ペタニヤより昇天

第四章　十字架の福音

—ヨハネ福音書概要—

愛の冒險

何故キリストは死刑になつたか？　これに答へるのがヨハネ福音書である。

ヨハネ福音書は特別な書で、ヨハネ傳によらなければ、何故イエスが十字架についたかはつきりしない。イエスキリストの傳記をマタイ、マルコ、ルカが書いてはゐるが、不充分である。批評家もあれこれ云ふが、ヨハネ傳を讀めば讀む程、イエスが十字架にかゝつた順序がわかつて來る。ヨハネは、マタ

イ、マルコ、ルカと違ひ、官憲の立場からイエスを見てゐる。精しく云ふなら、キリストの弟子になつた官公吏の中に、キリストの事情に通じた人が居て、精しくヨハネに報告したのであらう。だからヨハネ傳を見ると、キリストが殺されるに至つた原因が判る。比較的キリストに就て正確だと云はれてゐるマルコ傳にも、裁判事件が突發的に書かれてゐるだけでは、キリストが殺された事情は判らない。ヨハネ傳を僞造空想の書だと或批評家は云ふが、それは間違つてゐる。

ヘロデ・アンチパスの大臣クーザの妻ヨハンナが、キリストにいつも從いて廻つた事、またアリマタヤのヨセフやニコデモと云ふ人々から材料が出てゐることは、よく讀むと判る。ヨハネ傳は初めから官憲の目でキリストを見たことが一貫して出てゐる。それによつてキリストが殺されるに至つた順序が面白く目に見えて解る。

イエスが十字架にかゝるに至つた理由に三つの傾向がある。卽ち、（一）官憲、（二）キリストの意識、（三）聖書の豫言で、これらが完全に一致して現はれてゐるのがヨハネ傳で、マタイ傳には豫言ばかり、マルコ傳にはキリストの意識がちよつと出てゐるだけである。が、どつちかと云へば、マルコ傳はキリストの意識の露出も、官憲側の見方もなく、ローマの官憲の目にとまつて見られても、危險分子でないことを示す爲に初めの書き振りからして違つてゐる。これは驚くべき事だと云ふ超人的キリストを書いたのみで、ヨハネの革命的キリストを拔かしてゐる。ヨハネ傳によると、四千人、五千人がたゞキリストの不思議な業を見に行つたのでなく、革命のためにイエスを昇がうとして、集まつて來たのである。

（ヨハネ六ノ一五）聖書學者は革命が解らず、群衆心理が解らないが、我々勞働運動者にはよく判る。斯ういふ處は官憲に見付けられると大變だから、マルコやルカは書いてゐないのである。

ヨハネはそれを無雜作に書いた。この點に於てヨハネ傳は最も面白いもので、ヨハネ福音書を讀まずして、キリストの宗教は解らない。十八、十九世紀の批評家は群衆心理が解らなかつた。「イエス彼らが來りて己をとらへ、王となさんとするを知り、復ひとりにて山に遁れたまふ」（ヨハネ六ノ一五）の記事はヨハネ傳だけにしか書いてない。之がヨハネ傳の骨子である。マルコ傳には「ユダヤ人の王なり」と云ふ棄標を書かれてあるが、（マルコ一五ノ二六）その「ユダヤ人の王なり」をどうして祭司の長が書かしたか譯がわからない。ヨハネ傳を見ると、五千人が集つた時に、人々がイエスを王になさんとしたとある。

ヨハネの入獄と死

イエスの生涯に二つの山がある。一度はバプテスマのヨハネが入獄した時で、この時がキリスト傳の一つの區劃をなしてゐる。マルコ傳第一章十四節を見ても「ヨハネの囚れし後」とあつて、之は非常に大事な處である。ヨハネの入獄は、キリストの社會運動に於る一つの危機である。もう一つはヨハネが殺された時であつた。このヨハネが殺された時に革命が勃發した。それが五千人が集つて來た理由である。ヨハネ傳第五章の終から六章の初にかけて、その事が問題になつてゐる。ヨハネ傳第五章六章には何等事件が起つてゐないが、この處をマルコ傳やマタイ傳を見るとはつきりしてゐる。マルコ傳第六章二十七節から三十三節の記事の書き方は穩健に書いてあるが、三十三節の「それとしり」と云ふ事によ

つて判る。イエスが休みに行つたが、山に隱謀を企てに行つたと思つて、群衆は革命的な氣持を持つてゐた。使徒行傳第五章を見ると、今迄に二度革命に失敗したことが書いてある。キリストが十歳位の時ガリラヤのユダが起つた。またチウダが四百人ばかりの同志と共にアラビヤで革命を起したこともあつたが、失敗に終わた。斯ういつたやうにいつも革命の使嗾があつた。キリストの弟子の中にもさういふ人間がゐた。革命主義者のゼロテのシモンは左翼の人間で非稅主義者であつた。が、また右翼のマタイの如きも居た。キリストは左翼も右翼も包含してゐるが、大體に於てさういふ暴力によつてユダヤに革命が成功しなかつた。ユダヤに革命が來るのは、國民の良心の深ひ悔改めだとキリストは云はれた。それを理解するには、キリストの意識を考へなければならぬ。

聖書を讀めばよく解る。キリストは意識してゐた。官憲がそれを實現さしたのである。斯樣にヨハネ傳は、三重の層が一致した事を書いてゐる。

キリストの意識

キリストを殺すと云ふ最初は第五章に始つてゐる。そこにはキリストが安息日を平氣でぶち壞した事が出てゐる。第五章十八節を見ると、「これに由りてユダヤ人いよ〳〵イエスを殺さんと思ふ。それは安息日を破るのみならず、神を我父といひて己を神と等しき者になし給ひし故なり」とあつて、この事はキリストがいよ〳〵殺されることになつた第一の記事である。たゞ安息日だけでなく、己を神と等しくしたと書かれてあるが、キリストの意識の中に、神と己が等しいと云ふことがある。これは考へやうに

よれば、危險思想である。

デモクラシーに二通ある。人間のデモクラシーと神のデモクラシーである。人間の技術には差等がある。だから人間だけで解放せられた事はない。ギリシヤのデモクラシーを見ると、ギリシヤ人だけがデモクラシーで、他民族はデモクラシーでない。プラトーが考へたものでも、賢い者だけがデモクラシーの仲間に入られて、つまらない者はデモクラシーの中に入れない。が、キリストのデモクラシーはどんな詰らぬ者でも、神のデモクラシーで抱擁しようと云ふ。だからキリストのデモクラシーは最高のものである。道德狀態が崩れると神のデモクラシーが崩れる。ヨーロッパに於る闘爭は、神のデモクラシーと人間のデモクラシーの闘爭であつた。マルクスのデモクラシーは人間的デモクラシーである。が、ヨハネ傳は神のデモクラシーを說いてゐる。それがロマ人には非常に恐ろしかつた。大工が神と等しいと云ふことは怪しからぬことだ。卽ちローマ法王は聖書を讀ませなかつた。法王が自分の地位だけを守らうとした時に、聖書は危險文書であつた。

この聖書ほど力强いものはない。日本の政府が墮落したことは、不思議でない、人間デモクラシーであるからだ。人間デモクラシーは墮落し易いが、神のデモクラシーになると、政治が公明になる。勞働者、弱者、貧民が神の子であると云ふ事が判らなければ、眞の普通選擧は判らない。キリストは暴力を使はれなかつた。然し神の力は銃劍以上に强い。

社會は三重の層になつてゐる。無意識的社會と、半意識的社會と、意識的社會である。

無意識的社會は機械的であつて發狂者や低能、夢見てゐる人間が居る。斯ういふ機械的生活をしてゐる者を、意識してゐる者が引張つて行かなければならぬ。だからこの部分には武力、暴力が必要である。で、氣狂がある間、この種の强制が要る。昔は戰爭するとよく氣狂になつた。だから無意識時代には强制が要る。半意識的になると、强制が警察制度になる。惡い事が判り、倫理的になるこの時代に豫言者が現れる。

そしていよ〳〵意識がついた時は、武力なんか必要でない。神の國運動はこの意識行動である。神の意識が人を捉へるやうになつて來れば、みんな神の意識になり、我儘が無くなる。そして世界に監獄は要らなくなる。キリストの十字架とはその我儘を磔殺にかけたことである。卽ち自我狂を十字架にかけてゐる。それを神の國とキリストは云はれた。弟子達はキリストが王になつて自分が大臣になりたいと思つた。そして自分だけが偉いものにならうと云ふ感じがあつた。

今でも豫言の判らぬ人がゐる。が、だん〳〵目醒めて來るのが豫言運動である。キリストが最も小さいものが最も大なるものだと云はれたのは、小さくとも意識した神の子が、半意識的豫言者よりも偉いと云はれたのである。

官憲の態度

次には官憲の方から見よう。

その中には、イエスを捕へんと欲する者もありしが手出する者なかりき（ヨハネ七ノ四四）

群衆の中にはキリストを捕へようと云ふ人間も居た。ヨハネ傳第七章四十五節から五十二節迄の材料は多分ニコデモから出たものであらう。

爰に彼ら石をとりてイエスに擲たんと爲たるに、イエス隱れて宮を出で給へり。（ヨハネ八ノ五九）

ユダヤ人また石を取りあげてイエスを擊たんとす。（ヨハネ一〇ノ三一）

そしてヨハネ傳第十一章四十七節を見ると議會を開いて、イエスを殺すことを決議してゐる。（ヨハネ一一ノ五三）この七十人議會の中にはヨセフやニコデモが居て、イエスを信じてはゐたが、イエスを殺すことを決議してしまつたのである。そしてその議會の命令でユダヤの村々に制札が立つた。（ヨハネ一一ノ五七）で、その時にキリストはエフライムに逃げた。この事情はヨハネ傳のみに書かれてゐる。

何故ユダがキリストを賣つたか。ユダはあの金を貰ひたいばかりにキリストを引渡しただらうか。制札が辻に立つてゐてキリストを告げるものあらば金をやると云はれてゐたから、キリストの在處を知つてゐたユダが告げたのである。クーザの妻ヨハンナなどは、十字架にキリストがかゝる最後までついて來た。ピラトの妻君の云つたことが、ヨハネ傳の著者に判つたのは、ヨハンナが居たからであらう。

キリストの贖罪意識

キリストの神の羔羊の意識は、バプテスマのヨハネが、イエスを「見よ、これぞ神の羔羊」と云つてから（ヨハネ一ノ三五）キリストの腦天にこびり付いてゐたのだらう。無意識時代には神にあやまる事は漸く判つてゐたが、人間があやまらなければならない氣持が判らなかつた。半意識時代には羊にあやま

らせて置けばいゝと思つてゐたが、人間があやまらなければならないと意識して來た時には、キリストが十字架にかゝらなければならなかつた。儀式と云ふのは、半分は無意識で、半分は意識してゐる。全意識になると、自分の罪のみならず、人の爲にも死なければならぬと云ふ連帶意識になる。連帶意識と云へば、贖罪意識で、人の缺點までも引受けようと云ふのである。昔は儀式でやり、羊で濟ませたが、キリストは初めからこの社會連帶から贖罪意識を持つてゐられた。

で、キリストは初めからそれとなしに云はれて、ガリラヤの絶頂の時代に於ても十字架を意識してゐられる。元來豫言者は殺されるに決つてゐる。キリストも自分だけ免れるとは考へてゐられなかつた。我々の運動も愛がなければ出來ない。今日でも村のため、勞働階級のため、禁酒のために眞劍に戰はうとするなら、殺されることは決つてゐる。その豫言は聖書の中にずつと書かれてゐる。

弟子達はこのまゝ王になると思つてゐたが、キリストは謙遜に贖の道を通り、十字架にかゝると云はれてゐた。キリスト教信者の中にも、自分だけ修養すればいゝと云ふ個人主義的な人も居る。またキリスト教になれば成功するからと云つて信じてゐる人もあるが、その人々は成功のキリスト教で、教會などはどうでもいゝと思つてゐるであらう。が、キリストのキリスト教は失敗と尻拭のキリスト教である。そこに十字架があつた。それがヨハネ傳に於てもつとも完全に現はされてゐる。（ヨハネ一二ノ二四）

天の父、我々はまことに愚かもので、深い贖、十字架の道が判りません。ヨハネ傳により、おぼろげながらキリストの道がわかり、罪の贖が判りました。今十字架の道をはつきり教へられて感謝いたします。どうか我々にその尊い體

驗をもう少し敎へ、我々自身が小さいキリストになり、成功キリスト敎でなく、日本を救ふ爲に自分の身體をキリストに捧げなければならぬことを覺悟させて下さい。イエス、キリストにより　アーメン

ヨハネ福音書梗概
第一章　道としてのキリストの出現とヨルダン河に於るイエスの行動
第二章　カナの婚筵とイエスの第二の奇蹟—エルサレムに於るイエスの宮潔め
第三章　エルサレムに於るニコデモとの對話
第四章　サマリヤ人との對話
第五章　過越節の際エルサレムのベテスダの池に於るイエスの說敎
第六章　民衆イエスをとらへて王とせんとす—五千人の招宴—多くの弟子達イエスを見棄てる
第七章　イエスと彼の弟子達との意見の相違—エルサレムに於る出來事
第八章　姦通せし女に對するイエスの赦しと世の光に關するイエスの說敎
第九章　エルサレムにて生れながらの盲人を癒せし話—それより起りし官憲の取調
第十章　牧羊者の例—修殿節の際のイエスの說敎
第十一章　ラザロを復活せしめた話—元老院イエスを殺すことを決議す
第十二章　ベタニヤのマリア、イエスに油を塗る—ギリシヤ人イエスに面會を求む—イエス宮にて民衆を敎ふ
第十三章　イエスの最後の節宴
第十四章　最後の節宴に於るイエスの敎訓
第十五章　最後の節宴に於る新しき戒めに關するイエスの敎訓
第十六章　最後の節宴に於るイエスの敎訓
第十七章　苦難と聖靈に就てのイエスの祈
第十八章　イエスの捕縛
第十九章　審判
第二十章　復活
第二十一章　ガリラヤ湖に於る弟子と復活せるイエスとの問答

第五章　聖靈の福音

使徒の行動記

—使徒行傳の概要—

どんな順序で、死刑になつたキリストの宗敎が世界に擴るやうになつたか？　これを敎へてくれるのが使徒行傳である。

使徒行傳第一章を讀むなら、之がルカ傳と連續してゐることが解る。卽ちルカ傳第一章と使徒行傳一章がつゞいてゐる。ルカ傳一章四節に「テオピロ閣下よ」と出てゐるが、使徒行傳一章一節にも「テオピロよ」とある。そして「前の書をおくりて」とあるのはルカ傳のことである。卽ち、ルカ傳の著者と使徒行傳の著者とは同じ人である。話がつゞいてゐるのが面白いと思ふ。

ざつと讀むと解らないが、使徒行傳の中には暗鬪もあれば衝突もある。第十五章はエルサレム會議の模樣を書いてゐるが、ペテロの傾向とパウロの傾向の鬪爭が出てゐる。そしてつひに、パウロ思想が必要だと云ふので、それに決定して、新しくその會議で使徒を傳道に派遣してゐる。

ペテロ系は國粹主義で、パウロ系は普遍主義であつた。國粹主義の宗敎は片寄り、普遍主義は個性が淨められたる場合にのみ普遍的であり得る。個性主義になれば世界主義になり、世界主義にならうと思へば個性主義にならねばならぬ。

それがペテロに解らなかつた。使徒行傳第十章を見ると、まだペテロはやきもきして、コルネリオの處へ行かうか行くまいかと煩悶してゐる。まだ夢を見て、個性主義に醒めてゐない。然し彼も遂に國粹主義より目醒めざるを得なくなつた。そして彼は外國傳道に出發した。

ピリポとステパノの行動

使徒行傳の中には、ピリポとステパノといふ人物が出てゐる。が、彼等は所謂使徒ではない。使徒と云ふのには條件がある。キリストイエスのバプテスマから、その十字架までを見たものが使徒である。

が、ピリポやステパノは偉い人物で、彼等は使徒ではなかつたが、美しい人格の持主であつた。パウロはこのステパノの感化を受けた。使徒行傳第十三章のパウロの說敎は、ステパノの說敎の繰返しで、その上にパウロ的愚寵思想が加はつてゐることを發見する。卽ち、ステパノ、ブラス、パウロの恩寵の體驗である。ステパノは立派な學者で、一種の因襲に對する反抗主義者であつた。然し彼には徹底してキリストが解つてゐた。ステパノ一人でエルサレムが動いた位である。

ところが他の連中は聖靈を受けたが、まだ眞のキリスト敎は解らなかつた。しかし不思議に奇蹟だけは行へた。今日でも、聖書をその通りに讀んで實行すると、使徒行傳の奇蹟が起る。

パウロも途中から這入つた人だが、不思議に聖靈を受けることにより奇蹟が行へた。だから、ルカはペテロの出來る事がパウロにも出來ないことはなかつたと書いてゐる。ペテロがタビタといふ女を蘇生さすと、パウロも三階から落ちた者を蘇生さすことが出來たと、依估最眉なしに書いてある。

しかし奇蹟より大きなことは、キリスト敎が世界的になるために凡ての境遇に適應して行つたと云ふ事實である。我々の中に於ても國粹的な、縮まつた窮屈なものでなく、階級を越え、民族を越え、罪惡を越えて一つになり得ることは、大きな奇蹟である。我儘がなくなり、神の子になり得ることは全く奇蹟の奇蹟である。

世界的運動

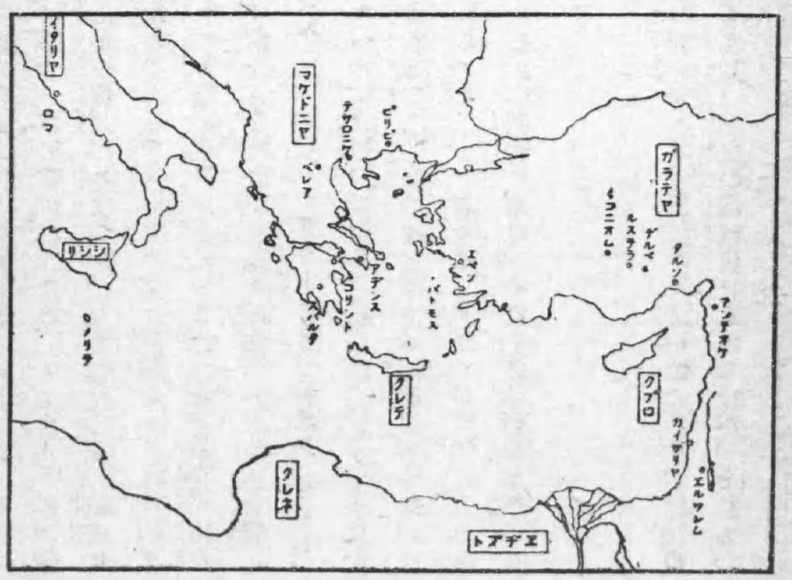
使徒行傳第一章はエルサレムの二階座敷の話で始まつてゐるが、サマリヤ、ガリラヤ、シリヤ、それ

からだん〳〵世界全體にキリスト敎が擴まることが預言されてゐるが、その豫言通りになつた。卽ちサマリヤ、次にアンテオケと云ふ風に擴まつて行つたことが第十一章に書かれてゐる。アンテオケには豫言者が澤山ゐた。ギリシヤ人がゐた。そして、ギリシヤ人から傳道が始まつた。(第十一章十九節)迫害に散らされた者がだん〳〵ばら〳〵になつて福音が傳はつたのである。次いでクプロ島からキリキヤのアンテオケ、イコニオム、ルステラ、デルベ、そしてガラテヤ方面に福音が這入つて行つた。使徒行傳第十四章には、ルステラに於ける騷擾事件が書かれてゐる。第十五章には紀元五十年のエルサレム會議、第十六章は、パウロの第二傳道が書かれてゐる。卽ち、パウロはアジアよりヨーロッパに渡り、ピリピ、テサロニケ、ベレヤ、アテンス、コリントに行き、船でエペソに立寄つてゐる。(第十六——十八章)第十九章はエペソ傳道が記載してある。それから第三回の大傳道卽ち二回目のヨーロッパ傳道があつた。そしてパウロはまたエルサレムに歸つてきて、すぐ捕へられた。第二十七章では、パウロが監獄に入れられローマに送られる途中破船に遭ひ、後ローマ市に安着したことが報告せられ、それで使徒行傳が終つてゐる。

イエス行傳として

使徒行傳は使徒の行狀の記錄であると共に使徒の祈の記錄であり、使徒の奇蹟行傳であり、使徒の慈善行傳であり、傳道行傳であり、それは勝利の記錄でもあり、思想の發展史でもある。が、それらの記錄の背景に不思議なる魂が附纏つてゐる。

使徒行傳は、キリストの昇天をその第一章に書いてゐるが、（使徒行傳一ノ九）また屢々弟子に不思議なる作用を以て働きかけたことを書いてゐる。殊にその弟子パウロに對しては謬ることの出來ない事實である。そしてこれがパウロと他の弟子との論爭になつてゐる。コリント前書第九章一節に「我は自主の者ならずや、使徒にあらずや、我らの主イエスを見しにあらずや」と書いてゐるが、パウロが何處で肉體のキリストを見たか私は知らない。パウロの見たと云ふ意味は、遠くとつそり見たと云ふのでない。パウロは行詰ると幻を見た。例へば使徒行傳第十八章の十八節以下がそれである。之はパウロが、第二回目の傳道旅行で、コリントに行つた時であつた。キリスト教の「キ」の字も知らない町であつたために、パウロがいくら傳道しても應へがない。その時眞夜中にキリストの幻がパウロに現れた。そして激勵して云はれた「おそるな、語れ、



默すな」と。

使徒行傳には出てゐないが、ガラテヤ書には、タルソから出て來た時の不思議な經驗が書かれてゐる。（ガラテヤ書二ノ一―二）此處に出てゐる默示と云ふのは、斯うした幻であつたらう。第三回の傳道旅行が終りエルサレムでもまたキリストの幻が現れた。（使徒行傳二三ノ一一）斯樣なる譯で、パウロは第一回はエルサレムからダマスコの途中で、第二回はエルサレムで、第三回はコリントで、第四回はエルサレムの獄舍で、はつきりとキリストを見たと使徒行傳に書いてゐる。その外パウロが難船した場合に、神の使に激勵を受けたが、之また幻である。（使徒行傳二七ノ二三）この場合「主」と書いてなくて、神の使と書いてあるから、神の使と主とを別に考へなければならないであらう。パウロはある心理狀態から、活けるキリストが斯く彼を導きつゝあることを信じ、自分が自分を支配してゐるのではなく、自分以上のキリストの幻が自分を導いてゐるのだと思つてゐたのである。

我々が弱つてゐる時にキリストが激勵してくれる。我々はキリストの內的作用を考へなければならぬ。キリストは宇宙の愛の法則と力の權化そのものである。「愛」とは卽ち、キリスト愛の外に眞の愛はない。それが人間的に、人格的に結晶してある焦點を持つ。それが人間としてのキリストに現される。さういふ愛は絕滅せず永久性のものである。その深いキリスト愛が、我々の裡に內在して作用してゐる。之は單なる心の作用でなく、キリストの作用であり、永遠の再生として我等を指導してゐてくれるのである。

聖靈行傳として

使徒行傳はまた聖靈の働きを書いた書物である。

聖靈は信仰生活の初歩の人には感づかない。聖靈があまりぼんやりしてゐて、さういふ働きがあるかないか解らない時がある。使徒行傳第十九章二節を見ると、聖靈のあるだに知らないと云ふ人がエペソに居た。

聖靈は神の内住を意味してゐる。凡ての宗教の歴史を見ても、初期の宗教は超越に關する記錄で、人間以上のもの、卽ち神、天、超越といふ信仰が多いが、人間のうちに尊い性質を發見すると共に人間の内部生活により神的なものを崇拜する傾向が出來る。英雄とか祖先崇拜である。で、我々が神を省いて、キリストだけを神とするなら、それは偶像教になつてしまふ。けれどもキリストは宇宙の凡ゆるものを相續した人間以上の力を、人間の中に神が現し給へるもので、イエスと云ふ大工がキリストとして現れたのである。人間の中にもこの神の表現性がある。人間の外側に神が居るのみならず、我々の中に在り、また我々を貫いて神があることを確信するやうになつてから、斯ういふ事が解つて來たのである。この神の内住性を理解しなければ、聖靈は解らない。

斯く聖靈は神の内住性であるが、神の力が、我々の内側に入れば、實に恐ろしい力となる。卽ち聖靈は神の智慧として、神の情緒として、神の意志として、人間の内部生活を貫いて働く。卽ち豫言（智）を通し、律法（意志）を通し、また詩（情）を通して働く。キリストはそれを、はつきり云つてゐられる。

（ルカ傳二四ノ四四—四五節）

キリストは自分でキリストとは云はれなかつた。十字架にかゝらなければ、自分はキリストにならないから、死なない前にキリストだと云ふことは出來ない。自分が死んだ後聖靈によらなければ判らないと云つてゐられる。キリストが磔刑にかゝらなければ、贖罪は完成しないと考へられた。然しキリストの死が贖罪の死であることを民衆に理解させることは、全く聖靈の力であると信ぜられたのであつた。ペテロも最初はそれが充分判らなかつたらしい。それで『イエス、イエス』と言つてゐるが、使徒行傳第二章三十六節にキリストと云つてゐる。

之は聖靈によつた言葉である。イエスとキリストとは違ふ。イエスは人間で、キリストは天地を創造した神の御子である。我々が「イエス・キリスト」と云ふのは、何でもないと思つてゐるが「イエス・キリスト」と云へることは、全く聖靈の導きによるのである。

神の内住と人間の完成

我々が聖靈を受けて神の事が判つて來ると光が來る。

次には感情卽ち、愛と慰めが與へられる。だから聖靈を「慰め主」と云ふ、我々の傷を癒してくれる。ヨハネ傳第十四章十七節には「眞理の御靈」と書いてある。その眞理の御靈が使徒行傳第二章には『言』となつて現れた。

次に意志として、これは潔めの靈である。この三拍子が揃はなければならぬ。使徒行傳ではそれが實

行性をとり、そのきよめの靈が奇蹟になつて現されてきた。

ところが、この聖靈が不思議な働きをするので之を買ひたいと云ひ出したものもあつた。（使徒行傳八ノ一八、一九節）奇蹟なども聖靈によりきよめと共に與へられる。聖靈は、不思議にいろんな形に表れてくる。キリストは息を吹きかけて、「聖靈を受けよ」と云はれた。

聖靈は卽ち確信である。キリストの默示に對する確信である。それが傳道となつて現れ、聖靈により次々に發展して、異邦人にまで聖靈が與へられたのであつた。それは祈と共に與へられた。

使徒行傳第十章三十八節には、キリストもまた聖靈に充され各地を廻つたと書いてある。更に同十章四十五節には、外國人にはこの聖靈が來ないと思つてゐたものが、ローマ人にも神の內住が實現せられて、聖靈がはつきりと働き給ふたことが記載されてゐる。

使徒行傳第十三章二節には、アンテオケ教會の運動が聖靈の働きであることが記載せられてゐる。使徒行傳に出てゐるペンテコステ、執事の選定、教會の新しき傳道の出發などは、みな聖靈の示しによつてゐる。卽ち新しい運動が起る度每に、神の內住があらはれてゐる。

ペテロにしてもパウロの運動にしても全く聖靈の運動である。ステパノ、ピリポ、バルナバ、アポロの働きは凡て聖靈の體驗を基礎としたものであつた。だから、我々が、聖靈の體驗を持たなければ、新しい宗教運動は出來ない。また神の內在の經驗卽ち聖靈の經驗がなければ、生活に潔めを受け、眞理を悟り、迫害に、苦難に、平安と慰藉を發見することは出來ない。使徒行傳は初代教會の苦難を通じて、

如何に聖靈が働き給ふたかを敎へてくれる體驗の記錄である。

天の父なる御神、

我々に聖靈を與へて下さい。求むる者に聖靈を與へざらんやと、イエスは約束し給ひました。願くは民衆をして理解せしめ、神の慰と一致と、喜と眞理を與へ、實行性の宗敎を我々に徹底せしめて下さい。

農村は苦しみ、漁村はなやみ、町の勞働者が迷ふてゐる時に、全く聖靈のなぐさめを與へて下さい。そして日本をきよめ、殊に淫猥なる遊廓のある日本を淨めて下さい。どうかあなた御自身が我々を導いて下さい。日本のみならず、アメリカ、イギリス、獨逸、ロシア、特に支那の上に、朝鮮の上に、あなたの諸民族の上に、あなたの愛と慰を經驗せしめて下さい。キリストの御名によりて祈ります。アーメン

使徒行傳梗概

第一章　キリストの昇天と反逆者ユダの補缺選擧
第二章　聖靈の靈動とペテロの說敎、共產生活始まる
第三章　美門の跛者癒され、ペテロ民衆に敎ゆ
第四章　元老院使徒を審判し後釋放す、弟子達財產を賣り、
第五章　共產運動進む
　　共產生活の裏切者アナニヤと其妻サツピラ罰せらる、ペテロ奇蹟を行ふ、使徒達投獄せらる、主の使者彼等を救ふ
第六章　七人の執事選任、ステパノ捕はる
第七章　ステパノ殉敎
第八章　迫害起る、ピリポの傳道
第九章　迫害者サウロの悔改、ペテロの奇蹟
第十章　ペテロ萬國主義に改心す
第十一章　エルサレム敎會萬國主義に傾きアンテオケ敎會動く、サウロは飢饉の救濟運動を始む
第十二章　ヤコブ殉敎、ペテロの入獄と奇蹟的釋放
第十三章　アンテオケ敎會の外國傳道計企、バルナバとサウロ第一回巡回傳道に向ふ
第十四章　第一回傳道旅行のつゞき
第十五章　エルサレム會議と萬國主義の採用、アンテオケ敎會、第二回傳道旅行を計劃す
第十六章　パウロ第二回の大傳道旅行に出發す、福音歐洲に入る、パウロ、ピリピにて投獄せらる
第十七章　テサロニケ、ベレア傳道の後、パウロ、ギリシヤの首都アテンスに一大講演をなす
第十八章　パウロ、コリントに傳道し、後エペソを經てエダヤに歸る。彼更に第三回傳道旅行に出發す
第十九章　エペソ傳道
第二十章　パウロ、エペソより更にコリント及マケドニアの傳道をなし、舟にてエペソに立寄り、エペソ人と告別す

第二十一章　パウロ聖都に歸る、民衆彼を殺さんとす
第二十二章　民衆に對するパウロの大演說
第二十三章　元老院議會に於るパウロの演說、パウロを殺す決死隊現る、彼カイザリアに降る
第二十四章　知事ペリクス、ペテロを取調ぶ、後知事交替す
第二十五章　新知事及ヘロデ、パウロを審理す
第二十六章　王と知事前のパウロの大演說
第二十七章　パウロ難船す、マルタ島へ漂流す
第二十八章　ロマ市に於るパウロの入監中の傳道

第六章　警醒の福音

―テサロニケ前書の概要―

パウロの書翰

新約聖書二十七卷中十三卷はパウロの書いた手紙である。そしてその十三卷が年代順にならべてなく、厚いものから先に置かれてゐるので、考へ方の發達の徑路が解らない。ベルリン大學のダイズマン教授とオックスフォード大學の故サンデー教授との研究を比較して見ると餘りちがつてゐない。それに私の意見を加へると大體次のやうな順序になる。私はこの書物を編輯する場合にも聖書の配列に從はないで、パウロの思想大系とその進歩を知る爲に、年代順に配列した。

1　テサロニケ前書（警醒の福音）　2　テサロニケ後書（勞働の福音）　3　ガラテヤ書（自由の福音）
4　コリント前書（愛の福音）　5　コリント後書（自在の福音）　6　ロマ書（恩寵の福音）　7　ピレモン書（解放の福音）　8　コロサイ書（完成の福音）　9　エペソ書（一元の福音）　10　ピリピ書（歡喜の福音）　11　テトス書（實行の福音）　12　テモテ前書（友愛の福音）　13　テモテ後書（剛健の福音）

パウロは最後の手紙を書いて、多分紀元六七年、ロマで首打になつて殺されて了つた。先づ私は順序としてテサロニケ前書から瞑想して行きたい。

聖雄の足跡

苦難に直面して苦難を恐れざるは英雄である。使徒パウロは「患難に遭ふことの我らに定りたるは、汝等自ら知る所なり」（テサロニケ前書三ノ三）と、テサロニケの信者に書き送つてゐる。世界の征服者ジユリアス・シーザーは、勝利を豫期して戰に出たが、使徒パウロは、苦難を豫期して聖戰の陣についた。然し、苦難を說く者も英雄ならば、苦難を說かれて平然として之を忍ばんとするテサロニケの信徒達も英雄であると云はなければならぬ。亞細亞の心臟エペソの傳道を聖靈によつて阻まれた使徒パウロは、長驅してトロアスに出で、詩聖ホーマアの昔物語を打ち忘れ、幻に見たマケドニア人の後を追ふて、ヘレスポンド海峽の南を渡り、ヨーロツパの各地に轉戰し、ピリピで投獄せられ、そこを去つてテサロニケに出た。（使徒行傳一六ノ一一、一二節、テサロニケ前書二ノ二）そこでも迫害に遭ひ、ベレアに逃れ、更に船に乘つてアテンスに出た。（テサロニケ前書三ノ一）そこでテサロニケの迫害のことを聞き、テモテを送り（テサロニケ前三ノ二、六）テモテの復命を待つて書いたのが、テサロニケ前書である。テサロニケ前書は比較的に短い書簡であるけれども、パウロの書いた手紙としては、情熱に滿ちた明いものである。

テサロニケ前書第二章には、コリント前書やコリント後書の情熱がそのまゝ出てゐるし、第三章、四章、五章を見ると、エペソ書やコロサイ書の神秘主義が泌み出てゐる。彼は、テサロニケに於る迫害を

聞いて、大いに昂奮を感じたと見え、書中到る處に緊張が漲つてゐる。

苦難の蹂躙

彼はその迫害をキリストがユダヤ人に殺された迫害と同じものだと云ひ、彼自らがその苦しみを覺悟して、世界傳道に出てゐると云ふてゐる。(テサロニケ前二ノ一四)幸ひにもテサロニケの兄弟達は、迫害に怯えず、反つて愛に速力を加へ、驚くべき力をもつて、マケドニヤの各地に宗教的宣傳を續けて行くことをきいて非常に喜んだ。(テサロニケ前三ノ六、七)これに滿足したパウロが、晩年に書いた手紙などに比べて、非常に元氣のいゝ調子で筆を進めてゐる。

第一章は、意志の完成とキリストの再來とを關聯して、懇切な教訓を與へ、第二章は、智慧の完成とキリストの再來をひつ付けて、信仰の動搖せざるやうに訓戒し、第三章は、愛の完成のために祈りつゝ、キリストの再來によつて慰を得べきことを書き、第四章は、舊道徳より新道徳に移つたテサロニケの信者が信仰の完成によつて凡ゆる苦難を貫き、キリストの再來の日迄忍耐べきことを教へてゐる。第五章は殆ど今迄書いて來たことを綜合して、生活の完成を說き、目を醒ましてキリストの再來を待つべきことを忠告してゐる。即ち、智情意の生活に、信仰に、日常生活に、より進んだ領域を開拓し得るやう、パウロは勸めてゐる。(テサロニケ前三ノ一二、同五ノ二三)

キリスト再來の意味

然し或人は、すぐ尋ねるであらう。何故パウロは、迷信深くも、キリストの再來と信仰の完成をひつ

付けたか？キリストの再來は未だに起らないではないか。キリストの再來に緊張の基礎を置くことは迷信ではないかと。かうした質問は、社會心理と宗教心理の兩面から精神分析的に研究すべきものだと私は思ふ。私は、パウロのこの手紙は決して胡麻化しに書いたものだとは思はない。

人間が墮落すると、人間以上の力が具體的に出現して、審判と救濟を完全に行つてくれることを豫期するものである。之は、一種の社會的神秘主義と考へていゝだらう。あのローマの墮落時代に、キリストの再來を待たないとすれば、その人こそどうかしてゐる。善人が惡人に苦しめられた場合、洪水に救手を求める時のやうな同じ心理が働く。ある年の正月元旦、私は破戸漢に殺される目に遭つた。彼は九寸五分の短刀を私にひらめかして、今にも私を一刺しに刺殺さうとした。その白刃を見た瞬間、私の頭に浮んだことは、キリストの再來であつた。その時、突然としてキリストが、お現れになつたらば、どんなに痛快であらうか。善人を苛めてゐる惡人にとつて、それが何と云ふ皮肉であり、みせしめであり、また狼の前の小羊の群にとつて、何と云ふ大きな慰であらうか。そんな事を私はその瞬間に考へた。その時まで私はキリストの再來をたゞ、教義の上に於て面白い信仰があつたものだとのみ考へてゐた。然し、白刃の下を潜つてから私は、再來信仰は、白刃の下を潜つた者のみ、迷信でなくして信じ得られるものだと解つた。

世人は、キリストの福音が十字架の血潮を通過して、世界に宣布せられた事を忘れてはならない。十字架の半面には必ず、再來思想が伏在してゐる。十字架の血潮を見たものは恐らく再來思想を信ぜずに

は居られないであらう。それは精神分析的事實であつて、理屈や教義では解るものではない。勿論、机上の信仰や、ブルジョア氣分で、かうした血みどろの福音が信じられる道理がない。

パウロがキリストの再來を信じたのは、白刃の下を潜つて來たからである。パウロがテサロニケ人にそれを信ずべきことを勸めたのは、テサロニケ人が、白刃の下を今潜つてゐたからであつた。

それでパウロは大膽にも、迫害に對する唯一つの慰として、キリストの審判を說いたのであつた。彼はテサロニケ前書の各章の終に、一々それを繰返してゐる。

汝ら偶像を棄て、神に歸して活ける眞の神に事へ、その子の天より來るを待つと云へばなり。（テサロニケ前一ノ九）

之は第一章の終の記事であるが、第二章の終には、

我等の主イエス來り給ふとき、御前に於る……誇の冠冕は誰ぞや。汝らならずや。（テサロニケ前ノ二ノ一九）

更に彼は第三章十三節に「主イエス凡ての聖徒と偕に來りたまふ時云々」（テサロニケ前三ノ一三）と書き、第四章に於ては、十四節より十七節までキリストの再來を說き、「これらの言葉をもて互に相慰めよ」（テサロニケ前四ノ一八）と云つてゐる。第五章に於ても同じく二十二節に、キリストの再來を記載してゐる。

再來思想と慰安

パウロは、之を嚇し文句に用ひたのではない。寧ろ彼は之によつて、迫害に遇つてゐる者を慰めんと努力したのであつた。それを間違へてはならない。然しまた彼はこれを最も嚴肅なる意味に於て信じ、

キリストがいつ來給ふとも、完全な形に於てキリストに面會し得るやう準備しておけ、と警醒の福音を說いたのであつた。パウロが慰の傍、テサロニケ人にキリストの前に完備を說いて居るのも全くこの動機から來てゐる。彼は、不完全な姿に於て、キリストに面會することは恥かしいことであるから、意志に於て、智慧に於て、愛に於て、信仰に於て、生活に於て完備すべきことを說いた。それが第一章に意志の完成を說き、第二章に於て智慧の完成を說き、第三章に於て愛の完成を祈り、第四章に於て信仰の完成を、第五章に生活の完成を勸告してゐる理由である。

テサロニケ前書第一章三節を見ると信仰によりて行ひ、愛によりて勞するといふ文句があり、更に五節を見ると、福音がテサロニケに來たのは、言葉でなくして力であると說き、第六節には、患難の中に、テサロニケ人が如何に、キリストに效ふて信者の模範となつたかを記載してゐる。パウロは、かうしたテサロニケ人の實行力に對して、神に感謝したのであつた。

第二章に於て、彼は更に「識る」と云ふことを度々繰返してゐる。（テサロニケ前二ノ一、二、五、九、一一）また彼は「證」と云ふことを繰返し、（テサロニケ前二ノ五、一〇）またキリストの眞理が迷信でなく虛僞でないことを說いてゐる。（テサロニケ前二ノ三）而も彼は、テサロニケ人が、宇宙の愛の秘密に就て完全な認識に入つたことを神に感謝してゐるのであつた。（テサロニケ前二ノ一三）

第三章に於てパウロは、テサロニケ人が迫害の中に於ても猶愛の生活を持續してゐることを使者として送つたテモテより學んだけれども、彼は更に、テサロニケ人が愛に就てより多き力を與へられん事を

祈つてゐる。

願くは主、汝ら相互の愛および凡ての人に對する愛を増し、かつ豐かにして、我らが汝らを愛する如くならしめ……

われらの父なる神の前に潔くして責むべき所なからしめ給はんことを。（テサロニケ前三ノ一二―一三）

この祈にもある如く、パウロは、テサロニケ人が、愛に完備して、神の前に完全無缺であることを要求したのであつた。パウロが、如何に信仰に於て進歩すべきを要求したかは、第四章一節を見れば判る。

「神を喜ばすべきを知りたれば、ます〳〵之に進むべし」彼は、その當時のギリシャ人が墮落したやうな狀態から離れて、勞働を愛し、克己生活を送り、キリストの再來に就ての確信を持つべきことを繰返し精しく說いたのであつた。（テサロニケ前四ノ一三）卽ちパウロは此處に、實踐的信仰生活の完備を勸告したのであつた。

人生の五重塔

第五章に到つては最も圓熟したパウロの倫理思想を、高いプラトーの哲學によつて敎養せられたギリシャ人にも充分納得出來るやうに、生活の完成を說いてゐる。私はこの書を人生の五重の塔と呼んでゐるが、パウロは、最も完全な形の宗敎道德を此處に敎へてゐる。卽ち、第五章十二節以下を見ると、先づ第一に彼は、尊敬と親睦を敎へ、（テサロニケ前五ノ一一―一二）第二の階段に於て寬容を說き、（テサロニケ前五ノ一四）第三の階段に於てパウロは積極的惡を行ふものに對して如何なる態度に出るべきかを敎へ（テサロニケ前五ノ一五）第四の階段に於て、彼は自己內省を勸め、歡喜と祈禱と感謝の階段を持つべき

ことを必要としてゐる。（テサロニケ前五ノ一七、一八）そして彼は、第五の階段に於て神に關して社會的に行はれる宗敎運動に就ての注意を與へてゐる。（テサロニケ前五ノ一九―二二節）

恐らくは、テサロニケ前書第五章は、パウロの敎へた實踐道德の典型として、ローマ書第十二章とともに愛誦すべき處だと思ふ。

晝の子

「我らは世に屬ける者にあらず、されば我々人の如く眠るごとくせず、醒めて謹むべし」（テサロニケ前五ノ六）パウロは、眞晝の福音を說いた。彼には、暗い處がなかつた。彼は、隱れて現れざるなき神の前に眞晝の生活を送るべきことをテサロニケ人に勸告した。この凡てに完備して緊張した生活を送るべきことの警醒は、現代に於ても福音でなければならない。人生は永久の試驗の連續である。キリストの再來は、宇宙の最後の大試驗である。それ迄怠けて居る氣持で、我々が緊張を破るならば、我々は人生の試驗に落第してゐる。その日、その日を、キリストの再來を待つ心持で送るならば、宇宙最後の大試驗に及第することは受合である。かうした緊張した氣持で、私はテサロニケ前書を今日もまた、繰返し讀んで味づて行く。

父なる神

墮落した現代に、眞晝の福音を敎へて下さいますことを感謝いたします。我々は懶け易く、怠り勝ちなものでございます。冬になれば炬燵に入り、夏になれば綠陰に逃げ込み、春は花に、秋は月に、たゞ自らを樂しましめることを知

つて、神の爲に惱むことを知りません。願くは我々に緊張したる心と、世の弱者のために奮闘する衰へざる志氣を與へ給へ。願くは凡ゆる苦難を通して、キリストの目を樂しみ、絶望することなく健闘せしめ給へ。盜人の夜來る如く、我々を監視し給ふ神の御前に恐れ、つゝしみ、眼を醒まして、我々の良心生活に、將、社會生活に完備することを助け給へ。主イエスキリストによつて願ひ奉ります。アーメン

テサロニケ前書梗概

第一章　意志の完備とキリストの再來
第二章　智慧の完備とキリストの再來
第三章　愛の完備とキリストの再來
第四章　信仰の完備とキリストの再來
第五章　生活の完備とキリストの再來

第七章　勞働の福音

—テサロニケ後書の概要—

日常生活の宗教化

宗教生活に於て、ありがちな誤謬は、觀念主義に捉れて、日常生活を離れることである。現世離れした仙人が、獨善的な怠けた生活を送つたり、托鉢生活に這入つた者が、人生目的の實現を忘れて、行き當りばつたりの生活に馴れ、獨立心を缺いだ乞食生活に墮落するが如き、この傾向を最も露骨に我々に教へてくれる。宗教が、搾取階級の遊戯と化してしまふのは、全く日常生活と分離してしまふからである。この點に注意したキリストの弟子パウロは、觀念的な教訓を與へる時でも、決して人から厄介にならず、自給自足の勞働生活を續けて、キリストの福音の宣布に務めた。

兄弟よ、なんぢらは我らの勞と苦難とを記憶す、われらは汝らの中の一人をも累はすまじとて、夜晝、工をなし、勞

しつゝ福音を宣傳へたり。（テサロニケ前書二ノ九）

只にテサロニケばかりではない。コリントでも（コリント後書一一ノ七、八、九、コリント前書九ノ一八　使徒行傳一八ノ六）さうであつたし、エペソでもさうであつた。

パウロは天幕縫ひの熟練工であつたから、その熟練を利用して、晝働き、夜間傳道した。之は第三回の傳道旅行に於ても同樣であつた。

この手は我が必要に供へ、また我と偕なる者に供へしことを汝等みづから知る。（使徒行傳二〇ノ三四）

パウロは、エペソの人々に上のやうに云ふてゐる。卽ちパウロはヨーロッパの各地で窮乏の中にも、初めから終まで勞働しながら傳道した事がよく判る。それはテサロニケに於ても、コリントに於ても、エペソに於ても同樣であつた。彼は絶えず勞働し、自分のために食物を稼いだのみならず、他人の爲にも自分の勞銀から金を送つた。彼は奴隷の解放まで自分の稼ぎ高の中から支拂ふことを主張した。（ヒレモン書一九節）パウロの宗教生活には實現性があつた。若し宗教が、日常生活に於る實現性を缺くならば、德川時代に於る日本の僧侶のやうに、生活を保證してくれゝば、支配階級の云ひなり通りに言論をしなければならなくなる。そして彼等は世界一の怠け者となり、乞食以上に仕方のないものとして排斥されることになつた。

歡迎すべき審判の日

パウロが第二回の傳道旅行で最初に手紙を送つたテサロニケは、迫害に遭つて非常に苦しんだ。それ

を慰めるために、彼はキリストの再來の日まで忍耐せよと奬めた。ところが、そのキリストの再來といふことが充分徹底しないギリシヤ人は、すぐそれを迷信深くとり、今にも世の終があると信じて、凡ての勞働を中止し、毎日毎日、宗教的行事に時を費し、日常生活を投げ捨てゝしまつた。それを心配して書いたのがテサロニケ後書である。彼はまづ最初に、神の國の爲に迫害を受ける者がキリストの再來によつて、必ず救はれることを說き、殆ど前に書いた手紙の繰返しのやうなことを述べてゐる。然し第二章に於て彼は、キリストの再來が或順序を以て發展することを注意してゐる。卽ち惡人が世界に滿ち、神に對する冒瀆者が世界に一杯にならなければ、キリストの審判も再來もなく、そんなに無鐵砲に人を恐がらせるやうな無茶苦茶な審判はない、と云ふことをはつきりとテサロニケ人に敎へてゐる。

恐らくパウロの前の手紙を見たもの〻中には、早合點して他に恐がらせの手紙を送つた者もあるらしい。（テサロニケ後書二ノ二節）それに對してパウロは、キリストを厚く信ずる者にとつて、キリストの再來と審判は決して恐怖すべきものではなく、却つて慰めになることを說かんとしたのであつた。

今日でもよくその誤解があつて、キリストの審判を瞬間的また無秩序なものとし、それを恐怖の方面にのみ說かんとする者が、相當に多い。我々は、それに對してパウロが敎へたテサロニケ後書を熟讀吟味すべきことを勸めたい。自然界に自然淘汰があるやうに、人間界に人間淘汰があるのだ、それが審判の日である。その日に省かれるのは怠惰者と惡人と搾取階級で、キリストにつくものはそこを素通りに出來るのである。

勞働の福音

然し、テサロニケ後書に於て特に學ぶべきことは、パウロが、靜かに落着いて皆が勞働に從事すべきことを忠告したことである。

價なしに人のパンを食せず、反つて汝等のうち一人をも累はさざらんために勞と苦難とをもて夜晝働けり。これは權利なき故にあらず、汝等をして我らに效はしめんために、自ら模範となりたるなり。また汝等とともにありし時、人もし働くことを欲せずば、食すべからずと命じたりき。聞くところによれば、汝らの中に妄に歩みて何の業をもなさず、徒事にたづさはる者ありと。我ら斯のごとき人に、靜かに業をなして己のパンを食せんことを、我らの主イエス・キリストに由りて命じ、かつ勸む（テサロニケ後書三ノ八—一二）

パウロの勸告は二重になつてゐる。一つは彼自らが勞働の模範を示したからその通りせよと云ふこと、第二はキリストの名によりて働かざる者は飲食してはならないと云ふことである。テサロニケ後書第三章十節は、その儘の文句が、ソヴェット・ロシアの憲法に載つてゐることによつて有名である。

キリストは大工であり、大工の子であつた。彼は「天の父は今に到るまで働き給ふ、故に我もまた働くなり」（ヨハネ五ノ一七）と云はれた位、勞働に對して忠實な方であつた。キリストは人を助けるためには、安息日まで勞働してもよいと云はれた方であつた。然し、觀念主義に捉はれたパリサイ人やユダヤ敎の人々には、このキリストの氣持が判らなかつた。

それと同樣に、キリストの再來を說かれたギリシヤ人が勞働を忌避して、禮拜專門に陷づてしまつた事はあり得ることである。ある人にとつては宗敎生活を何かまるで遊び事のやうに考へてゐる者があ

る。宗教が目的實現の爲の勤勞生活であることを忘れ、宗教は一種の遊戯であり、趣味であると考へてゐる者が相當にある。卽ちたゞ信ずるのでなくて、救はれるから勤勞を中止して祈ばかりして居ればよいと考へる傾向のものがないでもない。

然しパウロにとつては、勞働が神への最も美しい獻物の一つであつたのである。キリストは「我父は農夫なり」と云はれ「我は善き羊飼なり」と云はれてゐる。卽ちキリストは勤勞生活に宗教の本質を發見せられたのであつた。勞働の實現性の中に、宗教が宿つてゐた。キリストにとつては、勞働の中に祈があつた。祈も一つの努力なら、勞働も一つの努力である。生命それ自身が、一つの神への燔祭である。

パウロは、このキリストの氣持をよく理解してゐたから、勞働生活によつてキリストの慰めを贏ち得んとした。私はキリストの慰めと云ふ。パウロにとつて、キリストの再來と審判は慰めを意味してゐた。何故なればそれは、善人が稱讃せられ、惡人が罰せられる淘汰の日であつたからである。そしてキリストの稱讃を得るのは、キリストの贖罪愛の持續者である。たゞ自分のために自分の救を待つてゐる者には、慰めは來ないことをパウロは考へてゐた。

さればこそパウロは勞働の福音を高調したのである。パウロにとつてキリストの再來の日は、總決算の日を意味してゐた。たゞ口先の信仰は救にならないことを彼は考へた。彼は、キリストを愛しまた人を搾取せず勞働にいそしむものにとつて、キリストの再來が、日常の出來事と何等の差のないことを敎へんとした。否、それよりも却つて、幸福な喜の日であることを高調せんとした。

實際キリストを愛するものにとつて、キリストの再來は舊い友達を他鄕から迎へるに等しい。その氣持が、テサロニケ人には理解されなかつた。そして今日でもそれを理解しない者が頗る多いと思ふ。キリストの再來と、日常の勞働生活とは決して矛盾しない。キリストの再來と審判は、觀念主義者、搾取階級にとつての審判であり、奉仕生活を送る人々、人を救はんために勤勞を續けてゐるものにとつてはキリストの再出現とその審判は、凱歌を擧げる日であり、贖罪日を意味してゐるのだ。さればこそパウロは再來を敎へつゝも、靜かにして、日常の勞働生活に親しむべきことを敎へてゐるのである。我々はこの手紙を讀んで、大いに考へ直し、獻身と精進のために、勞働にいそしむべきことを、もう一度深く考へ直さなければならぬ。

我らの父なる御神樣

今日勞働の尊嚴は疑はれ、持てる者は勞働を忌避し、勞働を非神聖視する傾を持つて居ります。父なる御神、今日のこの傾向は全くあなたを發見しないことに根ざして居ります。我々の日常生活が神のためであり、キリストのためであることをもう少し深く敎へて下さい。さうすれば勞働の尊嚴は高まり、勞働を愛する者が一層殖えて來ると思ひます。父なる御神、どうか願くは、今日勞働階級の血を吸つて生活を續けてゐる醜き上層階級に悔改めを敎へ、彼等も謙遜に人に仕へ、勞働にいそしむことを許したまへ。また今日壓迫せられてゐる勞働階級が隱忍自重して、キリストの愛によつて勝利を得る日まで、その尊き勞働生活を享樂することを得しめ給へ。我々の爲に血を流し、大工の生活を送り給ひしイエス・キリストによつて願ひます。アーメン

テサロニケ後書梗概

第一章　破迫害者の慰としてのキリストの再來　——　第二章　キリスト再審判の順序

第三章　勞働の福音

第八章　自由の福音

自由、充分自由な福音

—ガラテヤ書の概要—

キリスト教は愛と柔順の宗教だから、自由と云ふことを無視してゐるかの如く考へる者もある。例へば、フレデリック・ニイチエの如きは、キリスト教は卑屈な奴隷の宗教で、自己を確立せざる宗教だと云つてゐるが、それは誤謬である。イエスキリストの教は驚く程多角形的であるから、一面、柔順なる十字架の福音を持つてゐるが、他面、自由即ち解放の福音を持つてゐる。それがパウロのガラテヤ書に現れてゐる思想である。

ガラテヤ書は小亞細亞地方に於るギリシヤ系統、特にフランス人と同じ傾向のある人種間に、この福音が傳はつてから順調に信仰生活を續けてゐたが、その後いろ〳〵な、他から這入つて來る人の事を聞いて、信仰をぐらつかせた時に、キリストの弟子パウロによつて書かれた手紙である。

パウロがこの地方に傳道したのは紀元五十年頃であつた。ガラテヤ縣は小亞細亞の中央にある。小亞細亞は、シリア、キリキヤ、ポント、カパドキヤ、アジア、ルデヤ等十三州から成つてゐるが、ガラテヤ縣にキリスト教が傳はつた時に、白人の間に混亂が起つた。或人はキリスト教を信ずるが、或種の形式やユダヤ教的迷信に復歸せんとする傾向があつて、自由な精神主義的な、そして理想主義的な、純な形式に捉はれない、傳統を離れた福音が賴りなく、感覺や形式や祭、緣日などに訴へ、喧しい理屈を付

けんとする信仰に歸らんとした。それはエルサレムから這入つて來た人が吹込んだ。それに反し、パウロは萬國に傳へんとした福音の自由、生理的に云つても、心理的に云つても、道德的に云つても、また社會的に云つても、經濟的に云つても、根本的に福音の自由を傳へんとする魂膽を持つてゐた。そこで、パウロは思想の宏壯な萬代不易のキリスト教の自由の眞理をガラテヤ書として書いてのである。

だからガラテヤ書は幼稚なものには判りにくい。パウロは世の『小學』と書いてゐるが、（ガラテヤ四ノ三）小學程度の者にはガラテヤ書は解らない。ガラテヤ書第四章九節には、君等は大學の宗教を教へられた筈なのに、もう一度小學をやり直すのか、何と云ふ賴りない事だと叱り付けてゐる。一面から云へばこの書は、信仰の薄いものを叱り付けた手紙である。

この手紙はその根本に於て自由を高調してゐるが、パウロは人間の自由と神の自由をはつきり區別してゐる。即ち第一章は神の自由、第二章キリストによる自由、第三章信仰の自由、第四章靈魂の自由、第五章愛による自由、第六章十字架による自由である。

神の自由

パウロは第一章一節の書き出しから既に、人間によらぬことを書いてゐる。十節にまたそれを說き、十一、十二節にそれを說くと云ふやうに、人間を出發の基調とせず、神を出發の基調としてゐる。そこにパウロの主張が人間的自由でなく、神の自由であることが明らかに判る。

人間の自由と神の自由はデモクラシーに於て違ふ。人間は、偏見を持ち、階級があり、技術の能率も

違ふから、人間の自由は眞の自由にならない。だから人間の自由は人間を偏見の中に閉込める。人間の自由を中心にしたデモクラシーは長續きしない。そこにギリシヤ、ローマ時代の自由主義運動と、キリスト教の自由主義に差がある。つまり世間で云ふ新自由主義と我々のキリスト教の自由主義に差がある。眞の自由は神を中心にしなければ來ない。どんな詰らぬ者でも、乞食でも、犯罪者でも、人格を認めて行くには愛の完全なる發現が必要であり、どんな詰らぬ者の中にも神の精神がある、片輪にも跛足にも神の子の種があると考へなければ、世界には眞の自由はない。だから政治に於いても、眞のデモクラシーは、ゼネバのジョン・カルヴンの神を中心とした、我儘の入らないデモクラシーが基調となつてゐる。我儘の入つた小人間の小自由主義は低いデモクラシーで高いものではない。之は歴史上に現れてゐる。レニンやマルクスのデモクラシーは人間のデモクラシーで、このデモクラシーは生産階級のみに限られ消費者等他の階級はデモクラシーの中に含まれてゐない。神の生命が入らないデモクラシーは階級制度をつける。ロシアの現在が恰度それで、新しい階級が出來て、生産能力のない人間は悲しい思ひで蹂躙されてゐる。

が、イエス・キリストの如きは、税吏、娼婦、罪人、乞食にも神のデモクラシーを與へんとする氣持を持つてゐられた。それが奴隷解放の眞の精神である。あの黒奴を解放したリンコルンのデモクラシーは神のデモクラシーであつた。で、聖書によらなければ、即ちマルクス的共産主義のやうに多少の暴力、多少の放蕩、多少の罪惡をしてもいゝデモクラシーは、結局人間に自由を保證しない。そこで條件附き

の福音にパウロは反對した。それが第二章に書いてある。

キリストによる自由

第二章は形式主義、律法主義に反對した強い自由主義を高調した部分である。即ちパウロは形式よりの解放、律法よりの解放、傳統よりの自由を高調してゐる。

どうした譯か、ユダヤ人は偏見を持つてゐて、ユダヤ人だけが偉い、ユダヤ人の眞似をしなければ神は救つてくれないと思つてゐた。日本でもある人々は日本だけが、一番いゝと思つてゐる。イギリス人はアングロサクソンだけが偉いと思ひ、印度ではブラマ教の人だけが偉いと思ひ、或ひはドイツ人はドイツ人だけが偉いと思ふ、と云ふ風に、人種人種により偏見がある。ユダヤ人は生後八日目に割禮をすることが純粋な救に入る手段だと主張した。が、パウロはそんな形式的なものは駄目だと云つた。信仰の大學に入つてゐないペテロやその他の人は、シリヤのアンテオケ迄來て、エルサレムから人が來る迄は外國人と食を共にしたに拘らず、エルサレムから使ひが來るや否や國粋主義に變り、一緒に食事をしなくなつた。（ガラテヤ二ノ一三）

キリスト教は、民族から解放せられた世界主義の宗教である。單に支那人と云はず、日本人と云はず、之は萬國につける宗教である。然るにペテロは民族主義にこびり付いてゐるではないか、その偏見から解放せられなければならぬとパウロは云つてゐるのである。

これ私かに入りたる僞兄弟あるに因りてなり。彼らの忍び入りたるは、我らがキリストイエスに在りて有てる自由を

窺ひ、且われらを奴隷とせん爲なり。然れど福音の眞理の汝らの中に留らんために、我ら一時も彼らに讓り從はざりき。（ガラテヤ二ノ四、五）

キリストによる自由は絶對の自由で、萬國的なものであり、傳說や形式、偏見から解放せられたものである。それを割禮しなければならぬとか、祭の日を云々云ふ事はつまらない。（ガラテヤ二ノ一四―一六）我々はキリストにより自由にせられ、彼を信仰することによりキリストの自由に入れられる、卽ち人間がするのでなく、神を信ずることにより眞の自由が與へられる。そんな人間の云ふことを云つた處で神の發動がなければ、罪よりの解放はない、神の力が加はるから動くのである。大きな機關車があつてもスチームがなければ何もならぬ。そのスチームが神の力そのものである。それを信じたらいゝ、と云ふのがパウロの思想である。（ガラテヤ二ノ二〇）

信仰による自由

我々が救はれたことを聞いて何故小學に歸るのか、（ガラテヤ三ノ一―五）そんな形式張つたことは今迄に澤山ある。キリストの宗教は人間そのものを、神の自由に發展しようと云ふ大きな神の宗教である。キリストが我々のために苦しみ悶えた事を、何故君らは信じないのか、とパウロは聖書から引いて說明せんとしてゐる。アブラハムが救はれたのは理屈によらず信仰による、我々は信仰により神の愛を現したキリストと云ふ確證を握つて來た以上、それを信じたらいゝ。

信仰の出で來らぬ前は、われら律法の下に守られて、後に顯れんとする信仰の時まで閉ぢ籠められたり。（ガラテヤ三ノ二三）

形式は我々を閉籠める、それを解放するのは信仰である。凡ての形式、傳統、律法はキリストに來るまでの手引で、キリストが來た以上我々は神の子になつた。今までのあゝしたらいけない、斯うしたらいけないと云つてゐたのは、それは守役で、今はもう神の子になつた（ガラテヤ三ノ二四―二六）だから民族主義　奴隷貴族の區別なく、男女の區別もない、キリスト・イエスにより一つであると云つてゐる。キリストが來た以上形式主義は卒業したのだ。そしてキリストのものならば、アブラハムの裔にして約束に循へる世嗣である。（ガラテヤ三ノ二六、二八）

靈魂の自由

第四章は　自己主義を殺せと云ふ靈魂の自由を說いてゐる。

斯のごとく我らも成人とならぬほどは、世の小學の下にありて僕たりしなり。（ガラテヤ四ノ三）

子供の時はつれて行かねばならぬが、大人になつた以上は、自由になつて大學に進まねばならぬと書いてゐる。

今は神を知り、寧ろ神に知られたるに、何ぞ復かの弱くして賤しき小學に還りて、再びその僕たらんと爲るか。汝ら日と月と季節と年とを守る。（ガラテヤ四ノ九―一〇）

「君らはキリスト教であると云ふのに、まだ日と月と季節などを云ふのか、なぜもう少し徹底しないのか」とパウロは云つてゐる。今日でもさう云ふことは澤山ある。私は純粹の記念日として守るのなら

いゝが、お祭騒ぎは厭である。お祭の氣分が多うすぎて、眞面目でなくなる。我々がクリスマスを祝ふのでも眞面目な氣持を持つてしなければならぬ。（ガラテヤ四ノ一七、一九）

ピリピ書第一章十六節を見ると、宗派心からキリスト教を宣べてゐる者に對しても、パウロは寛容であるが、パウロは宗派心に災ひされて弱つてゐるので、それから解放せられなければならぬと云つてゐる。日本もこの強い宗派心から解放せられて、パウロのやうな自由な氣持で、キリストに屬くものは一つにならなければならない。

愛による自由

キリストは自由を得させん爲に我らを釋き放ちたまへり。然れど聖く立ちて再び奴隷の軛に繫がるな。（ガラテヤ五ノ一）

第五章はガラテヤ書の眞髓である。キリストは我々に自由を保證した。形式的になるな、放縱、利己、迷信、奴隷、凡ての罪惡の奴隷から解放せられるがいゝと云つてゐる。この中には政治的奴隷、經濟的奴隷も加はつてゐる。それをキリストが保證せられる以上、もう一度奴隷に繫がれるなよ、と云つてゐる。

なんぢら前には善く走りたるに、誰が汝らの眞理に從ふを阻みしか。（ガラテヤ五ノ七）

君らはよく判つてゐたのにまた判らなくなつたのか。だから愛により自由を與へられて互に事へよ、（ガラテヤ五ノ一三）律法は愛があれば完成したのだ（ガラテヤ五ノ一四）と云つてゐる。盜みも貪りも愛があればしないで濟む。自由も我儘な自由なら罪惡になるから、愛が根本にならなければ自由は得られない。

眞の社會的自由は愛が根本である。此處に一萬噸の船があつても動かすには一人で動かせない。多くの人が愛により協力しなければ動かない。即ち愛により社會的自由がある。だから、キリストの自由が保證せられなければ眞の自由はない。人間的な昔流の個人主義的自由では駄目だ、眞の自由は神の自由である。（ガラテヤ五ノ一二―一五）

表面的な自由。人間的な自由は恐ろしい自由になる。（ガラテヤ五ノ一七）パウロは此處に罪惡の表を擧げてゐる。（ガラテヤ五ノ一八―二一）が、眞の自由に入るには愛、喜悅、平和、寛容、仁慈、善良、忠信柔和、節制を基礎にしなければならぬ。みんな互ひに連帶責任を持ち相愛してやつてくれ、とパウロは云つてゐる。

十字架による自由

ガラテヤ書第六章十一節に來てパウロ自ら筆をとつて繰返し書いてゐる。十四節十五節に、その中に新しいものが生れて來た。それは十字架によつて新しく生れた者の姿である。彼は十字架の勝利を誇りたいと述べてゐる。パウロは、愛の他に自由はなく、愛の尖端を行く十字架のほかに眞の自由のないことを此處に高調してゐるのである。我々も罪惡を十字架に殺して、眞の自由を發見しなければならぬ。

父なる御神、

我々は偏見を持ち易く、民族主義の虜となり、迷信や形式や表面主義に捉はれ、全くの自由を忘れ勝ちでありますから、キリストの自由を敎へて下さい。單なる人間の自由、技量の自由、皮膚の色による自由、と云ふやうな自由に階

級をつける自由でなく、どんな者にも、日本にも支那にも、乞食、奴隷にも與へ得る自由を與へて下さい。貧銀奴隷無産者を自由に解放し、日本の白奴を自由にして純潔を與へ、十字架によつて罪惡を粉碎する自由を我々に徹底せしめて下さい。キリストにより祈ります。アーメン

ガラテヤ書梗概
第一章　神の自由
第二章　キリストによる自由
第三章　信仰の自由
第四章　靈魂の自由
第五章　愛による自由
第六章　十字架による自由

第九章　秩序の福音

—コリント前書の概要—

狂風怒濤時代

何時になれば、人間に誤解が無くなるであらうか？　何時になれば、社會が平安になり、相愛互助の世界が確立するであらうか？

混亂は衰退期の特徴である。ギリシャ文明亡び、ロマ文化に疲勞の色が見えた紀元第一世紀は、文明史から云つて混亂期であつた。この時、社會に新しい秩序を與へんとしたのがキリストの福音であつた。そのためにキリストの弟子は色々餘計な心配をしなければならなかつた。

使徒パウロに對して四つの批評が有つた。(一)パウロは正式の使徒ではない、初はパリサイ宗でクリスチャンを迫害したものではないか、眞の使徒たる資格なきものである。(二)又パウロは餘り女と接近し過ぎる、口ではえらさうなことを言つてゐるが、どうもあやしい。(三)それから金錢の問題でも何か

變だ。エルサレムへ義捐金を送るのだと言ひながら、その金を着服してゐるのではあるまいか。(四)最後に、パウロはどうも嘘をつく。來る來ると何度も言つて置き乍ら、たうたうやつて來ない。あれ迄待たしてゐて平氣でゐるのは怪しからぬ。かうした批難があつて、パウロによつて建設せられた教會だから、ことごとし始め、色々な分派が生じて、困り拔いてゐた。

パウロの辯明

そこで教會のため、神の榮光のためにパウロは默してをれなくなつた。その徹底した辯明を書く必要があつた爲に、コリント前書は記されたのである。

使徒權の問題については、コリント前書第九章に強い言葉で辯明されてゐる。『我は自由の者ならずや、使徒にあらずや、我らの主イエスを見しにあらずや、汝らは主にありて我が業ならずや、われ他の人には使徒ならずとも、汝らには使徒なり』と言ひ、更に『我は飲食する權なきか。我ら他の使徒たち、主の兄弟たち及びケパの如く姉妹たる妻を携ふる權なきか。たゞ我とバルナバとのみ工を止むる權なきか。』と言つてゐる。卽ち我々だつて、傳道だけして食はしてもらひたい。月給を貰ふ權利がない譯ではない。たゞ自ら進んで人のために働き、自分の仕事によつて食つてゐるのだ。

又ケパ等のやうに妻君をつれて歩いて惡い理由はない。と言ふのは、新約外典（世界聖典全集）のパウロ行傳を見ると、セクラと言ふ婦人のことが書いてある。セクラはパウロが最初に傳道したルステラ附近の王の娘で、大變な美人であつた。パウロの說敎によつて救はれたが、信仰の迫害を受けて町を逃

がれ、パウロを慕ふてついてまわつた。パウロ研究の權威者ウヰリアム・ラムゼーは、之は多分事實であらうと言つてゐる。讀んで見ると隨分劇的なローマンチックな筆致で書かれてある。パウロは五十以上で、セクラは十六七の少女であつた。でパウロは盛んに批難された。

が、パウロはたとひ結婚しても惡いことではない、かまわんではないか。それをたゞ惡い惡いと言ふのは無理だ。と云つてゐる。

批評を超越して

コリント前書第四章を見ると實に美しい詩心をもつて、自らを反省しつゝ訴へてゐる。『我自ら責むべきところあるをおぼえねど、之に由りて義とせらるゝことなければなり。我を審き給ふ者は主なり』(コリント前書四ノ四)。三年間人々が待ちこがれてゐるにかゝはらず、行く行くと言ひながら來ないのは嘘つきだと言ふ。そして僞預言者が起り、反對派が活躍し、教會はキリスト派、アポロ派、ケパ派、パウロ派と分裂して爭つてゐる。その事情を、コリントからエペソに來た信者の一人が話して呉れた。けれど要するに之はギリシヤの宗派心が殘つてゐて、姿を現したことなので、一層パウロをして憂慮せしめた。

その時パウロはエペソでも、偶像教の騷動が起つてゐてどうしても手が離されない最中であつた。でなほさら心を痛めた。そして第四章には鋭く且つ美しく說いてゐる。

コリント前書四章三節四節にはかゝる批難を通して自らの潔白が明かにされることを確信してゐる。

孔子もやはりさうであつた。自分が女の問題や金錢のことで批評された時には此心持が一層よく解る。

コリント前書第四章八節には『汝らは既に飽き、既に富み、われらを差措きて王となれり。』おまへ達は實にゑらさうな氣持になつて、王になつたやうな氣でゐる。

然し、我々はつまらぬ者、弱い者、裸、打たれ、定まつた住家もなく、罵しられつゝも働きつゞけ、犬の如く追ひまわされてゐる。よくも批評するものだ。自分たちはまるで世の塵芥のやうなものだ。とは言へ君等は餘りひどくはあるまいか。もう少し反省してもらひたいと書いてゐる。

性の問題

パウロは書き續けた。『然もそれほどゑらさうに言ふ君達はどうであるか。先づ第一姦淫がひどいと傳へられてゐる。異邦人の間にもないやうな恥づべきことが公然と行れてゐる。或る人は父の妻を持つてゐると言ふ噂だ。若しほんとうに教會がキリストについてゐるものならば、何とかすべきではないか。前からも隨分注意するように特別に教へておいたではないか。どうしてもかゝる人を退けなければならない。』

『それから君達の間で、何か事が起きると、その處分の方法が全然なつてゐない。聖徒の前に持つてゆかないで裁判所に訴へると言ふではないか。(コリント前書第六章)わざわざ裁判所へゆかなくとも、良心のあるものなら、事の善惡はすぐ解る筈ではないか？　その良心をもつた人が一人もないと言ふのはどうしたことか？』

『それから男女の交際について隨分やかましく言はれてゐるらしいが、實際は出來るだけ、餘り接近しない方がよい。まちがひが起らぬように、注意に注意をする必要がある。』（コリント前書第七章）

『又偶像に祭つたものを食べることについて、躓く人があるらしい、が大抵のものはよく解つてゐるのだから、たべようが、たべないで置かうが大したことではない。然し信仰の弱い人が之を見て迷ふようならば、すつかり止めてしまつた方がよいかも知れぬ。とにかくこんなことで人を躓かさぬやうに心がけたい。』（コリント前書第八章）

第九章は前述の通り自己の辯明である。

第十章、第十一章は、教會の習慣が漸次亂れたことを指摘してゐる。殊に聖餐式はキリストの血を記念する聖典であるにかゝはらず、だんだん最初のよい習慣が、ギリシヤ的な文化主義に汚されて來た。隨分贅澤なことをやり始め、或る者は葡萄酒を呑み過ぎて、教會内で醉つぱらつてくだをまきさへした。『教會はあばれる所でない。殊に聖餐式が行はれた時の、キリストの御心持を察して見るならばそんなことが出來たものでない。』『然れば宜しきに適はずして主のパンを食し、主の酒杯を飲むものは、主の體と血とを犯すなり。人みづから省みて後、そのパンを食し、その酒杯を飲むべし』（コリント前書一一ノ二八）『若し贅澤な飲食がしたければ、何も教會でやらずに、己が家で食したらよいではないか』とパウロは書いてゐる。

愛の組織

パウロは第十二章に來て、初めてその本音を吐いた。教會がごたごたしたり、自分に對していらぬ批評を企てたり、その癖教會内で變なことばかりやつてゐるのは、要するにまだ宗教の本質が解つてゐないのだ。赤坊なのだ。キリスト教の秩序がはつきりせず、愛の組織が解らぬからだ。

キリストの教は織物である。一本の絲では出來上がらない。二本三本十本百本と、復數が集まつて、横絲と縱絲とが重なり合つて、しつかりした織物が出來る。一本だけが威張つても、絲屑となつてしまふより外はない、身體の組織を見ても解る。色々な働きをなす、各部分が完全に助け合つてこそ、初めて一人前になる。足に『おまへはゐらぬ』と頭がいつたら、歩いてゆくことが出來ない、一致してこそ立派に活動してゆけるのだ。

教會でも有機的組織として、一體となり、愛の組織を全うしてゆかなければならない。（十二章）

それ故これで完成するためには、どうしても心の底から愛し合はねばならぬ。その愛の本質を示す原理がコリント前書第十三章に最も美はしい詩をもつて讃へられてゐる。

愛は普通の文化ではない。文化を超えた更に美はしいものである。

一、たゞ外國語（もろもろの國人の言）を語ることではない。二、天の使のやうな美辭を話すことでもない。三、先見（預言する能力）があるばかりでもいけない。四、藝術の奥義に達してゐても充分でない。五、學問がよく出來るばかりでもいけない。六、信念（信仰）ありとも、その信仰で人を殺すばかりではほんとでない。七、慈善事業をやつても、人に見せたいためでは何にもならない。八、又どれほ

と犠牲になつても足りない。それらに愛の赤心が加へられてこそ、初めて立派なのだ。

では、愛の構造はどんなものであらうか？　愛は、一、寛容、二、慈悲、三、不妬、四、誇らず、五、不驕、六、不非禮、七、不利己、八、不怒、九、不念惡、十、不義を喜ばず、（眞理を愛す）、十個である。之を建築と見る事が出來る。

寛容は間口であり、慈悲は下に對する基礎工事であり、不妬は上に對する高さである。誇らずは奥行のあること、不驕は屋根の建築、不非禮は適宜に裝飾を整へることである。不利己、不念惡は此建物の用法を示し、不義を喜ばず、眞理を喜ぶは凡て法に會つてゐなければならないことを指す。かくして愛の高さ深さ長さが出來上がる。

かゝる愛は實に永久的なもので、希望と信仰よりも更に根本的なものである。愛がある故に信仰も希望も生れて來る。愛の空間的に働いたものが信仰であり、愛の時間的に作用したものが希望であるとも言へよう。眞に愛は凡ての根本である。このキリスト教的愛は、ギリシヤ道德、ギリシヤ文化の不完全さを救ふことが出來た。今日の女學校に於ける教育なども、餘りにギリシヤ文化的に流れてゐる。かそれでは、個人主義的であつてほんとうでない。愛を通しての神の國運動が理解せられ、社會化愛が了解されなければ、その生活は土臺がない。

第十四章には、かゝる愛を追ひ求めよとすゝめてゐる。

復活の福音

第十五章は、キリストを馬鹿にし、復活などあるものかと言ふ人達に對する辯明である。パウロの信仰は再生の信仰であつた。パウロは再生の事を甦りと云つた。それは全く神の愛による再生であつた。神の愛を信じ、人間の再生力を發見しなければ人類は絶望であるとパウロは考へてゐた。だから社會愛を知り、唯單なる文化的生活を追求せず、宗派心に捕はれず、一つになり一致して、神の國のために男らしく戰ひたいとパウロは書いてゐる。

第十六章は挨拶が溫い心から述べられてゐる。

天の御父

ほんとうの愛が解らず、愛の生活が送れないために心苦しく存じます。どうぞキリストの愛の長さ深さ高さを悟らしめ、人の足らざる所をも補ふてゆくやうな氣持を與へて下さい。宗派心や分裂や罪惡が消え去り、十字架愛が徹底して來ますやう、更に神の國が廣められて、信仰の光と愛の輝とが溢れる美しい世界が打建てられますやう願ひ奉ります。私共も深い愛の道を蹈んでゆけますやう。信仰と希望と愛とに生き、パウロの如き勇敢なる神の僕として、一生を終らせ給はんことを願ひます。

主イエス・キリストの御名によつて願ひ奉ります。アーメン。

コリント前書梗概
第一章　キリスト中心の共同戰線へ
第二章　世俗の智慧と聖靈による智慧
第三章　神の使者の本質
第四章　混亂を棄て純粹の福音に歸る可きことを敎ふ
第五章　姦通の戒め
第六章　不義は神の國を攝がず
第七章　結婚論、割禮論及奴隷論
第八章　偶像への献物に就ての敎訓
第九章　パウロの使徒としての自覺とその犧牲的生活
第十章　信仰蹉跌論
第十一章　敎會に於る秩序

第十二章　使命の分業に就て
第十三章　愛論
第十四章　秩序論
第十五章　復活論
第十六章　個人消息

第十章　自在の福音

—コリント後書の概要—

苦惱の彼岸

窮すれば通ずる。コリント後書に漲るパウロの精神は全くこの覇氣を以て書かれてゐる。

クロエの召使が、コリント教會の混亂をパウロに告げた時に、心配してコリント前書を送つた。が、信者を叱責したことがあまり強く當つたので、いろ〳〵な事情の下に、もう一度コリント教會を訪問せんとして途中まで出て行つた。その前にコリント教會へ慰問使テトスを送り、まづ狀態を視察させた。そのテトスに途中で會つた處が、報告がいゝから喜んだ。が最初は不安と焦慮で出發したことが、第二章十二節に出てゐる。この樣な事實をパウロは度々經驗した。けれどその心配してゐたことが次から次に心配でなく喜びに變つて行つた。コリント後書は凡ゆる心配が喜に變る確信の書である。これを自在の福音と私は云ふ。

第一章を見ると、パウロが殺す目に遭はされたことが九節に出てゐる。エペソ教會でパウロが福音の勝利を得た時、獅子に食はされようとした。パウロはこの苦しみを思出した。で、パウロは第二章四節に於て、エペソばかりでなくコリントでも苦しみがあつたことを書いてゐる。パウロはコリント前書を書

いた時、又コリント後書を書いた時、或ひは前書と後書との間にもう二本位手紙を書いたであらうが、コリント後書の前の手紙を書く時には、非常な心配と惱みの中に涙をもつて書いた。（コリント後書二ノ四）第四章八節、九節には矢張りこの苦しみが今猶續いてゐることを書いてゐる。そしてその悲しみの氣持が第五章にも續いてゐる。それに誤解を生じて會計上の攻擊を受けてゐた。で、第八章二十節を見ると、咎めらるゝことを避けん爲にと云ふ焦慮が窺はれる。また第十章一節二節にはパウロが攻擊を受けて悶えてゐる狀態が書かれてゐる。即ち「我らを肉に從ひて歩むごとく思ふ者あれば」と云つて、女の問題に就いて惡口云はれた時には默つてゐたが、後で癪に觸つたと云つてゐる。第十一章には苦しみが十三も書いてある。（コリント後書一一ノ二三—二六）

パウロはこの手紙を書いた時、第十一章二十三節に云つてゐる如く、自分の使徒である事さへ疑はれた。そして凡ゆる苦難を忍び、キリストの福音の宣傳に廻つた。生理的苦しみ、心理的苦しみ、社會的苦しみを幾回も受けたが、パウロが男性的精神をもつて、十字架のキリストを見詰めながら奮鬪した處に、コリント後書の面白さがある。

コリント後書は懺悔錄であり、告白文學であり、それと共に紀元一世紀に書かれた自叙傳としても隨一のものである。ニイチエは、パウロは卑屈なキリストの奴隷であると云つたが、コリント後書に於ては奴隷ではなく英雄である。即ちクリスチヤンの誇を書いてゐる。第十一章の如きは誇を繰返してゐる。が、さう云ふ人間的な誇よりも、いろ〳〵な事を通して神の惠のあることを誇らんとしてゐる。でコリ

ント後書の宗教的體驗は、神による融通自在性で、古い言で云ふなら、神通力を握つてゐることである。

コリント後書を讀むと、慰めを自在に與へ給ふ神の恩寵、卽ちどんな苦しみにも神は惠を充分下さることを體驗してゐる。第一章四節は慰めがキリストにあることを信じさへすれば、どんな苦しみにも慰めがあると說いてゐる。そして苦しみ拔いた結果は自在になる。第一章十節にはこれを書いてゐるが、この體驗がパウロの强みである。神は過去に於て救つてくれた、今も救つてくれる、故に未來も救はれるものであると云ふのがパウロの體驗であつた。

勝利と自在

第二章は勝利の福音である。「感謝すべきかな、神はいつにてもキリストにより、我らを執へて凱旋し、何處にても我等によりて、キリストを知る知識の馨をあらはし給ふ」（コリント後二ノ一四）

第三章は新約の自在である。舊い時代は縛られたもので、新しい時代には新しき自在に入つたことが第三章六節に書いてある。十七節には更に新約によつて我々は自在になつたと書いてゐる。靈の體驗により自在性が與へられる、自由の奧の院が自在である。之はロマ書第八章二十一節にも繰返してゐる。ここに出てゐる光榮の自由とは自在性のことで、神の靈が內側から働くことにより融通自在になる。どんな苦しみが來ても自在性によることを敎へてゐる。

第四章は一層それを强く、どんなことがあつてもひるむものでないことを云つてゐる。（コリント後四ノ六―八）死ぬべき身體もキリストが生かしてくれると云ふ神通力を備へ、神によつて體驗したことを書

いてゐる。

第五章に於ては、筋骨逞しいスチールの入つたことを書いてゐる。（コリント後五ノ六、八）へこむものか、どんな事があつても大丈夫だ、と彼は頑張つてゐる。

道德的自在性

第六章に於てパウロは更に道德的自在性を主張してゐる。今迄は肉體的、心理的自在性を云つてゐたが、第六章には罪惡から救はれる自在性を說いてゐる。神が我々と共に働いて下さる、それによつて新しい力を受ける。（コリント後六ノ一）その結果凡ゆる窮乏にも、肉體的にも、經濟的にも、心理的にも（コリント後六ノ四）騷擾にも　日常生活にも、さう云ふ苦しみに遭つても、凡ての時に自在性を握つてゐる。パウロは其處に新しいパラドックス（逆理）を用ひてゐる。（コリント後六ノ八―一〇）

第六章の終から第七章の初にかけては、コリント敎會が道德的に失敗したことを少し書いて注意を與へ、肉體を神の御旨に叶はぬ道德的不義に置くなと敎へてゐる。

社會的批難に對する自在性

第八章には社會事業に於る自在性を說いてゐる。第八章九章はパウロの社會事業に於る精神的働きを書き、社會事業のために社會事業をするのでなく、キリストの愛に感激した結果それをするのだと云つてゐる。

第十章に於て、パウロは自分の批評に對して屈托してゐない。人の批評や攻擊に對する破碎力を說い

てゐる。（コリント後一〇ノ三―六）彼に反對する理論、哲學を全部破碎する力、即ち自在性があると云つて、へこんでゐない。

第十一章には皮肉なことを云つてゐる。自分が僞預言者と云はれても僞預言者でない理由を處々に並べてゐる。（コリント後一一ノ九、一三）そしてごく極端な言葉を用ひて皮肉を混へ、凡ゆる困難を突破する自在性を說いてゐる。そこで、コリント人が彼の體驗を無視し、あまりに容易に間違つた福音にくつつくことを悲しむでゐる。第十一章十六、十七節には「あの連中が自慢するなら、私も誇りたい。君等は賢いから私が愚かなことを云つても聞いてくれるなァ」といつてゐるが、パウロが野卑だと云つて嫌はれたのはこの點である。「君等は蹴つたり踏んだりしたから、こんどは私に打だれたり蹴られたりしてくれ」と二十節には皮肉を云つてゐる。

十字架による自在性

パウロは第十二章に來て、自分の無力を誇つてゐる。『私はこんなことを云ふても詰らないから止めて置かう。私は刺を持つてゐる。私は人間として詰らぬものだ』と、自在性を拒否し、『あまり神の惠、自在性が多いから、神は私に止針をくれたのだ』（コリント後一二ノ七）と云つて、人間としての誇を棄てて、かへつて自在性のない處に誇があると說いてゐる。（コリント後一二ノ九）弱いと思ふ時に神の自在性が入る、この思想がロマ書に入つて來てゐる。コリント後書は偉さうに自分の自在性を高調し、ロマ書は、自分は詰らない、神の働く力が大きいのだと云つてゐる。

第十三章は挨拶を書いてゐる。これからは十字架を通しての自在性しか說いてゐない。第十三章一、四節には、十字架による自在性が神に現れる如く、私も十字架による自在性を持つてゐる。不義を喜ばず、飽く迄神の正義を生かし、新しい神の國運動のために行きたいと云ふ。少し峻嚴なる挨拶をしてゐる。そして第十三章十一節の結論をもつてこの手紙を終つてゐる。ロマ書は神の深い計劃と摂理を說いてゐるが、コリント後書は神の惠が人間に應用せられた場合の自在性を說いてゐる。

この書は主觀的なる法華經の觀音普門品と共通してゐる點はあるが、更に力强く進んでゐる。が、そこにパウロの悲しいうらみも殘つてゐる。成程神の大きな力がパウロを生かしてゐるが、コリント教會の人々はパウロが彼等を愛すれば愛する程パウロから離れ去つた。（コリント後書一二ノ一五節）パウロは獻身的に働き、財產も精神も注ぎ込んで傳道に努力したが、コリント人は彼を嫌つた。個人的の自在性は社會全體が愛につき自在性を持つことにはならない。で、パウロは自分を棄て、キリストの愛の深い大きい攝理に生きようといふことに考を及ぼしてゐる。

そこで、コリント後書はロマ書の序論として讀むと面白い。然しコリント後書そのものでも近代的な味はふべき點がある。クリスチャンは卑屈な奴隷的な生活を送るべきでない。元氣な自在生活を送り、活潑なる生命の飛躍を體驗してその日を送らなければならない。

父なる神

主に柔順ならんとして、福音につける者が、卑怯にも大膽なる態度を忘れてゐますが、力戰して神の風の宣傳に勵む

と共に、パウロの教へてくれた生理的、心理的、道德的自在性、智識の自在性、聖靈の自在性を持つ事を許して下さい。我々に凡ゆる苦難を通し貫いて、大きな救の原理を示し、再生の道を敎へ、死して甦る、決して屈しない精神を體驗せしめて下さい。キリストの弟子に對し、怯まない息を吹き込み、パウロのやうに大膽に立たしめて下さい。キリストにより祈ります。アーメン

コリント後書の梗概

第一章　受難者の立場—救と自在の體驗—彼の誠意の問題—コリントに行かざる理由
第二章　彼の憂とコリント人の誤謬—罪を赦せ—自在の體驗
第三章　自己推薦の無用—罪を赦せ—救の體驗
第四章　恩寵と榮光—キリストあるのみ—不動の信仰
第五章　苦難を突進する新精神と感激の生活
第六章　圓通自在の生活—結婚に對する注意
第七章　聖潔のすゝめ—コリントの悔改めとパウロに對する誤解の氷解
第八章—九章　社會事業の實際とその心得
第十章　パウロに對する誤解—彼の戰鬪心
第十一章　誇の一章
第十二章　彼の神秘—一つの刺—無能による自在
第十三章　完全への忠告—第三次彼の至る前に用意せよ

第十一章　恩寵の福音

—ロマ書の概要—

道德發狂時代

當時のロマの文明は墮落の絶頂に達してゐた。人々の良心はたゞれ切つてゐた。かうした惡い人間の間に働いてみて、どれだけ人間が修養しようが努力しようが、到底望がないことがはつきり解つてゐた。人間相手でなく、神を相手にしていかなければならぬことをつくゞ〳〵感じた。又クリスチヤン仲間でもさうであつた。ガラテヤ書第二章十節にある如く、パウロは貧乏人專門に傳道せんことを托されてゐた。で、コリント後書等は、第八章九章を見ると一生懸命に救濟運動をすゝめてゐる。パウロはエルサレムの兄弟達が飢饉で苦しんでゐた時、隨分大きな救濟運動を實現し、諸敎會の獻金を集めてエルサレムへ送つた。

即ち使徒行傳第十一章二十七節以下に『その頃エルサレムより預言者たちアンテオケに下る。その中の一人アガボと言ふもの起ちて、大なる飢饉の全世界にあるべきことを御靈によりて示せるが、果してクラウデオ(皇帝)の時に起れり。爰に弟子達おの〳〵の力に應じてユダヤに住む兄弟たちに扶助をおくらん事をさだめ、遂に之をおこなひ、バルナバ及びサウロの手に托して長老たちに贈れり』と記されてゐる。

所が解らない連中がゐて、パウロの救濟運動はどうもあやしい。貧乏人にやつてゐると言つてゐるけれど、どうも自分の懐にいれてゐるらしいと言ひ出した。するとそれに共鳴してぶつ〳〵言ふものが殖えて來た。なにしろ千五百年前に奴隷を捕へて酷使するのを誇としてゐた時分であるから、外國人に金を送つて助けるなどゝ言ふことはどうも腑に落ちなかつたらしい。國際的救濟運動はやつと二十世紀になつて多少一般的になつたばかりであるから無理もない。神の愛を中心にしたはつきりした世界觀がなければ出來るものでない。それをパウロはやつたのだから解らぬ人が多かつた。

パウロはそれどころか自分の生活は自分で働きながら支へてゐた。夜は傳道をしたが、晝は天幕を縫つて働いた。外の使徒達よりもずつとよく働きながらかうした誤解を受けた。パウロはたまらなくなつ

て、泣きながらコリント後書を書いて辯解した。パウロは人間を救はんとして社會事業を起し、一生懸命に働いた。それにも係らず全く人に捨てられてしまつた。人は賣名家だと罵り、詐僞師だと惡口言つた。人間を相手にしてゐてはたまらない。で、彼は人間に見捨てられて、斷然神の方へ向きなほつた。その氣持でロマ書は書かれたのである。

ロマ書の內容

ロマ書はパウロの手紙のうちでは一番長く十六章にわかれてゐる。それを大體に分けて見よう。

一、ロマ文明の批評(一、二章) 二、生理と救(三、四章) 三、心理と救(五、六章) 四、宇宙の實在と救(七、八章) 五、歷史と救(九、十、十一章) 六、救を基礎とする新道德(十二、十三、十四、十五章) 七、挨拶(十六章) となる。

餘りパウロが救をやかましく言ひ過ぎると言ふので、いくらでも救はれるから、惡いことをどれだけしてもよいと言つてゐるのだと批難するものもあつた。また『善を來らせんために惡をなすは善からずや』(或者われらを譏りて之を我らの言なりといふ)(ロマ三ノ八) と記されてゐる。それで自分の言つてゐる意味は決してそんなものでないことを順序立てゝ說明したのがロマ書である。

ロマ文明の批評

ロマ文明はギリシャ文明からあらゆる淫蕩なものを受けつぎ、非常に圓熟すると共に墮落の極に陷つた。御馳走も一度食つたゞけでは足りない、それでうんと食つてから、指を喉に突込んで吐出し、もう

一度食ひ直す。それを三度迄繰返へさなければ承知が出來なかつた。ポンペイの發掘を見ると、そのため用ひられた大理石の臺が殘されてゐる。色慾生活は殊にひどくたゞれてゐた。ポンペイの道を歩くと敷石にもそれが刻みつけてある。家に這入ると目もあてられぬ恥しいものが、壁や天井に壁畫として書かれてある。

ロマ市の如き、六十萬の市民に對して二百萬の奴隷がゐたと言ふから、市民は市民權を楯にオドーロ(失業保險)を貰ひ通して、芝居を見たり、食つたり飲んだりして遊び暮した。日本にをける文化文政の如く男色も盛んに行はれた。ロマではひどかつた。『之によりて神は彼らを恥づべき慾に付し給へり、卽ち女は順性の用を易へて逆性の用となし、男もまた同じく女の順性の用を棄てゝ互に情慾を熾し、男と男と恥づることを行ひて、その迷に値すべき報を己が身に受けたり。』(ロマ一ノ二六—二七)と記してある。

こんなひどいロマ人でも救はれるであらうか? 人間を見ては失望する外ないけれども、神を信じたのがパウロだつた。

生理と救

然し救は決して人間の生理的な條件で左右されるものでない。特別な民族が救はれて他の民族は救はれぬと言ふことなどはない。顏の色が白いから、黑いから、黃色いからと言つて何等の區別はない。日本人でも朝鮮人でもアフリカ人でも白人でも救はれる。その當時ユダヤ人間には、自分達は神から特別に惠まれた選民であつて、他の異邦人は救はれないと考へられてゐた。成程ユダヤ人はゑらい。恐しい

自覺を持つて多くの天才を出して世界の文化に貢獻した。

ユダヤ人には特別な聖別の式があつた。男の赤坊が生れて八日目になると、生殖器の陽皮を自然石で切りとる。日本でも古來實行されてゐたと見え、事の初めを『皮切り』と言つてゐる。これを割禮と言つて、非常に大切がり、これがなければ人間でない位に考へてゐた。それで、キリストの弟子達の多くも、救はやはり割禮がなければならないと言つてゐた。けれどパウロは、救はそんな人間的な生理上の條件には何にも關係がない。たゞ神の恩寵によるものだと高調してゐる。(ロマ三ノ三〇)

心理と救

然らばよい者だけが救はれるか？　否全く神の力によるものである。今更人間が努力した所で、どうにもならない。益々罪を深くするばかりだ。たゞ神が我々を義しきものとして下さるのでなければ駄目だ。我々が神の前に赦され救はるゝのは、神が我々を無罪として宣告されることである。「無罪放免」と神が言ひ給ふ時に我々の罪は救はれる。いくら自分でよいことをしてゐるつもりでも、向ふの方で赦して呉れなければ、何時迄たつても無罪にはならない。

たゞ神がキリストのまぢめな死に免じて、無罪放免と宣告し給ふ時にのみ救は與へられるのである、とパウロは確信してゐた。(ロマ五ノ一)

宇宙の實在と救

宇宙の根本である神が、此救を完成し給ふ。それで救は完全なのだ。內側から我々を救に導くのは聖

靈の御働きである。(ロマ八ノ二六)　超越的な神は父なる神であり、內なる神は聖靈の神であり、人間を通して現れし神は子なる神である。即ち無限なる神が、有限なる人間を救はんとされる時、超越と內在と人間を通す表現として現れ給ふた。神が人間の內側から、外側から、人を救はんとして努力し給ふのである。キリストは、宇宙の實在の人を救はんとする意志の表現である。(ロマ八ノ三三、三四)キリストを見ると、神はどれだけ人間を救はんともがき給ふかをしみじみと感じる。我々が救はれたいと願ふ前にキリストは血を流してまで我々の救を完成し給ふたのだ。單なる歷史上のキリストだけではない、永遠に亘つて變らぬ神の救の意志の權化である。これを思ふ時、キリストの愛より離れることがどうして出來よう。『我等をキリストの愛より離れしむるものは誰ぞ、患難か、苦難か、迫害か、飢か、裸か、危險か、劍か、……われ確く信ず、死も生命も、御使も、權威ある者も、今ある者も後あらん者も、力ある者も、高きも深きも、此の他の造られたるものも、我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを。』(ロマ八ノ三五、三八、三九)神の救はんとする愛は絕對不易である。これによつて我々の救は可能なのである。

歷史と救

それは歷史のうちに現れてゐる。どれだけ人間が迷つても、神は捨て給はず救ひ給ふ。キリストの先祖にも姦通者や嘘つきがあつた。ダビデはバテセバを取るために、ウリヤを戰場の露と消えしめた。ヤコブは家督の祝福を受けるために父をだました。それでも悔改めればキリストの祖先にさへならしても

らつてゐる。決して心配することはない。必ず我々は救はれる。（ロマ九ノ八、一五、二四、二五）

救を基礎とする新道徳

この救はんとする愛を基礎として生活を送れば、新しい道徳が生れて來る。どれだけ無茶をするものにも、親切をして救つてやらうと言ふ氣になつて來る。いくら失敗してもその尻拭をしてやらなければならない。倒れゝば起してやる。どれだけ悪口いはれても、逆つても愛をもつてやつてゆかねばならない。（ロマ一二ノ一―二一）

かうした生活のうちからキリストを再び見上げれば、新しい姿が目の前に現れて來る。それは決して千九百年前の大工ではない。肉體的にも心理的にも、無限の愛をもつて救はんとしてゐる宇宙の神の姿である。歴史を見よ。如何に多くの人々がどん底の生活よりキリストによつて救はれたことであらう！實にパウロはその一人であつた。彼は清い者を殺した。（使徒行傳七ノ五八―六〇）キリストの弟子たちを亂した。その大反逆者をも救ひ給ふた。その經驗より歸納して、彼は凡ての人が救はるべきことを信じないではゐられなかつた。神の救はんとする愛は絶對である。

父なる神様

少し賢いた者は心を頑くなにし、あなたの愛を疑つて自暴の心持に陥ります。がパウロは悪口を言はれても、淋しいうちに神の愛を信じ、世を動す福音を殘して置いて失れました。天幕を縫ひながらキリストの愛を町から町へと傳へて歩き、地中海沿岸に神を敎へて歩きました。我々もどうか、晝は働きつゝ、夜は泣いてゐる人や、病氣の人や、働く人や、苦しむ人のため、淋しい人生を送つてゐる人達のために盡させて下さい。もう一度ロマ書の福音を味ひ、キ

リストに現れた神の愛を感じさせて下さい。貧民窟、監獄、漁村や農村の人達、炭坑に沈む人達にこの救を知らせることを一日も早く許して下さい。キリストによりて祈ります。アーメン

ロマ書梗概

第一章―第二章　ロマ文明の批評
第三章―第四章　生理と救
第五章―第六章　心理と救
第七章―第八章　宇宙の實在と救
第九章―第十章―第十一章　歴史と救
第十二章―第十三章―第十四章―第十五章　救を基礎とする新道德
第十六章　挨拶

第十二章　解放の福音

―ピレモン書の概要―

奴隷文明の確立

ローマに於て、奴隷制度は殆ど完成の域に達した。ローマは富と共に、奴隷の數を増加して行つた。シーザーは、ゴールから歸つて、六萬五千人の奴隷を賣つた。パウラスは十五萬の奴隷を賣つた。ユダヤの滅亡に際して、九萬七千の奴隷が賣られた。ある者は奴隷四千百十六人も持つて居た。ブレーヤーの云ふ處によると、イラオデオの時に、ローマの市民權を持つ者は、六百九十四萬四千人であつたが、奴隷は二千八十三萬二千人あつたと云つて居る。即ち三人の奴隷に對して、一人の自由民があつたやうな譯である。古代ローマの法律に依れば、奴隷は全く主人の命に從つて殺される目にあはされても仕方がなかつた。奴隷には何時も重い鎖をつけて居た。番人の如きは、何時も入口に繋れて居た。鑛山には

多くの奴隷が送られ、彼等は裸體で働かねばならなかつた。彼の有名なるケートーは、ローマの大地主に勸めて、老いたる牡牛と、老いたる奴隷と病人は、棄ててしまつた方がいゝと云つてゐる。タイベル河の川中島には、病める奴隷が多く捨てられて居た。奴隷はまた玩弄物であつた。

こんな時代に、弱者、貧民の福音としてのキリスト教が、地中海の一部から宣布し始められた。利己的な支配階級が、その福音に反對したのは當然とも云へよう。イエスの弟子パウロは、その愛の福音をひつさげて、地中海の沿岸諸國を遍歴した。そして彼の世界主義は、ユダヤ國粹主義に忌避せられて投獄せられることになつた。そのローマに於る入國中に面白い一つの出來事が起つた。

監房内の友人

我々もよく監獄で經驗することであるが、同じ雜居房に居るものなどが、獄中の淋しさに、いろんな事を話し始める。恐らくは、新約聖書ピレモン書に書かれてゐる奴隷オネシモは、パウロと監房を同じくした爲に親しくなつたものと考へられる。『君はどうして此處に來たんですか』『私は、小亞細亞から逃げて來たんです。皇帝の都が見たいものですからね、一度ローマに出て來たいと思つてやつて來たんです。するとすぐ捕へられたんですよ……そしてあなたは、どうしてまあ、こんな處に來られたんです？』『僕ですか、僕はね、耶蘇教なんですよ。耶蘇教を宣傳すると國法に觸れると云ふんで、攝へられたんです』『耶蘇教と云へば、私の家の旦那も耶蘇教でした』『そら珍しいね、名前は何て云ふ人です？』『ピレモンつて云ふんですがね』『ふふム、すると、あのコロサイの近所のピレモンさんかね、その人な

ら私は知つてる。』

斯うした話から、獄中で落合つた使徒パウロと、奴隷オネシモが、それから仲好くなり、パウロは遂に、オネシモの主人ピレモンに、奴隷解放の手紙を書くやうになつたのである。手紙はまことに短いもので、四百字詰の原稿用紙であれば、二枚と一行で濟む位のまことに要領を得たものである。然し、今日新約聖書に殘つてゐる使徒パウロの書簡の中で、最も手紙らしいもので、熱情に燃えてゐるものは、この手紙であると云へよう。字數は僅かに九百十七文字である。然し、この手紙のあることによつてキリスト教は、どれだけ無產階級にとつて力强いあるものを殘してゐるか判らない。この手紙は、アブラハム・リンコルンの書いた奴隷解放の宣言書に比べて、その影響する處は小であつたかも知れない。然し、その心情の美しさに於て、八百萬の奴隷解放の宣言書も、一人の奴隷解放の手紙も大差はない。今日解放運動は、一種の流行である。然し十九世紀前に既に今日の解放運動者と何等差のない、合理的な奴隷解放者があつたことは痛快なことである。今日のレニン主義やマルクス主義者は、暴力を基礎とした解放運動を是認する。然し、パウロの解放運動はそれと正反對である。彼等は唯物史觀を基礎とし、階級闘爭によつてのみ、凡てが解放出來ると思つてゐる。それに反して使徒パウロは、暴力に依らず、征服によらず、たゞ愛と好意による善意の奴隷解放を實行せんとした。

ピレモン書は實に宗教的社會運動をなさんとする者にとつて、最も善き教科書である。卽ち、キリスト教の立場から唯物史觀に挑戰し、暴力に反對し、私有財產制度の收用と、勞働忌避の思想に依らない

で、どこ迄も神と十字架の眞理を基礎として、自由平等の世界を確立せんとした。

聖愛の社會的實現

或る人々の間に於ては、自由の運動と信仰の生活は、相容れないと云ふ人がある。それ等の人々は、現存せる社會を最上のものと考へ、或種の財産が搾取と專有とに依つて、利己的に用ひられても、キリスト教の生活樣式と何等相反しないと思つてゐる。此處に大きな矛盾が横はる。この手紙を宛てられたピレモンの如きは、この種の傾向を持つてゐた人と考へられる。それに對してパウロは、高いキリストの立場から奴隷の解放を敎へたのである。

本書第十一節を讀んでみると、奴隷オネシモが、ピレモンに迷惑をかけたことが出てゐる。「彼前には汝に益なき者なりしが」とあるは、確かにその事を意味してゐる。元來、奴隷勞働といふものは能率の低いものであつて、目的を意識して勞働するものに比べて、約三分の一か四分の一の能率しか持つてゐない。これは强制勞働の凡てに於てさういふことが出來る。恐らく奴隷オネシモも、人生の目的を明確に意識しなかつた時は能率も低く、主人に對して、あまりよき僕ではなかつたらしい。それが主家を出奔し、獄中に於てパウロに敎訓を受けるやうになつて、全く生れ變つたものと見える。

「今は汝にも我にも益あるものとなれり」(ピレモン一一節)

こゝにオネシモの更生があつた。勞働の神聖と非神聖は、人生目的を明確に意識するかしないかに伏在する。奴隷オネシモが、犧牲の十字架を意識した時、彼はも早や、精神的に云ふて奴隷ではなかつた。

我々の精神革命は、斯うした方面から社會改造の實現を期しなければならない。

オネシモとしても、ピレモンの家に歸ることは隨分氣づらかつたらう。然し、パウロが弟子テキコを小亞細亞方面に派遣する序があつたものだから、コロサイ敎會のエパフラスも同行することになり、それに奴隷オネシモをも同伴せしめることになつたことゝ思ふ。これはコロサイ書第四章七節以下十七節迄を讀めば、ピレモン書を送られた人々の名が出てゐることを見てもよく判る。

「もはや奴隷の如くせず、奴隷にまさりて愛する兄弟の如くなれ」(ピレモン一六)

經濟的解放や政治的解放は、人生の根本に觸れない。一八六一年ロシアの農奴が解放せられた時、乞食が一度に八萬人も殖えたと報告せられてゐる。農奴は解放せられたけれども、兄弟愛を基礎として解放せられたのでなかつたから、自由は獲得したけれども、貧乏になつた。經濟的解放は、利益中心の解放運動であるから、利益以外には觸れない。政治的解放に就ても同樣なことが云へる。一八六五年、米國の黑奴が解放されたとき、政治的には自由になつたけれども、經濟的には何等の變化がなかつた。それは、政治的の解放が、愛を基礎にしてゐないからである。眞正の解放は、單なる經濟的、また政治的のものではなく、全人的の解放でなければならぬ。

「我は殊に彼を愛す、まして汝は肉によりても主によりてもこれを愛せざるべけんや。汝もし我を友とせば、請ふ、我を容るゝ如く彼を容れよ」(ピレモン書一六、一七節)

宗敎の力によつて、昨日の奴隷が今日は友人となり、兄弟と早變りしたのであつた。經濟的解放は、

奴隷を他人にするまでのことである。政治的解放は、捕虜を他國民として取扱ふだけのことである。然し、十字架愛による奴隷解放は、奴隷を自分の兄弟、自分の友人と變化し得られる。かうした意味に於て、眞正の社會組織は、心理的基礎を持つたものでなければならないと云ふことを我々は教へられるのである。

自由に最も自由に

パウロは更に、その奴隷解放を強制された氣持でなく、自分の發意から遂行せんことを教へてゐる。

「これ汝の善の已むを得ざるに出ですして心より出でんことを欲したればなり」（ピレモン書一四節）

レニンの革命運動やムツソリニーの改造運動には、恐ろしい強制が含まれてゐる。強制の世界は牢獄の世界である。暴力革命による改造運動は、人間性の發意から來たものではなく、強制によつて來たものである。從つて思想の自由もなく、議會による顧慮もなく、多數の意志の尊重もなく、暴力の強いものが革命に成功する。さうした革命を要求することは、未開時代への復歸である。パウロの態度はそれと正反對であつた。我々が社會改造を行はんとする場合に、矢張りパウロのやうな態度をとらなければならぬ。

賠償？非賠償？

猶パウロの感心な點は、彼の窮乏した中から、奴隷オネシモの負債を賠償せんと申出たことである。彼もし汝に不義をなし、または汝に負債あらばこれを我に負はせよ、我償はん。汝我に身を以て償ふべき負債あれば

我これを云はず。（ピレモン一六、一九節）

ロシアの革命は、產業に對して無賠償主義をとり、イギリスの改造運動は賠償制度をとつてゐる。凡ての富を搾取的に解釋する時には、無賠償主義もいゝかも知れない。然しある種の富は勞働階級の血と汗の結晶であり、勤儉力行の賜物である。若し、無賠償主義で革命をやるならば、この種の尊重すべき富迄をも掠奪する恐がある。使徒パウロはピレモンが彼に拂ふべき負債があつたに拘らず、それを問はないで飽く迄賠償しようと申出てゐる。曾て、私が英國の勞働首相マクドナルド氏に尋ねたことがあつた。

「あなたは重大產業を國有にする場合に、賠償しますか？」

『賠償します。それは有產階級から稅金をとり立てゝ、彼等自らの富を賠償するのです。』

かうした答を私は聞いたことがあつた。それは如何にも意味の深い言葉である。我々もこの賠償主義の改造運動に就て、深く考へておく必要があると思ふ。

以上私は、パウロの奴隷解放の精神が、どうした處から出たかを考へた。パウロはキリストの贖罪意識を出發點として奴隷解放を考へてゐた。贖罪意識を基礎にするならば、如何なるものに對しても賠償し、如何なる奴隷をも解放する運動をしなければならぬ。贖罪意識は、世界の最惡なるものをも救はんとする連帶意識の結晶したものである。どんな惡人もみな自分の血を分けた兄弟である。その罪は自分に責任がある。これが卽ち贖罪意識である。この意識を基礎にしてパウロはピレモンの奴隷を解放した。その後、若しもキリスト教會が、パウロのやうな意識を持つて居れば、世界に奴隷制度を早くなく

すことが出來ただらう。否、肉體的奴隷とは云はず、性慾上の奴隷、賃銀奴隷、凡ゆるものが早く解放せられたことゝ思ふ。不幸にして、民族の大移動、中世紀の混亂は、この十字架愛を實行させることを遲らせた。一旦實行してゐたものも、再び混亂へ復歸した。然し、十字架愛による解放運動は永久の眞理である。

ピレモン書に現れたパウロの精神は、よく我等を敎へてくれる。

父なる御神、

人類の誤謬に、我々は未だに征服被征服の關係を保ち、強國は弱小國を虐げ、有產階級は無產階級を壓迫して居ります。未だにアフリカに於ても、支那に於ても、ある形の奴隷制度が行はれ、產業的にまた性慾的に、賃銀奴隷と白色奴隷が公然行はれて居ります。願くは人類に贖罪意識をふかく敎へ、我等のために十字架の上に流し給ひし血を意識して、我々もまた社會の連帶意識に目醒め、單なる經濟的動機によらずまた政治的野心に捉れず、たゞ聖愛の動機より御國を地上に來らせるため、凡ての奴隷を解放させ給へ。そのために我々の血が必要とせられるならば、我々の血をそゝがせ給へ。我々もまた十字架を負ひてキリストの御足跡に從ひたいと思ひます。我々にもう少し切實に今日の下層階級の窮狀を意識する純眞なる良心を與へたまへ。また父なる神よ、たゞ暴力と唯物思想のみによつて解放を急がんとする哀れむべき人々を憐み給へ。彼等の目を開き、眞正の解放が、たゞキリストによる愛と勇氣と叡智によることを敎へ給へ。我等の爲に血を流し給ひしキリストによつて願ひます。アーメン

ピレモン書梗概

第一—八節　挨拶—女アピア同志アルキポ家にある敎會。感謝。信仰と愛を知る。我等の善行を知りキリストを知る。パウロ、ピレモンの愛を感謝す—聖徒も慰められる。心易いピレモン

第九—十三節　愛による嘆願—奴隷の處置—奴隷オネシモ

第十四—二十一節　合意と愛による奴隷解放。脫出の攜理。奴隷以上兄弟愛の出發、卽ち肉體的にも宗敎的にも愛すべきこと。友として解放せられたる奴隷不義と負債の道德的經濟的償却。身代金の返濟と奴隷所有者の身柄—奴隷の爲なやむパウロ—從順の要求

第二十三節　釋放近し宿の準備せよ

第二十四節　マルコ、アリスタルコ、デマス、ルカよりの挨拶

第二十五節　祝福

第十三章　完成の福音

—コロサイ書の概要—

自律的宗敎生活へ

コロサイ書は監獄で書かれたパウロの手紙である。（コロサイ四ノ四、一〇）この手紙は恐らく、パウロがロマの監獄に這入つてゐる時、エペソの附近のコロサイからエパフラスと云ふ人が使ひに來た、そのエパフラスに托して持つて歸つたものであらう。エパフラスは忠實な信仰厚い人であつた。コロサイ敎會は、パウロが一度も訪問したことのない敎會ではあるが、信仰が進んでゐるから激勵の手紙を呉れろと云はれて書いたものである。パウロは監獄で四通の手紙を書いたが、ラオデキヤの方へも送つたからそれを讀んでくれ（コロサイ四ノ一六）と云つてゐる。何故コロサイ書を書いたかと云ふに、クリスチヤンでもぐら〳〵してゐた人がゐたので、ぐら〳〵しないようにと勸告したのである。（コロサイ二ノ一六、二〇）

一旦良心宗敎のキリストを認め乍ら、まだ飲むこと食ふことに重きを置く人がゐて、（カトリックでは今猶聖晩餐に飲む葡萄酒やパンが祈によりすぐ聖體に變ると云ふ）祈によりてパンがキリストの肉體に

變り葡萄酒が血に變るのだと云ふ。御供物に對する迷信がキリスト教の中に入つて來た。熱心になるとフエスチックな信仰になる。正月になると特別な感じを持つ。クリスマスやイースターは宗教が旺になる程盛になる。私は、宗教的な脈搏は、良心宗教が進む程鮮明になると思ふ。幼年期に於ては半意識だから運動會を喜んだり、クリスマスを喜ぶ。だから幼年期にはクリスマスは必要である。少年期にはまだクリスマスなどを面白がるが、大學に入るやうになるとそれが詰らなくなる。第二章二十節にはさう書いてある。「死にてこの世の小學を離れしなれば」と。二宮尊德が斯ういつた、孔子が斯ういつた、德川光圀が云々と云ふが、お前達の方が偉くなつてゐるのだ。「捫るな、味ふな、觸るな」と云ふ非自主的な宗教に支配せられてゐる（コロサイ二ノ二二）が、これは他律的宗教である。他律的宗教と自律的宗教との間には區別がある。幼年期には他律的宗教であるが、青年期に入れば自律的宗教にならねばならぬ。コロサイ書に於ては自律宗教を主張してゐる。人に云はれなくとも自律宗教が確立すれば、クリスマスやイースターを守つてもいゝ。が、それらに縛られるやうでは他律的である。

三重の完成

この書は完成した福音である。（コロサイ一ノ二二）完全なる姿といふことをパウロはコリント前書から云つてゐるが、少し位はと云ふ割引をしてはならない事をパウロは考へて來た。人間は間違があるのがほんとだと云ふが、間違がないやうにしなければならぬ。テサロニケ前書第五章二十三節にも出てゐるが、パウロの全體の手紙を通じて全くの潔めを繰返してゐる。特にコロサイ書に於てそれが徹底してゐ

る。パウロはコロサイ教會に對し、信者達が徹底した生活を送つて欲しいと云ふ希望を云ひたい爲に、キリスト自身により三重の完成があつたことを云はんとした。第一は宇宙の完成、第二は人類の完成、第三は良心の完成である。で、パウロの考では、宇宙の完成が現れたのは人間が現れたからで、人類が完成すれば、宇宙は完成する。人類の完成は、キリストのやうな人格を手本とすればいゝ。キリストの出現によつて宇宙全體が完成した。で、凡ての生存の目的はキリストを中心にして、キリストを目的標準として進化するやうに宇宙は創造せられてゐる。それを彼は更に引繰返して、宇宙はキリストの愛により創造せられたものだと云ふ。そこにパウロの徹底した宇宙完成論がある。之が第一章に書かれてゐる。世界にこれ程大膽に人生觀と宇宙觀とを融和さしたものはないと思はれる。

キリスト教の宇宙觀はコロサイ書の宇宙觀より以上に出てゐない。キリスト教は元來理論的宇宙觀を持つてゐない。電子論、原子論がどうだとか云ふ理論は持つてゐないが、人類に關する經驗をキリスト教は持つてゐる。然し人類の經驗を通して與へた貴い體驗が充分宇宙の方向を示指する。宇宙に就て我々は殆ど眠つて、無意識的部分が多い。また人類に就て半意識であり、良心についてだけ全意識を持つてゐる。キリストに於ては良心の髓であるから、キリストを見れば宇宙の方向が解ると云ふので、パウロは宇宙觀と人生觀を融和さしてゐる。だからキリスト教は人生觀から出發した宇宙觀を持つてゐる。良心が濁らなければ宇宙も濁らないが、良心がばら〳〵になると偶像教になる。そして太陽とか月などいろんな變化性を持つた迷信に陷る。良心宗教にはそんなことはない。良心運動が盛んな時は決して

墮落した宗教に復歸しない。で、キリストが來たのは他律的宗教を自律的に完成するのだと云はれた。この氣持が解らなければ眞の宗教生活に入れない。キリスト教が凡ての宗教の完成と云ふのは、この良心を完成するからである。

キリストによる新創造

第一章の十五節には大膽なことを書いてゐる。彼により萬物は造られたと。こゝにコロサイ書の思想はキリストが宇宙を作つたと云ふ風に、キリストを創造主だと說いてゐる。之は恐らく疑問になる處であらう。それは超越の父なる神が造つたので、キリストが作つたことはをかしいと云ふ。之は贖罪の方面から考へればキリストを單なる人間として考へず、宇宙最高の愛として考へる。パウロによればキリストは卽ち宇宙最高の愛である。單なる肉體のキリストと云ふのでなく、このキリストは宇宙の表現といふ意味である。卽ち無限の神が有限に顯現する。で、無限の神が有限に現れて來るのをパウロの言葉で『子』と云つた。で、宇宙は神から見れば有限の寄集めである。だから無限の神が有限なる姿を現し給ふ時には、キリストの形に於て現すのが最も完成してゐる。そこで有限と無限に連絡がある。無限の神が有限に現れ得るものだと云ふが、それは愛として現れる卽ちそれがキリストである。すると根本原理に於てはキリストである。キリストの根本が宇宙を創作する處の根本原理である。それが卽ちヨハネ傳のロゴスで、初に言ありと云ふ「言」は、人間が何か云ふ時に、心が物として現れるので、無限を、とするなら有限は言葉である。ヨハネ傳第一章三節を見ると、これにより宇宙は創られたと云ふが、ロゴ

スは哲學とキリスト愛が宇宙を創つたと云ふコロサイ書の思想とは一致する。

單なる人間キリストが宇宙を作つたのでなく、宇宙の根本原理としての無限愛が有限に表現せられたものである。それが體に現れた。キリスト體が聖淨なもので之により宇宙が完成したのだとパウロはいふ。ある人はこの大膽な思想を厭がる。これはノスチックの思想から來たのでキリスト教でないと云つて排斥する。ヨハネス・ワイス Johnes Weiss と云ふ人はこの部分を厭がる。が、私は無限の心が言として現れる不思議なる愛が、有限にも現れることを信じたい。私自身は斯ういふ神秘的な光景が、神の現す體であると信じてゐる。我々は宇宙の不思議なる存在、活動以上の活動に出會してゐる。之は不思議なる神の惠である。これを味ふのを奧義とパウロは云つた。之は單なる物理學的法則では說明出來ない。

人類社會の完成

パウロは更に人類の完成を說いてゐる。彼の爲につくられた、卽ちキリスト愛が目的として作られたといふ。愛それ自身が動機で、手段で、目的である。（コロサイ一ノ一六、一七）そして第一章十八節の教會は社會と云ふ意味で、神聖なる社會を完成するための人類社會である。エクレジア（聖會）は人類の一番上に屬してゐる。社會は彼の體で、キリスト愛はその首についてゐる。社會は愛なくして出來ない。キリストのやうに人の罪をゆるして行つて、初めて新しい愛の社會が生れるのである。今の教會はまだ完成してゐないので、眞正の社會が生れゝば、キリストの愛がわかつて來る。キリストは社會の首であ

る。そして社會はキリスト愛の體である。社會は着物の縦横である。それをキリストに着せるのである。オーグスト・コントは社會は精神の衣だと云つた。キリスト愛は宇宙の精神である。で、社會はキリストの衣即ち「體」である。

これを發展させたのがエペソ書である。『彼は初にして死人の中より最先に生れ給ひし者なり』（コロサイ一ノ一八）即ちキリストは再生力そのものである。第一章十九節二十節には、キリストに於て最高の道德的標準が完成してゐる。キリストに於て宇宙凡ゆるものがその極をなしてゐる。彼は大極であり、宇宙の完成である。之より以上に人類は仕めない。パウロは絶對の完成を云つてゐる。この絶對の完成が、パウロをして世界に傳道せしめたのである。今日の教會に力がないのは、この大極を缺いてゐるからで、宇宙の完成の徹底を缺くことにキリスト聖會の行詰りが存する。この標準により第二章三節は書かれて行つた。三章の五節には、地上につけるきたない宗教を棄てゝ、良心宗教に生きよと教へてゐる。（コロサイ三ノ九、一二、一六節）そして父も妻も、子も僕もキリスト愛を完成しなければならぬ。（コロサイ三ノ一八―二五節）パウロはこのキリスト愛により新しい個人生活、新しい社會生活を完成するがいいと教へてゐる。そして第四章十二節にパウロは繰返して、エパフラスは汝らの全くならんことを願つてゐると記してゐる。

父なる神

このパウロの福音により我々が全くなる道を教へられて感謝いたします。宇宙の深い原理に從ひ、人間の經驗、自暴

自棄を越え、目醒めざる中にさ迷つてゐる者を呼醒し作り換へて下さい。宇宙はこの愛を動機とし、手段とし目的として進化し、造られ、完成せしめられることを教へて下さい。キリストの中に内在する深い愛もて我々を完成せしめて下さい。日常生活の偶像的な處を取除き、この腐敗した時代に我々をきよく住ましめ、救ひ給はんことを、キリストによつてお願ひします。アーメン

コロサイ書の梗概

第一章　パウロの祝禱と感謝（一ノ八）　祈の本文（智慧と德と責任部署に對する祈）（九ノ一三）　萬物の主なるキリスト（一四―二〇）　パウロの努力―其の患難の缺けたるを補ふ、奥義としてのキリスト異邦人（二一五―二一九）

第二章　ラオデキヤの人々に對するパウロの願望（一―二）　信仰に對する確信（三―七）　完備せる福音（八―一五）　幼稚なる形式宗教と完成の福音

第三章　甦れるものへの天來の福音（一―四）　新人と新生活（五―一一）　新しき道德と愛（一二―一四）　充足せる智慧（一五―一七）　家庭生活と福音（一八―二五―四章一）

第四章　祈禱につき宣傳につき訓誡（二―六）　同志に對する挨拶テキコ（七―八節）　オネシモ（九節）、囚人生活よりの挨拶（一〇―一八節）

第十四章　一元の福音

一元的福音

―エペソ書の概要―

宇宙の一元的見方はキリスト教に於ては常識的であつた。

エペソ書第一章、キリスト愛による宇宙の歸一、第二章、キリスト愛による靈肉の歸一、第三章、キリスト愛による諸民族の歸一、第四章、キリスト愛による宗教の歸一、第五章、キリスト愛による社會の歸一、第六章、キリスト愛による生活の歸一、と云ふ風に、エペソ書は一元的福音を說いてゐると云つてよい。

私はパウロが監獄の中で、徹底せる福音を書いたことを意味深く考へる。エペソ書はパウロの第九番目の手紙である。之が監獄で書かれたことは、第三章一節、第四章一節、第六章二十節によつて判る。第六章二十節には、キリスト愛の宣傳のために監獄に入れられたと書いてゐる。

宇宙の歸一

パウロは第一章の書き出しから神の恩寵を高調し、監獄に居ながらキリストを通して神の愛を知つたと書いてゐる。監獄の中で書いた手紙であるのに、この手紙だけは苦しみを書いてない、のみならず、他の手紙に見られない程、一章、二章、三章、四章、五章に「一」と云ふことを書いてゐる。一章十節に「キリストに在りて一つに歸せしめ給ふ」とあることは、凡てのものを一つにすることで、私が歸一と呼ぶ處のものである。キリストと云へば、單なる人間であると思つてしまふが、キリストが現れたことほど大變なことはない。菊の花が現れたと云ふことは植物學上大變な出來事である。同樣に、キリストが現れたことは宇宙の歩みから云ふなら大事變である。それを味つたのはパウロが監獄に居た時であつた。凡てが、キリストによつて一つになり宇宙を包む、即ち愛によつて一つになるのだとパウロは考へた。網の先の方は鉛が附いてゐるが、漁師の手で持たれてゐる處は一つである。と同じやうに、宇宙はキリストの愛により一つである。その愛が神の性質だと書いたのが、第一章の根本である。

第一章二十二節二十三節の「教會」と云ふのはエクレジヤと云つて、寄合ひとか、社會とか云ふ意味である。二十三節はこの社會を體にする、即ち社會はキリストの精神を中心にして現れてゐる。キリス

トの愛が精神で、凡ては體であると云ふ意味である。そして宇宙はこのキリストの愛により充ち溢れてゐる。これが第一章の示す處で、一切のものを愛により一元的に見てゐる。

靈肉の歸一

第二章はキリストの愛によつて靈肉を一つに見てゐる。神と人間が一つになる、それは人間と神とを隔げる罪惡を取去ることによつて一つになり得る。だから我々の罪惡を全部取去つて一つにしなければならぬ。第二章十三節の「キリストの血によりて近づくことを得たり」、或ひは十六節の「二つのものを一つの體となして神と和がしめん爲なり」十八節の「一つみ靈に在りて父に近づくことを得たればなり」と云ふことを、私はその意味に解する。我々の醜い我儘を滅して精神に目醒める。それは神の愛によりキリストが現れ、キリストの愛によつて、理想と現實、靈と肉、神と人間が一つになるといふ、それが第二章の根本である。我儘がある間、人間は神と接近出來ないが、我儘を殺した以上、神人合一になれると云ふのがパウロの思想であつた。

諸民族の歸一

さうすると、世界の凡ゆる民族が全部一つになれる。「即ち異邦人が福音によりキリストイエスに在りて共に世嗣となり、共に一體となり、共に約束に與る者となる事なり」（エペソ三ノ六）獨逸人、アメリカ人、黒ん坊がみな一體になる、これはキリスト愛による。敵をも愛する深い愛のみならず、その愛は測り知るべからざるもので（エペソ三ノ一八）斯樣なキリスト愛によつた深い愛が、各民族全世界を一つにす

る。

世界の軍備縮少も、國際聯盟も、國際裁判所も、このキリスト愛によらなければ一つになれない。

諸文化の歸一

そして諸文化が一つになるといふのが、第四章の根本精神である。四章の一節から六節にはその精神が出てゐる。愛が我々に誕生するなら、謙遜も柔和も寛容も生れる、で、『愛をもて互ひに忍び、平和の繋によつて御靈の賜ふ一致を守れ』即ちみんなが一つになり一致を守護しなければならぬ、と、パウロは云つてゐる。

この爲に體が一つ、(體とは表現を意味する)精神が一つ、希望即ち理想が一つ、バプテスマ一つ、神一つ、萬民が一つである。神は萬民の上にあり、貫き、その内に在し給ふ。斯ういふ一つを繰返して、更に十四節から十七節に來て、だから我々は妥協せず、愛をもつて社會を建てなければならない、とパウロは述べてゐる。愛の宗教の他に宗教はない。愛を持てば我々は悶える必要はない。斯樣に愛によつて、眞理が把持され、宇宙萬般が統一され、愛によつて凡てが一致されるのである。愛一元になつてゐることによつて、文化の歸一が出來る。それはキリストによつてのみである。我々はこの愛を實行するなら、新しい生活に入ることが出來る。それがエペソ書第四章十七節に出てゐる。愛の生活を送るためには、過去の因襲を脱ぎ棄て、新しいものにならなければならぬ。第四章二十四、二十五節には新しく進歩しなければならぬことを說いてゐる。萬民はみな枝に過ぎないのだから、世界が一つになつて、お

互ひに怒ることがあつてはならない。だから、エペソ書第四章の二十六、二十七、二十八、二十九、三十節等を見ると、大膽に互ひに許し合ひをして、一つになり、宗教の實現をしなければならぬと敎へてゐる。

社會の歸一

第五章は社會の歸一で、殊に、夫婦生活をきよめた明るい生活をしなければならぬことを敎へてゐる。一節二節には、愛せらるゝ子供の如く、明るい生活をせよと敎へ、それには光の子の如く歩み(エペソ五ノ七)、目を醒まして恥かしい生活を止めなければならぬ、と云ふてゐる。ギリシヤ時代の生活は實に恥かしいものであつたから、それを止めなければならぬことを敎へてゐる。エペソ書第五章十八節に「酒に酔ふな、放蕩はその中にあり」と云つて、御靈に滿たされよと勸めてゐる。第五章二十三節にはキリストがエクレジア、(聖社會)敎會の首だと云つてゐる。『男女が一體になる如く、キリストが社會を一つにして下さる、この奥義は大である』と彼は記載してゐる。

小亞細亞では社會を女性として見る。英語の如きは、軍艦や月などは凡て女性で現す。女性だから夫が必要である。その夫はキリストである、とパウロは考へた。ギリシヤでは、さう云ふものを實際に神婚と云ひ、祭つたものである。ギリシヤの町と神とが結婚式を擧げる、それを儀式にしたものである。でキリスト敎がそれを取上げて新しい社會組織に應用した。キリストのやうな愛の方が新社會の夫になり、首になる、そして愛の新社會が出來る。武力によらず、金權によらず、愛による社會が出來る。と

れがパウロの理想であつた。キリストのやうなやさしい方が人の缺點を赦し、新しい社會を創造したといふことは嘘のやうな話である。そこにキリスト愛による社會の統一がある。武力による統一でなく、愛による歸一である。

生活の歸一

第六章は生活の歸一を說く。生活が亂れて來るのは惡の業である。だから我々は惡を征服する力を持たなければならぬ。第六章には、惡に對する挑戰のために、信仰の七つ道具を持つべきことを書いてある。（エペソ六ノ一四—一八節）

宇宙を神の力によつて剛健にしなければならぬ。神の力によれば、我々の生活は統一される。パウロの考では天に惡の靈があつて我々が神に近寄ることを碍げると考へた。これは當時の思想でもあつた。それを蹂躙して、キリスト愛が我々に徹底しなければならぬといふのがパウロの考へであつた。

愛による歸一

パウロはこの福音の爲に敗殘の生活をしてゐるやうであつたが、敗殘でなく實際は勝つてゐるのである。これがエペソ書の徹底した氣持であつた。六章だけに一といふことは載つてゐないが、それでもこれだけ一といふことを高調してゐる書はない。

キリスト敎には哲學的一元論はなく、愛による一元論がある。愛が二元になると夫婦生活が二元になり、夫婦が二元になると社會が二元になり、多元的偶像敎的な社會が出來る。そして宇宙がばら〳〵に

見え、そこに鬪爭が始まる。反對に我々が愛をもつて宇宙を一つにし、靈肉を一つにし、民族を一つにし、良心を一つにし、社會を一つにし、生活を一つにすれば、神が一つであることが理解され、愛によつて凡てが一つになる。斯ういふ經驗的一元論がパウロの思想であり、また勝利であつた。ロマ時代の多岐多樣な生活も、キリスト愛が浸潤して行くと共に明るくなつた。中世紀の暗黑時代を通しても世界が明るくなつたと云ふのは、キリスト愛があつたからである。日本に於てもこのキリスト愛が殘つてゐる間、明るくなる希望がある。

父なる神

ヨーロッパの墮落した時代に於て、キリストの愛が世界に新しき道を敎へ、偶像敎の跋扈した時代に、神の一つ、宇宙の一つを敎へ、多岐多樣な階級鬪爭の時代に、階級の一致、民族の一致を敎へ、墮落した亂婚時代に一夫一婦の道を敎へて下さつたことを感謝いたします。我々もまたキリスト愛による宇宙の歸一、社會の歸一、凡ゆる文化がキリストに於て一つの焦點を見付けられるやうに、その事實をはつきり徹底せしめ、この後も我々が迷はぬ爲に、心にキリストが現れ給ふ事實を示して下さい。迷へる青年に、理論でなく愛の實行を通し、階級、民族の歸一が敎へられますやうに、我々の救主イエスによつて祈ります。アーメン

エペソ書梗概

第一章　キリスト愛による宇宙の歸一
第二章　キリスト愛による靈肉の歸一
第三章　キリスト愛による諸民族の歸一
第四章　キリスト愛による宗敎の歸一
第五章　キリスト愛による社會の歸一
第六章　キリスト愛による生活の歸一

第十五章　歡喜の福音

—ピリピ書の概要—

パウロの寶石

ピリピ書は、ベルリン大學教授ダイスマン博士によると、手紙らしい手紙であり、パウロを研究せんとする人が、第一に讀むべき書である。けれどさういふ意味ばかりでなしに、私はこの第十番目にかゝれた書、パウロの手紙として彼の思想の圓熟した頃の手紙を研究することは、パウロの思想の發達を考へる點に於ても必要だと思ふ。

ピリピ書は前のいろ〳〵な手紙の底に當つてゐる。だからピリピ書を讀めば、他の書を讀まなくとも、パウロの思想が判る。ピリピ書は四章しかないから、僅か十五分位で讀むことが出來る程簡單なものであるが、パウロの思想及び生活の寶玉が此の中にちりばめられてゐる。

エペソ書とピリピ書の關係を云へば、エペソはアジア、ピリピはマセドニヤであるが、大體書いた時期は接近してゐる。エペソ書を書いて間もなく、ピリピ書が書かれた。このピリピ書が監獄で書かれたことは第一章十三節を見ると判る。そこに繩縛と書いてあるから、パウロは鎖でつながれたのでなく、繩縛で縛られたらしい。ピリピ書は差入のお禮である。監獄に入つて嬉しいのはこの差入である。そして差入の中で一番初めに入れて貰ひたいものは、紙と手拭と齒みがきである。勞働運動者はいつも、手拭と紙と齒磨を用意していつ入れられてもいゝやうにしてゐる。昔は監獄の御飯は、パンと鹽と水であ

つたが、今では一日の食事は十四錢位で、麥と玉蜀黍の御飯である。

ピリピ書第四章十八節、十九節には差入を貰ふ喜びが書いてある「我々は凡ての物そなはりて餘りあり、既にエパフロデトより汝らの贈物を受けたれば飽き足れり。これは馨しき香にして神の享け給ふところ喜びたまふ所の供物なり」。パウロが這入つてゐたのはロマの監獄であつた。ピリピはギリシヤのマケドニヤにあつたから、ピリピからロマ迄遙々來て差入をしたことが彼は嬉しかつたのだ。ピリピ教會は貧乏であつたが非常に親切であつた。それは第四章十六節の「汝らは我がテサロニケに居りし時に、一度ならず、二度までも我が窮乏に物贈れり」と云ふことによつて知ることが出來る。パウロが第二傳道の際、テサロニケに居て困つた時、一度ならず二度迄もわざ〳〵ピリピから金を持つてきた。大體貧乏したことのあるものは、困つてゐる者に同情し得る。その事がコリント後書第八章二節に出てゐる。「患難の大なる試練の中に彼らの喜悅あふれ、又その甚だしき貧窮は吝なく施す富の溢るゝに至れり」即ち貧乏なくせに出すから、金持の金持より富んでゐる譯である。金持が百圓出すより、貧乏人が百圓出す方が金持の譯である。コリント後書第八章に出てゐるマケドニヤの教會はピリピ教會のことである。そんなに思つてくれてゐるピリピ教會に對し、パウロの感謝を現してゐるのがピリピ書である。

苦難の藝術

第一章はエペソ書コロサイ書の思想が出てゐる。エペソ書は惠、愛、祈をもつて書かれたが、コロサイ書は完成の福音であつて、苦痛を喜んで嘗めることを記してゐる。そしてエペソに出てゐる「天の富」

をピリピ書は多分に持つてゐる。またコロサイ書の苦痛の喜びもピリピ書には出てゐる。だからピリピ書には、エペソ、コロサイの思想體系が出てゐる。卽ち、第一章は苦難の藝術、第二章化身の福音、第三章精進の福音、第四章クリスチヤンの萬能を書いてある。

第一章二十九節は、コロサイ書第一章二十四節と似てゐる。

汝らはキリストのために啻に彼を信ずる事のみならず、また彼のために苦しむ事をも賜りたればなり（ピリピ一ノ二九）

我今なんぢらのために受くる苦難を喜び、又キリストの身體なる教會のために我が身をもてキリストの患難の缺けたるを補ふ（コロサイ一ノ二四）

また第三章十節に、苦難にも參與することが書かれてゐる。ルドルフ・オイケンに云はすなら、惡の起原に就ては判らぬが、それに打勝つ工夫が宗教であると云つてゐる。十字架はその根本の原理である。神の惠によりトての苦痛を蹂躙しなければならぬ。

これは我が何事をも恥ぢずして、今も常の如く聊かも臆することなく、生くるにも死ぬるにも我が名によりて、キリストの崇められ給ふことを切に願ひ、また望むところに適へるなり。我にとりて生くるはキリストなり、死ぬるもまた益なり（ピリピ一ノ二〇—二一）

生くるにも死ぬるにも凡ての事に大きな力をもて開拓し得た、心境がキリスト教の原理である。卽ち第一章に於ては苦難に勝ち得る力を教へてゐる。

化身の福音

第二章は化身の福音である。

反つて己を空しうし僕の貌をとりて人の如くなれり。既に人の狀にて現れ、己を卑うして死に至るまで、十字架の死に至る迄順ひ給へり（ピリピ二ノ七、八）

神の形を有限に現したことを體と云つてゐるが、キリストはその體をとりて人となり、死に、十字架にかゝると云ふ下向きの形をとつた。卽ち無限の愛を肉體に現した。その爲に窮屈な思をし、凡てを棄て、肉體の中に喜んで現れ給ふた。「空しくすると云ふのは、ギリシヤ語で「ケノシス」と云ふことで、英國ではこのケノシス運動が仲々盛である。殊に貴族の間にこのケノシス運動が流行つた時があつた。で、世界的有名な皮肉屋インゲ博士の如きは、ハイチヤーチほどローだと云つてゐる。さういふ一つの傾向を英國は持つてゐるが、日本にはこの氣持が缺けてゐる。少し金を持つてゐると、貧民窟に來ない。スコツトランドでは牧師たるものは、必ず一度は貧民窟に住むやうに、學校の正科として入れてある、これがケノシス運動の精神である。

資本主義でもアメリカの資本主義はちよつと變つてゐる。アメリカに共產主義が入るやうで這入つてゐないのは神の爲に凡てを出すといふ信仰があるからである。神を信仰してゐる國は、相續や、財產に對する考迄が變つて來るのである。この喜んで棄てると云ふ氣持は、第二章の化身の氣持である。

精進の生活

第三章は精進の福音である。自分はキリストのやうな生活にすぐに這入つたのではない、けれどキリストが自分を捉へてゐてくれるのだ。我々の本籍は天國にある。我々の國籍は日本だと思つてゐるが、我々の國籍は天國である。（ピリピ三ノ二〇）第二インタナショナルと第三インタナショナルと喧嘩してゐるが、我々は天國インタナショナルである。日本は我々の寄留地である。

宣教師は歸化しなければならぬと云ふ人があるが、我々はそんな小さな氣持でなく、大きな氣持を持たなければならぬ。我々はみな國籍を天に持つてゐると考へなければならぬ。

我既に取れり、既に全うせられたりと云ふにあらず、唯これを捉へんとて追求む。キリストは之を得させんとて我を捉へ給へり。（ピリピ三ノ一二）

我々はまだ完成の域に達してゐないから悲觀するが、いつの日にか完成する。船に乘つて居れば必ず目的地に着くやうに。我々の中に信仰について弱いと思つて悲觀する人があるが、信仰とは、この汽車は東京行きだと信じることで、安心して乘つて居れば、東京へ必ずつく。濱松で止まつてしまつて東京へは行かないだらうと考へて、濱松で降りてしまへば何もならぬ。

信仰とは神の愛の意識である。キリストが自分を捉へて下したのだと云ふ事を意識して、途中下車しないことを信仰と云ふ。乘つて居ればいゝ、「捉へ給へり」とはそれを云ふのである。そして前なるものを望んで行くといつかは完成する。

クリスチヤン萬能

第四章はコリント後書の精神を持つてゐる。コリント後書は融通自在の福音である。凡ゆるものを自在にするものを持つてゐる。コリント後書第六章八節から十節までに、この融通自在に就て書いてゐる。

我らは人を惑はす者の如くなれども眞、人に知られぬ者の如くなれども人に知られ、死なんとする者の如くなれども、視よ生ける者、懲さるゝ者の如くなれども、殺されず、憂ふる者の如くなれども常に喜び、貧しき者の如くなれども多くの人を富ませ、何も有たぬ者の如くなれども凡ての物を有てり。（コリント後書六ノ八—一〇）

表は暗いが、裏は明るいこの氣持が、ピリピ書の中に全部出てゐる。ピリピ書第四章十二、十三節はクリスチヤンの萬能を書いてゐる。融通自在はクリスチヤンの萬能である。「信ずる者にはなし能はざるなし」とキリストも云つて居られる。可能とは神自身何でも出來ると云ふことである。我々は斯ういふクリスチヤン生活に於て、凡ゆるものに勝ち得る喜を持つ。

斯ういふやうに、テサロニケ前書からのパウロの思想が、ピリピ書には全部入つてゐる。我々は之を實生活に體驗し實現しなければならぬ。

天の御父

我々は今尊き福音に接し、我々もまた凡ゆる苦難を、キリストの十字架の續きと思つて喜んで荷ふ決心をしてゐます。パウロの如く勇ましく、キリスト愛を實現せしめて下さい。我々の胸を捉へ、一生を通じてキリストの愛を實現させて下さい。キリスト・イエスの御名によつて祈ります。アーメン

ピリピ書梗概

第一章　苦難の藝術

第二章　化身の福音

第三章　精進の福音

第四章　クリスチヤンの萬能

第十六章　實行の福音

―テトス書の概要―

一　實行第一

テトス書はパウロが自分の愛弟子テトスに忠告を與へた手紙である。テトス書が送られた處は、日本の四國位のクレテといふ島であつた。（テトス一ノ五、一二）教會の組織運動をするため、テトスはこの島に送られた。クレテは風紀の惡い、懶け者の多い、キリスト教につき議論はするが、實行はしないと云ふ處であつた。そこへテトスが送られたのであるから、テトスは攻擊の的になつた。それに對して、テトス自身が、人の攻擊から輕んぜられないやうに、（テトス二ノ一五）また一つはどういふ人間を選んで教會に置くべきかと云ふ人選問題を命じたのである。

これは現代に比較出來る。現代の風潮は樂をして、甘い汁を吸ひ、勞働は出來るだけしたくない傾向を示してゐる。之はクレテ文化に似てゐる。（テトス一ノ一三、一四）マルクスの唯物的辯證法が何とか理屈は人以上に云ふが、欺く者、うまい事を云つて胡麻化しをする者が居る、さう云ふ時代に對し、眞實なる實行の生活を說いたのが、パウロのこの手紙である。

クレテ人は第一章十二節に出てゐるやうに、實に評判が惡かつた。第一に嘘、第二に惡しき獸、第三に懶惰また食を貪るものであつた。之は少くも、嘘をつき、虛僞の生活の多い、金儲け中心の大阪文明に似てゐる。獸と云ふのは、本能にのみ動いて知慧を用ひないことを意味する。それは單に、昨日飯を

食つたから今日も食べる、先祖が子を生んだから自分も子を生むといふ反對作用にしか過ぎない。また梅毒性の者や酒飲みは極端に怠ける。木賃宿へ行くと、どんなに好景氣の時でも怠けてゐる者がある、神戸の木賃宿の前に立つたら朝から銅像のやうに動かない人がゐた。私はその人に銅像といふ名前をつけて呼んでゐたが、彼は飲んだくれた結果、アルコール中毒で懶ける癖がついたのである。梅毒もさうであつて、淫賣婦の多くはなまける癖を持つてゐる。イギリスでは失業者が失業保險金を貰へる爲なまける癖がついて仕事に行かないので、仕事のある時能率をあげるやうに、なまけ癖から回復させる修養所があると云ふ。あまり怠け癖がつくと、自分の身體を自分で運ぶのも厭になるものである。これがクレテ人の癖で、現代にもその傾向がある。この虛僞、なまけ、食道樂から解放せられゝば、眞のキリスト教的人物になれる。パウロが教會の中心人物として選ぶべきものは模範的人物でなければならなかつた。その條件として、先づ第一、その人は神を中心として生活しなければならぬ。神を中心とした生活と云ふのだから、單なる表面的な生活でなく、部分的でなく、物質的でなく、宇宙全體を基礎とした生活でなければならぬ。第二に勞働を愛するやうにしなければならぬ。自分だけが食べたらいゝのでなく、他愛的な生活をしなければならぬ。クレテ人のやうであつてはならぬ。（テトス一ノ七）

實行の階段

此處に十三の注意が書いてある。（一）責むべき處なくと云ふのは、些細のことにも注意せよと云ふことである。（二）放縱ならずとは我儘でないと云ふ事である。十八世紀十九世紀時代は我儘な自由主義だ

つた。それが今日の遊廓や高利貸しをしても惡くないと思ふやうになつたのである。日常生活に於ても、今日は日曜日だから朝十時まで寢ようと云ふ事は、自分にとつて冒瀆である。自分は神の御榮を現す爲に來たのだから、自分でなく、神の生活の顯現であると思つてゐなければならぬ。(三)癪に觸るからと云つてすぐ怒つてはいけない。(四)酒を嗜まず、デンマークは最近二十五年間に、飲酒量が八割減つたと云ふ。之は强制的にやめさせられたのではなく、酒飲みの系統に發狂者が出るといふやうな事を知つた時に、一人一人が止めなければならぬと思つて、それを斷行したからである。惡いと知りつゝ止められないのは獸の種類である。(五)人を打たず、(六)恥づべき利を取らず、(七)旅人を懇ろに待ひ、(八)善を好まなければならぬ。孔子は、德を好むものが色を好む位にならなければならぬと云つた。みんながさうなれば、世の中はよくなる。德を好む者の熱度は、眞に好み出したら、色を好む以上である。(九)謹愼あり、(十)正しく、(十一)潔く、(十二)節制する。食ひたい時にも食はず、遊びたくとも遊びに行けない、それも矢張り自ら制することである。現代人の誤は自ら制することが足りない。(十三)敎を守るもの、テトス書第一章には斯ういふ事が書かれてゐるが、實行はなか〳〵むつかしい。之を實行した人間が卽ちキリストだとパウロは指摘してゐる。(テトス二ノ一四)

實行の模範

テトス書第二章は、第一章の精神をうけ繼いで、敎會内に於る老人、婦人、奴隷に對する實行的敎訓を示指したものであるが、それと共に、テトス自らが實行に於て、他人の模範とならなければならぬと

とを敎へてゐる。

なんぢ自ら凡ての事につきて善き業の模範を示せ。敎をなすには邪曲なきこと、謹嚴と、責むべき所なき健全なる言とを以てすべし。(テトス二ノ七、八)

パウロは、弟子テトスに對して模範的人物にならなければならぬと云ふことを要求してゐる。パウロは、屢々自分に倣へと敎へた。(テサロニケ後書三ノ七、九。ピリピ書三ノ一七)

兄弟よ、なんぢら諸共に我に效ふものとなれ、且つなんぢらの模範となる我らに循ひて歩むものを視よ。(ピリピ三ノ一七)

この流儀で、テトスも第二の模範とならねばならぬことを敎へたのである。それは言に於てのみならず、行爲に於ても模範とならねばならぬことを彼は要求した。(テトス三ノ一五)

再生の原理キリスト

第三章には、生れ變れば、それが出來ることを書いてゐる。(テトス三ノ三—六)前には智慧の足らぬ馬鹿者であり、意志の頑强な從はぬ者であり、感情に迷つてゐるもので、凡ゆる本能と樂しみの奴隷であつた。そして恨みあり、妬みあり、憎むべきもので、實に詰らない、自分で自分に愛想つきるものだつた。それがクレテ文化である。

クレテはエジプト文明とギリシヤ文明の橋渡しであつた。クレテを發掘すると、今から三千年前の文明の跡が出て來る。だから大名がなくなつても、大名の氣持が拔けなかつたのである。昔の事ばかり誇

つてゐる人がある。昔はこれでも一日十圓儲けてゐたのだから、八十錢の日給ぢや馬鹿らしくて働けないと云つて、過去の榮華が付き纏つてゐる人がある。だから年寄ると働けないから、若い時に働かなければ駄目である。いつも花見時のやうな氣持でゐてはならぬ。が、さういふ懶け者であつても、それをもう一遍再生せしめて下さる原理が宇宙にある。パウロはそれをテトスに指摘した。（テトス三ノ六）樣などは幾ら切つても生えて來るが、文明も一旦崩壞しても再建せられるものである。近頃親子心中が流行るが、やりきれないと思ふ世に居ても、どうにかやつて行かれる。それが再生である。イエスキリストの肉體がどんな形で甦つたかは知らないが、宇宙間にはそれと均しい原理がある。それは自分の力でなく、宇宙間に秘められた力である。テトスはそれを確信せよと教へてゐる。それは人を愛して、その愛が現れた時に再生があり得る。その確信により生命がある。どんな絶望したものにも、この不思議な希望がある。

日本では一年間に青年が一萬四千人死ぬ。イタリーは日本に比べて、人口比例にすると、三割方以上少い。つまり日本の青年には再生の原理がわかつてゐない。我々はまたやつて行ける時があるから、失望せずに、再生の原理があることを信じなければならぬ。これを信ずることによつて、我々が再生の生活を送り得る。第三章八節には「この言は信ずべきなれば、我なんぢが、此等につきて確證せんことを欲す」とある。斯ういふ原理に從ひ、我々が人に向つて確證することが出來る。それを、キリストに屬ける團體に云へばいゝと云ふのが、テトス書に於るパウロの忠告である。これが實行性をおびなければ

ならぬ。私は、共濟組合の一つも出來ない今の日本のキリスト教界を悲しく思ふ。もう少し我々は眞劍になつて、實行性を現さなければならぬ。神が人を愛してゐると云つても、キリストを現してくれなかつたなら、神が愛してゐるとは解らなかつた。その實行性の處に眞の福音があり得る。

父なる御神、

今日、我々の間に實行性を缺いて居ります爲、キリストの尊い福音が世に徹底せず、キリストの流された血が空しくなつてゐる事を思つて慚愧に耐えません。我々がキリストの血をもて敎へられた事を實行し、我々が天分に從つて働き、我々を通して働らさる、神を中心とした生活を示し、その犧牲的十字架愛を、日本にはつきり確證せしめて下さい。パウロがテトスに示した如く、我々にはつきりとした神とキリストの生活をなさしめ、更生の生活を送らしめ、大膽にキリストの運動をなさしめて下さい。日本を神の國となすために、キリストによつて祈ります。アーメン

テトス書梗概

第一章　怠惰なるクレテ人と實行の福音。　　第二章　テトスに對する實行的模範の要求

第三章　實行の模範キリスト

第十七章　友愛の福音

—テモテ前書の概要—

宗教運動指針

テモテ前書は六章から成立つてゐる。第一章、信仰に就ての訓諭。第二章、祈に就ての訓諭第三章、教會組織に就ての訓諭。第四章、宗教生活に就ての訓諭。第五章、宗教的社會事業（慈善事業）に就ての訓諭。第六章、經濟生活に就ての訓諭となつてゐるが、初めから終まで、この通りはつきり入

つてゐると云ふのではないが、これらが主になつてゐる。

これは、エペソ教會に殘しておいたパウロの弟子を心配して、遠くから手紙をやり、宗教運動に就ての指針を與へたものである。これに就ては斷りしてゐる。

われ速かに汝に往かんことを望めど、今これらの事を書きおくるは、若し遲からんとき人の如何に神の家に行ふべきかを汝に知らしめん爲なり。（テモテ前三ノ一四、一五）

テモテが初めから大きな宗教團體を任せられ、いろんな困難に出會したことをパウロは聞いた。それで忠告してやりたいが、往くことが遲いと氣の毒だと思つた。で、手紙を以てこの場合どうすればいゝと云ふ事を個條書きに書いたものである。これを見ると、當時の思想上の混亂がよくわかる。恰度今日のやうな辯證法的な理屈つぽいノスチックの思想が流行して、純粹なるキリスト教を信じようとしなかつた事が一つ。またその反對に、反動的信仰で、傳說ばかり云ふ極端なものがあつた。一方は新神學で一方は古いことばかり云ふ、その兩極端に責められた上に、偶像教の分子が强いものだから、エペソ附近の教會では、道德的訓練が充分でなく、また經濟生活に就ても、キリストの云ふ事を守る人は少く、或人などは國家組織をやかましく云ふ者もあつて、教會內部は大變だつた。その上テモテは病氣だつた、そして信仰を棄てる人があつた。（テモテ前一ノ一九、二〇）既にエペソでも、アレキザンデルとヒメナヨが信仰を落した事が書いてある。女の人の中にもさう云ふ人がゐた。また良心生活をせずに、却つて教會內部に混亂を招いた人がゐた。

さう云ふ混亂の最中に、年寄つたパウロが最も愛した弟子に、極親切な個人教授をしたのがこの手紙の內容である。手紙はなか〳〵書けないものである。パウロのやうな筆まめな人を見ると私は恥かしくなる。一人の爲にこんなに長い手紙を書いたことは、如何にパウロが親切に手まめであつたかが判る。そしてこれによつて、混亂せる教會內に指針を與へたことは有難いことである。

信仰に就ての訓諭

第一章では、キリスト教の信仰の本質は何であるか？を書いてゐる。それはパウロに云はすなら、愛に對する信仰である。誠の主旨は愛である。

命令の目的は、淸き心と善き良心と僞りなき信仰とより出づる愛にあり。（テモテ前書一ノ五）

その愛がどういふものであるかに就ては、終に說明してゐる。それは神の愛を信ずることである。神は寬容で、我々を今までの極端な墮落から救ふてくれた。云ひ換へれば、神は愛だから我々も神の愛を信じて、暗い過去の生活を棄て、新しい生活に入ることをパウロの體驗から書いてゐる。

祈に就ての訓諭

第二章は祈るべき事を教へてゐる。理屈の信仰に行つたり、系圖ばかり重視する多くの人がゐるが、それはいけない。過去の傳統や理屈を信ずるのでないと云ふことを高調してゐる。第二章一節にパウロは、宗教生活の內容は、神の前に、また社會の組織をしてゐるものゝ爲に、特別に祈るべきを教へてゐる。そして八節にもう一度繰返して、あまり議論したり、人を罵倒したりしないで、祈の氣持でやる方

がいゝぢやないかと云つてゐる。第二章の終には女の事に就て記してあるが、パウロが付け加へたもので、之は四章に關聯するもの、或ひは五章の部分に入るべきものである。

指導者の資格に就ての訓諭

第三章にパウロは、教會の中心人物になるべき指導者の資格を面白く書いてゐる。或ひは監督の立場、執事の立場にあるものゝ模範的生活を送らなければならぬ、と云ふことを細かに書いてゐる。私が面白く思ふことは當時の執事や監督のことである。執事はどういふ地位に居つたかと云ふに、禁酒家で、慈善事業をして、嘘を云はず、恥づべき利をとらず云々とあつて、今日と殆ど變つてゐない。千九百年前の道徳は實に純潔なものであつた。

宗教生活に就ての訓諭

宗教生活を、パウロがどう要求したか。禁慾主義になり、獨身或ひは、斷食すると云ふことのみを宗教と考へ、人生に快樂なんかないと云ふ人がゐるが、それは末世の考である。眞のキリスト教は樂天的なものである。パウロは、獨身主義や斷食や結婚を禁止してゐない。當時のマルシヨンの思想（禁慾を絶對に勸めた一派）に對し、中正の道、穩健な人間らしい宗教をこゝに教へてゐる。

現代の反動時代に於ては、一方で社會主義、共産主義が高調すればする程、一方では禁慾、獨身生活を說いて、それが如何にも偉いやうに考へられてゐる。

これ虛僞をいふ者の僞善に由りてなり。彼らは良心を燒金にて焙かれ、婚姻するを禁じ、食を斷つことを命ず。され

ど食は神の造り給へる物にして、信じ、かつ眞理を知る者の感謝して受くべきものなり。（テモテ前書四ノ二、三）

斯ういふやうに、斷食や獨身主義が宗教の中心思想ではない。より警戒しなければならぬ時は、終末の時代で（時代の衰頽期）その時は惡鬼を信じ、人を惑す靈が流行つて來る。舊約聖書には口よせと云ふのが出てゐる。大本教のやうなものである。西洋ではスピリチユアリズムと云つて、死んだ友人を呼び寄せる等して、それに迷ふ人がある。そしてそれを宗教と考へる人もある。が、それは、心理宗教であつて良心宗教ではない。舊約から新約に發達した豫言の宗教は、良心を高調しないものは神の御旨に叶はないと云ふ。心理宗教は倫理的方面を云はず、過去の人間にあつたことのみを云ふ。その人が飲酒しようが、放蕩しようが何も云はない。日本の祖先崇拜と同じである。日本の祖先崇拜は放蕩してもいいのである。時代が究極になるとさういふ風になる。眞の宗教は求めて受けさへすれば淸いと云ふ。パウロは樂天的にそれを書いてゐる。（テモテ前書四ノ四、五、六）決して肉體がきたないとか云ふやうな事を信じてはいけない。それを迷信で斯う考へる人があるが、キリスト教の信仰では受くるものは、みなよいのである。パウロはユダヤ主義の祭や形式を棄てゝ、信じて祈れば肉體そのものを淨めてくれると云ふ大膽なる福音を說いた。ヨハネ第三書を見ても、肉體が淨められると云ふてゐるが、ノスチツクの如きは、肉體はきよめられないから、知慧によつて淨めると云ふて、本能を汚はしいと云ふ。佛教も肉體を解脫しなければならぬと云ふ。がキリスト教は肉體はきよく、それを制御する精神が尊いのだといふ。肉體の中に神が現れ、神の神性が宿ると云ふのがキリスト教の原理である。

パウロはテモテに、それを間違つて教へてはいけない、肉體そのものは汚れてゐない、祈り感謝して受ければいゝのだと注意してゐる。この點は東洋人が間違へ易い。東洋人は性の問題は惡で、之は禁止しなければならぬと云つて、一種の外道に迷ふが、キリスト教は肉體そのものゝ中に神を發見しようとする。

宗教的社會事業に就ての訓諭

第五章は、いろ〳〵な實際生活に就て教へてゐる。殊に、寡婦に對する態度、年寄を救濟する注意が書いてある。

信者たる女もしその家に寡婦あらば、自ら之を助けて教會を煩はすな。これ眞の寡婦を教會の助けん爲なり。（テモテ前書五ノ一六）

もしも寡婦が困つてゐるなら自ら助けるがいゝ。教會ではよく働く人を助けるので、傳道する人に對しては猶助けなければならぬ。

經濟生活に就ての訓諭

第六章は、宗教と利益とを混同すなと云ふ金持に對する警戒である。

また心腐りて眞理をはなれ、敬虔を利益の道とおもふ者の爭論おこるなり。されど足ることを知りて敬虔を守るものは、大なる利益を得るなり。（テモテ前六ノ五、六）

信心すれば金儲けが出來ると考へてゐるが、怪しからんことだ、衣食あらば足れりとせよ。（テモテ前

書六ノ八）困つた人の爲に分け與へるやうに注意しなければならぬ。九節から終まで、これを通して書いてゐる。そして最後に、富めるものに命令して社會事業をせよと忠告してゐる。

友愛の福音

斯ういふ事を書いてゐる半面に、パウロは自分の愛弟子としてのテモテに對し、親密な注意をしてゐる。第五章二十三節には病身のテモテに少し葡萄酒を飲めと注意してゐる、かと思へば、こんどは年が若いと云ふことで輕蔑せられるな、人の噂をぶち破るやうに努力しなければならぬと教へてゐる。（テモテ前四ノ一二以下）

テモテの父はギリシヤ人で、母はユダヤ人（使徒行傳一六ノ一）でルステラに住んでゐた。母も祖母も信仰厚かつた。（テモテ後一ノ五）祖母ロイス、母ユニケの厚い信仰を承け繼いだテモテが、信仰も厚く、ギリシヤ語も上手だつたので、パウロはテモテを子供のやうに愛して連れ廻つた。そしてテモテは既にいゝ證を方々でした。（テモテ前六ノ一二）さういつたやうに、肉體上にも精神上にも、注意するのみならず非常に愛してゐた事は、第一章の二節を見てもわかる。そしてパウロはほんとの自分の子だと云ふ意味で彼の一番大事な教會の後嗣にした。そして、道德的にも社會的にも、經濟的にも、親切な忠告を與へ、失敗のないやうに、何處何處までも進んでくれと書いてゐる。パウロの居つた場所が思想の中心地でもあり、社會的にも、政治的にも、經濟的にも混亂してゐたから、斯ういふ手紙が書かれたのは當り前だと思ふ。

あやまり易い青年が、一方に於ては知慧に於てのみ進み、一方に於ては國粋的になつてゐるが、問題は愛である。愛なる神が宇宙の根源を現してゐる。不完全な我々の一切をゆるして、愛をパウロが示してくれた事を、我々はもう一度考へ直さなければならぬと思ふ。

この手紙を讀むと、まるで現代の青年に忠告されてゐるやうな氣持がする。我々もこの親切な忠告を受けて、誤ない道を踏まなければならぬ。

パウロは一面から云へば教育家であつた。單に叱り飛ばすのでなく、弟子の手をひいて肉體的方面、心理的方面、或ひは宗教體驗の方面から云つても、いゝ指導を與へた優れた先生であつたと思ふ。この手紙は宗教々育の善き教科書としても、教へ込むのでなく、弟子を愛した氣持を味ひ、斯ういふ風に弟子を愛する人がいゝ教育家だと云ふことを思はせられる。我々はパウロの教へるまゝに誤なく、神の愛の福音、人類の福音、罪人をも愛する福音を信じなければならぬ。

天の父、

この短い手紙を通し、我々に教へられた福音の趣旨を感謝いたします。混亂な思想の中に、あやまり易く、時による新思想に、傳統に執着し易い我々に、この罪人を愛する愛を信じ、肉體の中にも神があらはれる事を、キリストを通して示して下さいましたことを感謝いたします。

パウロが心配した如く、肉體的にも心理的にも純粹なる精神に、神の愛をひしゝと感じて進み得られますやうに祈ります。キリストイエスによつて祈ります。アーメン

テモテ前書梗概
第一章　信仰に就てのパウロの訓諭
第二章　祈に就ての訓諭
第三章　教會組織に就ての訓諭
第四章　宗教生活に就ての訓諭
第五章　宗教的社會事業に就ての訓諭
第六章　經濟生活に就ての訓諭

第十八章　剛健の福音

—テモテ後書の概要—

剛健なるパウロ

テモテ後書はパウロの最後の手紙で、鮮血遺書と言ふべきものである。ごく短い四章しかないけれどパウロが最も愛してゐたテモテが、惡戰苦闘をつゞけてゐる時に、自分の生涯の長からぬを豫想しながら、血を吐く思をもつて弟子を勵ましてゐる悲壯なものである。

元來パウロは剛健であつた。彼は餘りに世界主義者であつて、ロマの皇帝以外に主を崇むる反逆者だと言ふ理由によつて訴へられた。そしてカイザリヤの牢に投ぜられた。調べてみると、單なる宗教的犯罪者であつたので、餘り重大視もされなかつた。けれどパウロは強いて上告し、ロマに於て審判されんことを要求した。シーザーがポンペイをやつつけた時、多分パウロの父は金をもつてシーザーを助けたのであらう。パウロはロマの自由市民權を持つてゐた。市民權を持つものだけが皇帝に裁判される。パウロはこれを利用してロマで皇帝に會ひ、堂々と福音を宣べ傳へたいと思つて、わざわざ上訴したので

ある。牢獄に這入つて傳道しようとした所に彼の剛健さがうかゞはれる。

地中海で難船にあひ、やつとのことでマルタ島に逃れ、ロマに至つてうんと皇帝をやつつけたらしい。ピリピ書第四章二十二節を見ると、カイザルの家の者、即ちロマ皇帝の親類の中によほどキリスト教が這入つてゐたやうな跡がある。色々しらべられた結果、やはり思想犯罪だと言ふので一度は許された。そして多分エペソにゆき、テモテ前書テトス書を書き、それからもう一度捕へられて、ロマに護送されて、投獄されたものらしい。その後死刑になつた。その直前、死を豫想しつゝ書いたのがテモテ後書である。

悲壯なる遺言狀

それ故これは血みどろの氣持で書かれた。武士道でもこれほどに忠勇義烈なのはない。實に雄々しい精神運動の先驅者の態度が深刻に記されてゐる。エペソはその當時非常に文明の進んだ大都會で、パウロも三年間そこに止まつて傳道した程重要なキリスト教の要塞であつた。それでそこの牧師には、自分が指導した最愛の弟子テモテを据えてゐた。パウロはロマの監獄でいよいよ死刑になると定まつたらしい。第四章六節に『我は今、供物として血を灑んとす、わが去るべき時は近づけり。われ善き戰鬪をたたかひ、走るべき道程を果し、信仰を守れり。』と言つてゐる。

パウロは實によく傳道してまわつた。今日の如く交通の便利になつた時代でも、ロマからスエズ迄は五日半かゝる。それを三度もくるくるまわつて、町々に福音を述べ傳へた。『走るべき道程を果し』と

言つたのも無理はない。激しい戰ひの一生であつた。その友人の殆どが逆いた。監獄に這入る迄は「ヤソもいゝなあ」と言つてゐた連中でも、這入ると掌をかへすやうに逆いてしまつた。第四章の十、十四、十五、十六節等を見ると、いかに多くの人がパウロを離れて行つたかゞ記されてゐる。殊に『わが始の辯明の時誰も我を助けず』とあり、被告に不利な證言をしたものと思はれる。その間にありて夢にも忘れられないのはテモテであつた。それで彼は死に直面するとテモテを思ふ心が溢れて來た。そして色々のことを書送つたのである。

二度目に捕へられた時は、トロアスあたりで慌てゝつかまへられたのであるらしい。『汝のきたる時わがトロアスにてカルポの許に遺し置きたる外衣を携へきたれ、また書物、殊に羊皮紙のものを携さへ來たれ』（テモテ後四ノ一三）と言つてゐる。死刑の前にあつても泰然として書物を取寄せて讀み耽つたなどは面白い所である。パウロは實に苦心慘憺して神の國運動に從事した。幾度も牢獄に投ぜられた。けれども恐るゝ必要は少しもない。『されば汝われらの主の證をなす事と主の囚人たる我とを恥とすな、たゞ神の能力に隨ひて福音のために我とともに苦難を忍べ』（テモテ後一ノ八）とさとし、『我はこの福音のために苦難を受けて惡人のごとく繫がるゝに至れり、然れど神の言は繫がれたるにあらず。』（テモテ後二ノ九）とすゝめた。

神の徵兵制度

我々は神により戰のために徵兵にとられたものである。兵隊には規律がちやんとあつて、それに從つ

て努力しなければならない。『汝キリスト・イエスのよき兵卒として我とともに苦難を忍べ、兵卒を務むる者は生活のために纏はるゝ事なし、これ募れる者を喜ばせんと爲ればなり。』(テモテ後二ノ三—四)皆兵隊のつもりで、「前へ！右へ！左へ！止まれ！」と言ふ聲のまゝ、自分のことを少しも思はずやつてゆく、剛健な態度で、勇敢な精神で進まなければならない。そして『若し耐へ忍ばば彼と共に王となるべし』(テモテ後二ノ一二)雄々しく戰へば勇敢なものは王となり得る。かうした男性的な考へ方がキリスト教である。

數年前德富蘇峰先生と遠子の海岸を散歩してゐた時、『武士道が出來たのはキリスト教が吾國に渡來して後だ。太閤記を見ると、賤ケ嶽の戰には馬上に銀貨をのせてゐて、敵の頭と銀貨とを取換にしてゐた。恰度現在の支那の諸將のやうなやり口であつた。所がキリスト教が傳はるや、教のため神のため迫害にも耐え、主義のため死ぬ精神を目の前に示された。そこで日本の武士道が非常に高められたのである』と云つて居られた。

世界で最も猛烈な迫害の一つは日本に於ける、キリシタンバテレンの迫害であつた。三百年の長きに亘り、數萬の人達が殺されてしまつた。隨分むごたらしい徹底した方法で迫害された。それにも拘らずやはりクリスチヤンが殘つて行つた。この雄々しい精神に、佛教の宗教思想と儒教の實踐的な所とが結付いて武士道が生れた。德川氏がキリスト教に反對したのは、大阪城を守つて舊主に忠誠を盡したクリスチヤンが多かつたからだと言はれてゐる。後藤又兵衛にしろ、小西行長にしろ、皆クリスチヤンであ

つた。九州にゆけば中川氏の祖先を祭る社殿に舊教の鐘がのこされてゐる。かゝる迫害にも堂々として耐へ得る精神が武士道を高めたのである。パウロは此精神の權現であつた。殺されると知りつゝも、これ以外の道を進んでゆけなかつた。そしてあくまで義をまげなかつた結果、ジユリアス・シーザー、オーガスタス・シーザー等の權力は亡びたが、針一本を持つて地中海を經巡つたパウロの福音の教は、ネロの迫害にも屈せず、遂に全世界を征服することゝなつた。

最後の言葉

テモテはユダヤ人とギリシヤ人との雜種であつたので、ギリシヤ語が出來たらしい。パウロは眼が惡いのとギリシヤ語が餘り得意でなかつたので、テモテとかテトスとかをいつもつれてゐた。彼の人物のすぐれてゐたことはピリピ書第二章二二、二三節に『テモテの錬達なるは汝らの知る所なり』と記されてゐるのを以て知られる。若かつたが尊敬され、パウロには、自分の子だと呼ばれてゐた。此愛弟子に對して、自分はいづれ死ぬが、死んだら、思想的にも實行的にも色々のことが起つて來るであらうが、眞面目な道を一歩もまげずにやつていつてほしいと言つて、ちいさな問題に至る迄教へてゐる。

パウロはロマに囚れてゐたが、テモテがエペソにゐて懸命に働き、パウロの考を實行してゐた。で、その苦心を察し、共に苦しい立場を語つて慰め會ひたいと言つて、第一章四節に『我なんぢの涙を憶えわが歡喜の滿ちん爲に汝を見んことを欲す。』と記してゐる。第一章第二章を讀んでみると、パウロは前にも述べたやうに隨分苦しい立場に立つてゐた。先づ同志の反逆があつた。復活をする精神運動家があ

つた。新神學の提供者があつて、人間は死んだらそれでしまひだと言ひ張つてゐた。

けれども個人と文明を復活せしめ、再生させる所に使命があつた。死んだロマ文明にカツをいれることをとつてしまへば、パウロの使命はなくなる。テモテにこれを懇々とゆだねてゐる。

現代に於てもキリスト教の使命は、迷ひぬいてゐるものを再生に復活させることに外ならない。進化進化と言ふが、たゞ單純な進化のみでなく、退化してしまつたものをも再び進化せしめることが必要である。癩病にかゝり、梅毒に苦しむ者も救はるゝ道がどれだけ必要か解らない。パウロは狂へる如く此再生を說くために地中海をまわり歩いた。日本もやはりさうだ。各方面に行語つてゐる。再生しなければどうする譯にもゆかない。これが神の方面より見れば救である。そしてこれを信ずるのが信仰である。溫い神の愛により、退化したものをも復活せしめ給ふのを信ずるのが信仰である。それが十字架を通して明かに示されてゐる。この福音を雄々しき精神をもつて最後まで宣べ傳へ、且つ實現してゆかなければならない。

父なる神樣

あなたの家庭のもの一人一人に色々な行詰りがありましても、どうか再生せしめて下さい。腐つた肉體と精神と世界とを見捨てず、親しき光明へ導き給ふことを感謝致します。どうぞいつも忍耐をもつてその信仰に燃え、淋しい時も悲しい時も忍んでゆかせて下さい。物質的に惠まれてゐる所にも、キリストの精神が結付けられるやうに祈り奉ります。主に在る兄弟姉妹が、パウロの如くあくまで雄々しく、最後に至る迄忠誠を盡されるよう、主イエス・キリストの御名によりて祈ります。アーメン

テモテ後書梗概

第一章 一、テモテに會ひたい希望を述べ（一—五）二、テモテに信賴することを述べ（同）、三、勇敢ならんことを勸め（六—十二）四、眞理に忠實ならんことの教へ（十三—十八）

第二章 一、剛直なるべきこと。二、眞理を保持すること。三、精兵たるべきこと。四、福音の基づくところを保つこと。五、僞教訓を捨てること。六、靈的生活に忠なること

第三章 一、惡しき日の來ることにつき。二、パウロの苦しき日の經驗

第四章 一、傳道に熱心なるべきこと（一—五）二、死を前にしてのパウロの喜び（六—八）三、個人的注意（九—二二）

第十九章 贖罪愛の福音

—ヘブル書の概要—

ヘブル書の使命

現代人は罪を犯しても自分の罪を感じなくて、境遇が惡いとか、誘惑に負けたとか考へるから、贖罪愛の深い意味がわからない。贖罪とは『人のために尻拭ひをする』と云ふことである。キリストが贖罪の死を遂げたと云ふのは、キリストが、人類の缺點は自分にも責任があるから、その尻拭をすると云ふ意識で死なれたと云ふことである。之は尊い約束である。之は新しい。それで「新約」と云ふ言葉が現れた。新約聖書の中にも解り易い福音書のやうなものがあるが、ロマ書やヘブル書の如きは、餘程進んだ考を持つたものでなければ判らない。それは豫言に關係してゐるからである。

宗教は初めはぼんやりして、人間の良心生活が淺い處にあつたのであるが、だん〳〵はつきり進んで來て、ロマ書やヘブル書にしても宗教の進歩を基礎に置いてキリストを觀測してゐる。ヘブル書は、

第一章、贖罪と預言の完成、第二章、贖罪と受肉者、第三章、贖罪者イエスと忠節、第四章、贖罪と安息、第五章、贖罪と人間イエス、第六章、贖罪の表象とその本質、第七章、贖罪とメルキゼデクの祭司、第八章、贖罪と新しき契約、第九章、贖罪と幕屋と血、第十章、贖罪と供物、第十一章、贖罪と信仰、第十二章、贖罪と試練、第十三章、贖罪と新道徳に分れてゐて、新約聖書の中で最もキリストの贖罪愛を深く取扱つた不思議な書である。

罪惡意識と贖罪愛の進化

この書は誰が書いたか？と云ふに、或人は第十三章の終にテモテの事を書いてゐる爲に、パウロだと云ふ。で多分紀元一世紀の半頃書かれたにしても、パウロの親しい友が書いたか、或ひはパウロの思想とほんとによく似た處があるのを見ると、パウロが書いたのかも知れない。

何故書かれたかと云ふと、恐らくはキリストを知りながら、もう一度ユダヤ式の信仰に歸つて行かうと云ふ連中がゐた。折角キリストが愛の宗教を示してくれたのに、殆ど中世紀に於る偶像と同じやうに、ほんとにキリストが來たやうな氣がしないから、神殿を建てゝ禮拜をしたいと云ふ迷信がかつた考を持つてゐた人があつた。それに對し、舊約に教へてゐる祭司とか神殿や供物とか云ふものは宗教が進歩する階段にある證據で、人間の良心を滿足させるものでない、とヘブル書は説明してゐる。即ち、宗教の幼稚な時には、祭司とか、神を拜む特別な禮拜所とか、供物とか禮典と云ふものが一々必要であつたが、眞の禮典は良心の方にあるので、だん〳〵人間の宗教生活が進み、豫言が成就する時になると祭

司は良心生活を完成した人、即ちキリストのやうな完全な人でなければならぬ。禮拜所は地上の禮拜所でなく、天でなければならぬ。供物は、牛や羊の血を捧げるのでなく、人間の生き血をもつて、神の前に證明せられなければならぬ、その禮典と云ふのは、我々の信仰生活そのもので、我々はその外に何も必要ないと云ふことを説明してゐる。

その事の解らぬ人には、このヘブル書は解らない面白くないものである。が、我々が古い時代に神主とか、祭、牛や羊の捧物をする事がどうしてあつたかと云ふに、それは、人間の良心の中に何か咎めるものがある、その咎めるものと云ふのは、罪の問題である。罪が人間の心を咎めるのであるが、野蠻だつたから何の爲に起つてゐたのか判らなかつた。たゞあやまらなければならぬ事だけは判つてゐた。この良心宗教が進んで、キリスト・イエスのやうな完成した人格の形になつたのである。ギリシヤ人は最初、贖罪宗教を信じなかつた。そして火や水を拜んでゐた時から、デオニソスの信仰に移り、それからキリストでなければならなくなつた。ユダヤ人は最初から罪につき敏感であつたから、神に向はねばならぬと云ふ信仰を持つてゐた。それが、儀式とか供物、禮拜所となつて現れてゐたのであるが、ヘブル書の著者は、キリストとして現れねばならぬ事を説明した。（ヘブル九ノ一—五）ユダヤ人が持つてゐた禮拜所と云ふのは幕屋であつたが、その幕屋をイエスだと云はんとしてゐる。

宗教的表象の進歩

幕屋には、燈臺と机と、供のパンがあつた。その中の至聖所には、金の香壇と、金の契約の櫃と壺と、アロンの杖と契約の石碑とあり、幕屋の外には燔祭の壇と、手を洗ふ洗盤があつた　斯ういふ形式は何の爲に必要であるかをヘブル書は順序立てゝ説明してゐる。血を流したと云ふ事は預言の發達の結果である。ずつと進んだ時代でなければ、良心宗教を完成すると云ふことは判らない。だから預言を理解出來ない人には、良心宗教の最後はわからない。

第二章はキリストが肉で現れたといふことを特に注意してゐる。なぜキリストのやうな人物が弱い肉體で現れたか、超人らしい形で現れなくて、人間として現れたか？　弱い人間キリストは羊のやうなもので、弱い人間で來た事が、我々を救はんとする効用を持つてゐた。

たゞ御使よりも少しく卑くせられしイエスの、死の苦難を受くるによりて榮光と尊貴とを冠らせられ給へるを見る。これ神の恩惠によりて萬民のために死を味ひ給はんとてなり（ヘブル二ノ九―一六）

自分が誘惑を受ける人間に造られたのは、誘惑に勝ち得る人間を創らんためだとして、救と肉體を受けてゐるものゝ關係を述べてゐる。我々から見るなら、宗教生活を送るのは完全無缺な高潔な人でなければならぬと考へるが、却つて弱い者の中に、神の恩寵が現れてゐる。

第三章はモーセが神に忠義を盡したと同樣に、キリストの十字架に對する態度をはつきりさせてゐる。そのキリストの忠節を我々が受け繼ぎ、我々もまた信仰をもつて、終まで完ふしなければならぬと云つてゐる。

第四章は第三章の續きで、ユダヤ民族が、奴隷から解放された時、終まで忍んだ者が安息に入つたのだと敎へてゐる。

そして第五章には、弱い人間イエスと贖罪との關係を書いてゐる。

キリストは肉體にて在しゝ時、大なる叫と淚とをもて己を死より救ひ得る者に祈と願とを獻げ、その恭敬によりて聽かれ給へり。（ヘブル五ノ七）

卽ち、キリストは泣いた、訴へた、弱かつた。が、泣いて訴へ、死ぬやうな身體を助けてくれと云ふ處に、キリストの眞面目さが現れてゐて、そこに恭々しい處があり、それが救になつたのである。

贖罪愛の形式とキリストの信仰

ところが、第六章には、舊約時代の贖罪の形と、ほんとの贖罪の意味との比較をして、表象にだけ迷はないで、根本の贖罪を考へなければならぬことを說いてゐる。十字架だけで我々の罪惡が救はれるなんて馬鹿な事はない、お燈明をあげたり、お宮參りをする儀式の方が宗敎らしいと思つて、眞の良心宗敎に進み得ないものが多い。折角宗敎の最後の階段に於て眞の宗敎を敎へられたのに、もう一度形式宗敎に歸るのは詰らぬが、それが人間の缺點である。寺や神殿の前に行つて坐ると、宗敎的氣持になると云ふが、それではいけない、我々の眞の贖罪は、キリストが眞劍になつて血を流してくれた處にあるから、それ以上を我々が要求してはならぬ、と云つてゐる。宗敎的儀式の奥にある意味を分析してゐるのがあとの部分である。

贖罪とメルキゼデクの祭司

舊約聖書創世記には、アブラハムが甥のロトを救はんとする爲、敵を追驅けて行つてロトを連れて歸つた。その時、その勝利を感謝する爲、メルキゼデクと云ふ（メルキと云ふことは王、ゼデクは正義の意）サレムの祭司の長に會ひ、分捕物の十分の一を捧げたことが書かれてゐる。

これは突然書いてあるが、古い儀式を喧しく云ふ人には、キリストでは不滿足である。キリストはユダ族で、神主の系統をひいてゐない。祭司は必ず、レビ族でアロンの分れでなければならなかつた。それが儀式禮典を重んずる人には賴りない。我々が矢張り、北朝とか南朝とか云つて議論するのと同じである。キリストはレビ族でないから云々と云ふ者に對し、アブラハムでさへ、自分に關係のないメルキゼデクに捧げ物をしてゐるではないか。良心宗教には系圖は要らない、と主張したのであつた。

新しき契約と血

第八章では、古い約束と新しい約束とを區別してゐる。古いユダヤの約束では、入口の扉に羊の血を塗つたが、新しい約束では、羊の血で滿足出來ない。（ヘブル八ノ七—九）キリストのやうな人間の血を流し、眞劍にやることを要求したのである。

では幕屋があることは何の意味か、血はどういふ譯か、と云ふことは第九章で說明してゐる。古い時代には神に近づくことを地上に現し、一年に一遍至聖所に入る。それには祭司が自分の體を淨め、羊に贖つて貰つて入つて行く。が、ほんとの拜む處は天だから、自分が完全無缺でなければならぬ。這入つ

たら這入つたきりの一生一遍しか這入れない、もうその人一人が這入ればいゝと云ふ事、卽ちキリストが羊の血でなく人間の血をもつて這入つたと云ふことを、第九章十一—二十三節に眞劍に書いてゐる。

鬼に角古い時代から血を要求した宗教があつたのである。

何故血を要求したか？　我々は死に値する罪を犯した、だから「神樣、まことに濟みません、この羊の血で我々の罪を赦して下さい」と赦罪した、もしも羊の血で、神が人間を赦されたのなら、進んだ時代に於て、人間の流す血で赦されないことはないと云ふ。この點が現代人と昔の人の信仰の違ふ處である。昔の人に比べて、現代はだん〳〵敏感になつて來たと共に、こんな馬鹿な事があるかと思つてゐるが、殺人がある毎に、贖罪の必要を感じて來た。我々は人を殺さないから、或ひは電氣文明に住んでゐるから贖罪は要らぬと考へるが、我々が無智で感じてゐないからそんな事を云ふので、斯ういふ經驗が殘つたのは、深い憧憬と體驗から生み出されたと云つてよい。

我々には成長の順序がある。我々がそれ程感じない事でも、實際どん底にゐる人に贖罪は信ぜられる。どうしたら救はれるかと眞劍に思つてゐるからである。さういふ時にキリストの血を信じなければ滿足しない。一旦失敗しても立上りたい、再生したい人には、この贖罪宗教の外に道がない。人の前ではづかしいと云ふやうな人が、過去一切を許して貰つたと云ふ感じを持つのは、贖罪宗教より外にない。

魂の供物と信仰の試練

第十章は供物に就て說明してゐる。他の物を捧げるのでなく、身自らを獻げたと云ふ事が書かれて

ゐる。

この御意に適ひてイエスキリストの體の一たび獻げられしに由りて我らは潔められたり。（ヘブル一〇ノ一〇）

然れど我らは退きて滅亡に至る者にあらず、靈魂を得るに至る信仰を保つ者なり。（ヘブル一〇ノ三九）

古い時の宗教的經驗なら、年に一遍づゝ捧物を供へて、罪を贖はなければならなかつたのであるが、キリストが献げられた以上、年に一遍づゝしなくてもよくなつた。それでは何だか頼りないと云ふ人があるが、見ずして信ずればいゝ。それは歴史上の信仰の發展が、さう教へてゐる。（ヘブル書第一一章）

第十二章には我々には試練があるが、神は決して我々にうち勝ち得ない試練に遭はせ給はない、試練に必ず勝たして下さるのみならず、我々が試練に勝てないことは絶對にない。恩惠により我々が前とは違つた人間になれるのだから、試練に耐えなければならぬ。

そしてさういふ贖罪的信仰に入つたものは新しい道徳に入らなければならぬと云ふのが第十三章である。第十三章一節には、愛の生活、その他日常生活に於るキリスト的生活を高調してゐる。それには贖罪的信仰が基礎になる。キリストも門の外で棄てられたと書いてゐる。今日エルサレムへ行くと、ケドロンのほとりに羊の血を棄てたと云ふ處がある。キリストもゴルゴタの城門外に棄てられた。旅人に對する懇なる應待にしても、凡ゆる方面に於て純潔なる生活を完成しなければならぬと教へてゐる。

新道徳と贖罪愛の社會

ヘブル書の著者が言はんとしてゐるのは、人間の良心の奥底に、あるものが隠れてゐたのが、神の前に濟まないと思つて、いろんな表象儀式により、まじなひ的にやつてゐたが、しまひには良心宗教の形のキリストによらねばならなくなつた。その新約が良心宗教の完成の意味だと云ふことである。ヘブル書の著者の考では、幼稚な宗教は儀式や禮典によつてゐたが、進んだ時代の眞の宗教は、キリストの十字架によれる贖罪愛の宗教だと云ふ。私は、その舊約と新約の繋ぎを叮嚀に教へてくれた事を面白く思ふ。もう少し突きつめて云ふと、そこに意味がある。我々が社會生活を送る場合、人の責任を迄補はなければならない。社會が罪惡に染んでゐても、自分がその罪惡まで引受けて行くと云ふのが贖罪愛である。連帶責任を考へないやうな人は、社會に居る必要はない。人が知らぬ顔しても、自分は人の尻拭ひをすると云ふのでなければ、連帶責任を持つて生きて行く事は出來ない。それが贖罪である。

この贖罪愛の意識が完全に發達した時代でなければ良き社會は出來ない。人の缺點は厭だ、自分だけがいゝ社會を持ちたいと云ふやうに、現代文明の社會は、非常に我儘な傾向を持つてゐるが、キリストの社會はいゝ方にも惡い方面にも這入り込んで、責任を持つのでなければならぬ。

私はこの意味に於て、ヘブル書の解釋は、尊い神秘的なもので、良心宗教の深い處に觸れてゐると思ふ。斯う云ふ風にヘブル書の著者が一生懸命になつたと共に、現代に於ても贖罪を否定する人があるが、我々が社會運動をするにしても、善き羊飼は羊の爲に生命を棄つと云ふ氣持でゐなければならぬ。多くの社會運動家は、煽動はするが、ぢた〳〵が起ると、責任を持たずに逃げてしまふ。が、キリストは人

の尻拭ひまで教へてゐられる。これは萬代不易のキリスト教の原理である。私はこの意味に於て良心生活から云つても、贖罪宗教は眞理であると思ふ。

天の父

我々は冥心の鈍いもので、ともすれば、キリストが十字架につき給ふた眞劍なる血に就き疑をはさみます。そしてその尊き事業に對し、全く見過しにし易うございます。けれどキリストが十字架にかゝり給ふたことを眞面目に考へて、我々にもその幾分を擔はせて下さい。今絞首臺に上らんとしてゐる人の責任をも持ち、我々の利己的な考を捨て、社會の罪は我々の罪の延長されたものであると云ふ氣持を持たしめて下さい。我々もまた人の罪惡の責任を持ち、この恐ろしい時代に、我々が罪惡の責任を負はなければならぬことを思ひ、キリストの贖罪が如何に眞劍であつたかを思はしめて下さい。人の血を我々の血潮に關聯させ、十字架の生活を送り得ますやう、主キリストによつて祈ります。

ヘブル書梗概

第一章　贖罪と預言の成就
第二章　贖罪と受肉者
第三章　贖罪者イエスと忠節
第四章　贖罪と安息
第五章　贖罪と人間イエス
第六章　贖罪の表象とその本質
第七章　贖罪とメルキゼデクの祭司
第八章　贖罪と新しき契約
第九章　贖罪と幕屋と血
第十章　贖罪と供物
第十一章　贖罪と信仰
第十二章　贖罪と試練
第十三章　贖罪と新道德

第二十章　無產者の福音—ヤコブ書の概要—

貧民を愛し給ふ神

聖書の中には非常に貧民に同情した文句が多い。聖書を讀んだ人が、いつもその時代の富豪に反對し、所謂社會平等の運動に走つた事は、歷史的に有名である。殊にヤコブ書の如きは、今日マルクスの經濟學說として有名な、搾取價値或ひは資本家の富の集積に對して、科學的ではないけれど、最も勇敢にその非を敎へてゐる。

第五章一節から六節には、富に對して非常な嫌厭たゞならざる告白をしてゐる。斯ういふ富豪階級が勞働賃銀を充分拂はず貯めた金も、案外賴りにならないが、之が權力と喰付くと大變なものになる。その最も厭な事は、金持が政府と結托し、貧民や無產者を裁判所に引張ることである。

然るに汝らは貧しき者を輕んじたり、汝らを虐げ、また裁判所にひくものは富める者にあらずや、彼らは汝らの上に稱へらるゝ尊き名を汚すものに非ずや。（ヤコブ二ノ六、七）

之は實に激しい言葉である。之を第三人稱に書かず、「汝ら」と云つてゐる。「君らは間違つてゐる、君らが貧しきものを裁判所に曳いて行くのだ」と激越な調子で書いてゐる。それを更に第二章の一節から五節に繰返してゐる。財の多い尠いで人間の値打があるのでなく、魂の問題である。ヤコブは、眞に神の國を築く者はプロ階級で、富豪ではないと云つてゐる。金持が金の指輪をはめ、いゝ着物を着て來

れば、上席に坐らせ、法被着てゐる人に對しては此處に立つて居れと云ふやうな遍頗なものがキリストの敎でない。眞に偉大なる人物は、寡婦、孤兒を世話する人である。で、金持だと思ふ人間は之が無くなることを喜び、低い者は高められる事を喜びとせよと云つてゐる。そして彼は、さういふ半面に無產階級の幸福を說き、眞の社會の解放は物質によらず、精神による。戰爭內亂が凡て物的强慾から生じる事を明かにして、それを誡めてゐる。この點は貧民に對する同情者であるが、カール・マルクスとは違つてゐる。マルクスは凡てを境遇の責任であるとし、一から十まで唯物的境遇として、その反對に人間の內部的な精神の勝利に就ては認めてゐない。

若しも境遇が我々を支配するなら、私は疾つくの昔に耶蘇敎をやめてゐる。私は境遇から云へば一番惡い貧民窟にゐた。その中で通して來たのは、精神力がさうさせたのである。この精神力を省いてしまへば妙なものになつてしまふ。この點をヤコブが注意してゐる。

同じ貧民であり、無產者の解放を云つてゐるのであるが、その根本に於ては精神の違ひがある。ヤコブも、マルクスの價値說に似たものを認めてゐるが、マルクスの價値說は貪慾から出發してゐる。が、ヤコブはその貪慾をとり去らなければならぬ事を敎へてゐる。(ヤコブ四ノ一—三)

小慾と大慾

鬪爭はヤコブによるなら貪慾から起る。そしてこの貪慾はヤコブに云はすなら小慾である。貪慾は鬪爭の起原である。之が人の貨銀まで絞りとる。一方に於ては、金持が絞り取らうとする同じ氣持で油を

賣らうとするものがある。マルクスに云はすなら搾取價値は唯物的であるが、ヤコブは心の問題としてゐる。この貪慾は大慾でなく小慾である。個人的貪慾で大衆の慾望でない。もう少し大きな慾望をすれば、世の中は搾取しない。第四章二節には「もう少し慾を出さんかい、慾を出さないから、その慾望が滿足されないのだ。世界大衆の大きなことを要求しないからだ。汝らの慾は個人的の小慾から滿されないのだ」とヤコブは云ふ。之がヤコブの慾望論である。

ヤコブ書と山上の垂訓の類似

ヤコブはイエスキリストの兄弟で、彼が書いた手紙がヤコブ書である。この中には山上の垂訓と同じ事を書いてゐる。

ヤコブ書第四章九節、之れはマタイ傳第五章の初め、心の貧しきもの云々に相當し、ルカ傳で見ると一層其類似點がはつきりして居る。マタイ傳第五章の『律法の一點一畫も廢ることなく、悉く全うせらるべし』といふ完成の問題は、ヤコブ書第二章十節にある。

それからあとは細目になつて居るが、殺すな(ヤコブ四ノ一—二節)僞るな……二枚舌を使ふな、(ヤコブ三章全部)ヤコブ書の暴行に就いての論は——山上の垂訓の殺すなの問題と殆んど違つてゐない。(ヤコブ四章)山上の垂訓の偏頗に就ての考察はヤコブ書では第二章にある。

マタイ傳第六章の施に就いては、ヤコブ書第二章及び第五章の初めにあり、山上の垂訓の第六章に出てゐる祈は、ヤコブ書第五章終令部(十三節以下)がさうである。山上の垂訓の財產論はヤコブ書第五章の初にあり、生活苦、苦勞の問題はヤコブ書第四章十二節以下にある。マタイ傳第七章の批評に就て

はヤコブ書第四章十一節に、要求に就てはヤコブ書第四章三節と第一章五節の二箇處に、果と樹に就てはヤコブ書第三章十二節とマタイ傳第七章にある。行ふと行はざるとに就ては、ヤコブ書第二章十四節また其他に屢々繰返して居る。

山上の垂訓とヤコブ書との對照

マタイ傳	ヤコブ書對照
五章 道德標準の顚倒	……ヤコブ四章九節
完成の問題	……ヤコブ二章十節
完成せらるべき律法	
殺	……ヤコブ四章一―二節
姦淫	
僞誓	……ヤコブ三章全部
六章 暴行	殺に同じヤコブ四章
施	……ヤコブ二章、五章の初
所斷食	……ヤコブ五章十三節以下
財產	……ヤコブ五章の初
生活不安	
苦勞	……ヤコブ四章十三節以下
七章 批評	……ヤコブ四章十一節
要求	……（ヤコブ四章三節 同一章五節）
果と樹	……ヤコブ三章十二節
行、非行	……二章十四節

ヤコブ書	
一章 誘惑の問題	
實行論	
二章 偏頗論	
實行論	
三章 舌論	
四章 爭	
姦淫	
二心	
價値の轉換	
批評	
生活論	
五章 勞苦	
富	
忍	
祈	
耐	

ヤコブの完全

かういふ風にヤコブ書全體は、山上の垂訓を完全に繰返す間に――極く僅か、例へば斷食の問題だけをはつきり書いて居ないが――ヤコブは殆んど山上の垂訓をもう一度自分のものにして、やり直しをしてゐるものと見て差支ないのである。從つてヤコブ書の精神を話さうとすれば、山上の垂訓に就て話さなければならない。そこに現れたイエスの精神は實に「汝ら天の父の完きが如く全かれ！」といふ完全說そのものであつて、眞に絕對的理想を持つ大きな道德的運動である。

二千年前によくも大膽にこんな事が云へたものだと思へる。今日金持の敎會の牧師がこの通りの事を云ふとすぐ首になる。マルチン・ルーテルでさへヤコブ書を詰らないと云つて、あの偉大な宗敎家でもヤコブ書を讀まなかつた。ヤコブ書を眞正直に讀む人は、貧民階級に對し事業をしてゐる者で、この通りをすれば、マルクス以上の解放はいつでも起つてゐる。

辛抱の福音

然し、この書は單に經濟問題だけを云つてゐない。苦しみある時に辛抱しろと敎へてゐて、これこそヤコブ書の根本精神である。ヤコブ書は第一章の初めから、辛い目に遭つても辛抱せよと云つてゐる。我々に辛抱出來ないやうな處にも、ヤコブは無產階級として壓迫せられ、迫害せられても、最後の斷末魔にも辛抱せよといふことを五章に來てもう一度云つてゐる（ヤコブ五ノ七―一一）我々にいろんな災厄があるが、やりきれないと思ふ時に辛抱せよと云つて、これがイエスを信ずる者と信じないものとの差である。冬が早く終つて夏が來ればいゝと思ふが、待たないと夏は來ない。時が經たないと勉强が出來な

い。時間的過程を置かないと工事が出來ない。一つの事を成し遂げるには、順序があつて暇がかゝるけれど信用が出來る迄辛抱する必要がある。社會的過程に於てもさうである。そこに革命論者と漸進論者の差がある。或人は暴力で早いことやつてしまはうとする。メキシコでは最近革命を十九年間に十九回やつてゐる。革命をやつても必ずしもいゝ社會は來ない。植物の枝はいゝ加減に出てゐるものだと思ふが、これにはちやんと順序がある。これを開序といふが、凡ての植物の枝に秩序のないものはない。ちやんと組織がある。社會が進歩するにもこの開序を持つてせねばならぬ。それをヤコブは辛抱せよと云つてゐるのである。秀吉は草履取りの時に天下取りになりたいと思つて織田信長を殺してゐたら、彼は天下をとれなかつたであらう。

ヤコブの批評論

これ迄は時間的の問題を考へて來たのであるが、これに横の問題がある。友人に對し、批評する時も無茶な批評はしない。(ヤコブ三ノ一—四)第二章はヤコブの舌論である。唯物的辯證法によつて云々とやかましく云ふが、批評をしないでもいゝと云ふ。

紀元一世紀頃雄辯學が流行つた。で、みんなが勉強したのは雄辯學や、うつくしい言葉である。それに對してヤコブの教へたのは、さういふ雄辯學だけではいけないといふことである。この當時、雄辯學から言葉に對する學問が發達してゐた。ソフィストなどは白いものを黑と云ひ、黑のものを白と云つて、何が何やらわからない。そこでヤコブは、そんなものをあてにするな。二枚舌を使つてはいけない。心の中に統一をはかつて、淸い心でゐなければならぬと教へてゐる。それが第三章全體の記す處で、その

他姦淫につき祈に就て教へてゐる。

ヤコブの云ふ眞の無產者の解放は、やはり德を以て根本にしなければならぬ。單にぶち壞すのでなく、神の力が我々に這入り、人の德をたて、責任を引受けるといふ積極的な氣持になり、口先ばかりでなく、それを實行して行かうといふ實現派である。實現して行く處に、眞の無產階級の解放をしてゐるのである。

第二章十五—十七節、ある人が失業して來る。「同情しますよ、しかし金を上げない」と云ふのでは駄目だ。同情しますといふ前に十錢か十五錢渡したらいゝ、之が信仰の實現であることを說いてゐる。キリスト教でいふ神の愛は、藤森成吉氏の云ふ「何が彼女をさうさせたか?」の神の愛でない。神に愛がないのでなく、人間に愛がないのである。

神の愛は我々の氣付かぬ處にある。我々の身體が痛いといふ事に出會しても、アドリナリンといふ藥が出て來て苦痛を少くしてくれる。戰爭して男が死ぬと、それから後は男の方が多く生れる。平素なら男と女は半々に生れてゐる。誰がそんなに上手に生むのか、宇宙がこんなに不思議にうまく行つてゐるのに氣付かない人が、神の愛は嘘だと云ふのだ。自分の戀人ばかり愛するのでなく、より困つた人達を救ふて居れば愛が判つて來る。人間の愛は貰ふ愛ばかりである。それが貪慾である。我々は永久にプロレタリアだ、人が惠んでくれないから宇宙には愛がない」と云ふが、人に與へることが愛である。世の中が全部惡であつても、自分一人の魂の中に微かながら灯が殘つてゐるなら、世界に灯があるので、世界に愛がなくなつても、自分の魂の中に愛があるなら世の中に愛がある。みんながお互ひに愛を持た

うとするなら世の中はつめたくなくなる。

神の愛は隱れてゐる。自分の魂の中に愛が目醒め來ると、人の愛がわかつて來る。「神は愛なればなり」である。少しでも人を愛さうとする氣なら人の愛がわかつて來る。だから人に愛せられることばかりを考へてはならない。自分が困つてゐても、自分より困つた人、貧しい人に、自分から愛を施すなら、愛がわかつて來る。すると宇宙の神が愛だと判つて來る。マルクスはその愛を云はなくて、外側の幸福ばかりを云つてゐる。この點を間違へないなら、神の愛は內側から燃え上る。それが神の愛の力である。

ヤコブはこの神を說いて、實現の愛を敎へてゐるのである。

父なる神

時代の風潮は惡く、少し平和が續く爲に淫亂なる空氣が此處かしこに起り、內側の心は恥かしい狀態にあつて、きよいキリストの精神を根本にせず、凡ての罪惡た境遇の責任とのみ考へてゐます時に、我々の間違を敎へ、內側からの愛の力を與へて下さい。そして日本を神の國とする爲に我々を新しき社會改造運動の先驅者とならしめて下さい。

イエスの御名によつて祈ります。アーメン

ヤコブ書梗概

第一章　一—十八節誘惑の問題、十九—二十七節實行論

第二章　一—十三節偏頗論、十四—二十六節實行論

第三章　舌論

第四章　一—二節爭、三—五節姦淫、六—八節二心、十一—十二節批評の問題、十三—十四節生活論、十五—十七節勞苦に關する考

第五章　一—六節富、七—十一節忍耐、十二節誓、十三—十八節最後の祈、十九節迷より引返し

第二十一章　試練の福音

—ペテロ前書の概要—

逆境を押し切るもの

新約聖書は終になる程暗くなつてゐる。キリストが殺されて約三十年位經つて、ローマの迫害があつたので、それ迄の手紙は血なまぐさい暗いものばかりである。その中にペテロ前書が含まつてゐる。ペテロ前書はその書き出しから血生臭いキリストが書き出されてゐる。(ペテロ前書一ノ二)普通の人が血みどろのものを見ると吃驚するが、多くの人が迫害のために殺されてゐた時であつたので血みどろになつてゐた狀態から見ると、之は少しも不思議でなかつた。勞働運動をする人が血みどろになつて戰つてゐるのを見ると、昔のキリスト敎信者が迫害に遭つた處を想像出來る。今のキリスト敎は時代に對し妥協的である。もう少し挑戰的になると、水雷艇が走れば走る程波が立つやうに、我々が走れば走る程向ふ風が吹く。これをしなければ時代を押し切ることが出來ない。我々がペテロ前書を讀む度に、人に苦しめられ、苛められる時の考へ方を敎へられる。

ペテロ前書はペテロの書いたものに違ひない。ペテロは早くから召されてキリストの弟子になつたが、屢々信仰をおとし、またすぐに信仰を回復した。で、自分の體驗から迫害が非常な試練の道具になることを學んだのである。だから之は體驗から書かれた手紙である。送つた地方は小亞細亞の最も迫害の激しかつた黑海に面したポント、ガラテヤ、カパドキヤ、アジア、ビテニヤ(ペテロ前一ノ一)地方のキリスト信者に宛てたものである。その地方に迫害のあつたことは、この時の著作家プリニーが書いてゐる。

で恐らくはペテロ前書の内容は歴史的にも確證される。兎に角暗い時に書かれた手紙であるから、明るい氣持で讀んでは判らない。この書を讀むと、宗教的に政治的に、また倫理的に迫害されてゐる者が、どんな風に迫害を考へて行けばよいかゞ判る。

宗教はやゝもすれば功利的になる。福が貰へるやうに、家内安全我身息災、金を儲けて壽命が長く、商賣が繁昌するやうにと云ふ自己中心の利得を偏重したものになり易い。それに反し、キリストの宗教は苦難の宗教で組織されてゐる。即ち十字架愛がその本質である。で、ペテロはこの十字架を迫害時代に考へ直さなければならないと云ふ事を高調してゐるのである。全體を通してペテロの云ふことは一貫して、迫害を受けることがキリスト教であると云つてゐる。が、さうとは知りつゝ信じたものゝ、キリストが十字架にかゝつて死んだのは、我々の幸福のためだと考へ易い。が、我々は地上の幸福のために信ずるのでなく、永久の神の國の爲であるから、苦難を忍ばなければならぬと云ふ事を考へる。

ペテロ前書はよく讀むとはつきりしてゐる。頭の粗雜なペテロ、キリストが譬を以て話されても判らなかつた無學なペテロが、この手紙を書ける程に進歩したと云ふ事は吃驚することであるけれども、之は少しも不思議ではない、偉大な人物の側に居ると知らない間に偉くなるものである。種播きの話が判らなかつたペテロが、キリストの側に居た爲に進歩した。ペテロは最初の中はキリストに褒められた時、汝はキリスト神の子なりと云つた程の功利的な者であつたのが、終には逆襲付にかゝらうと云ふ迄に進歩したのは、驚くべき事實である。このペテロが、小亞細亞に起つた迫害、無理解な官憲、無理解な周圍、無理解な宗教家のために苦しんだ人々に對し、懇切な手紙を送つたのである。恐らくその時、パウ

ロは、カイザリヤの監獄に入れられてゐたか、ローマに護送されてゐたかしてゐたので、已むを得ずペテロが手紙を書いたのであらう。

それはシルワノがペテロと一緒にゐたことを見ると、（ペテロ前五ノ一二）曾てパウロと一緒に傳道したシルワノが、何かの事情でパウロと別れたことが判る。恐らくパウロが傳道した後に迫害が起り、教會が崩壞しつゝあると云ふので、ペテロが迫害に對する態度を教へたものであらう。

宗教的迫害と試練

第一章はクリステアンとして迫害を受けた時、どう云ふ態度をとるべきかに就て教へてゐる。（ペテロ前一ノ六―一〇）信仰の驗は壞つる金の火にためさるゝよりも貴くして（ペテロ前一ノ七）とあつて、宗教的迫害を受くる事は信仰の試驗である。この試驗を通ると譽と光榮と尊貴とを得る。或人は宗教を信ずるのは修養のため、或ひは成功のため、また友人の關係で便宜的に信じてゐるが、凡ては神のためであるから、少し位惱まうが苦しまうがどうでもいゝ、信仰に屬せざるその場限りのものを吹き分ける爲に迫害が起つたのだとペテロは云ふ。時代が惡い、末世の時の感じがペテロに與へられたことを笑つてはならぬ。日本などでも地震があつたり、大臣が引張られると、末世と思はれる時が隨分ある。ペテロの時は特別にさうであつた。政治的迫害、道德的廢頽がひどかつたので、キリストでも來なければ駄目だと思つた。その時に君等は迫害を受けるのはキリステアンとして當然だ、この末世を過ぎればキリストが必ず來ると云ふ大きな希望が彼等に湧いたのである。

政治的迫害と試練

その迫害が單に宗教的迫害で信徒が村外れにあつたばかりでなしに、彼等は政治的迫害に遭つた。（ペテロ前二ノ一二―二一）この處に突然、王に從へ、政治家、知事に從へと書いてあるのは、その裏面に政治的迫害があつたことを物語つてゐる。檢束があり、無理解な投獄があつた、その時に、クリスチヤンは無理解な官憲に抵抗してはならぬと、それとなく教へてゐる。ある者は反抗しようとするが、キリスト教徒は絶對に反抗してはならぬと云つてゐる。或人はこのペテロの無抵抗主義はキリストと違ふ點だと云ふ。キリストイエスは王に對し反抗の態度を示し、ヘロデが退去命令を出した時に、少くも三日間は動かないと云つて王の命令に對し反抗した。ペテロやパウロは王にまけてゐるからキリストより弱いと云ふ。が、此處に條件が書いてある。

ペテロの見た王は壓制家としてではなく、ある社會的機能を帶びた處の惡い者を罰すると云ふ王を云つてゐる。（ペテロ前二ノ一四）王及び知事は社會的目的及び機能を持つてゐるものだとペテロは考へてゐる。十八節から王とは云はないで主人と云ふてゐるが、君等は情なき者にも從つて反抗すなと教へてゐる。之は反逆の原理を說く唯物的共產主義とキリスト教との違つてゐる處である。キリスト教は反逆を說かず、柔順を說いて世界を征服した。もしも島原の亂のやうに反抗して來たら、キリスト教は紀元一世紀に完全に消えてなくなつてゐたであらう。が、彈力性のある柔和はついに勝つた。キリストの「柔和なるものは幸だ」と云はれたことは、現代キリスト教がその儘證明してゐる。キリスト教信者は三世紀の間官吏にならず、公共事業もせず、默々として柔順に空氣の如く、突き出されゝば突き出され、少しでも隙があれば這入り込んで、とう〳〵歐洲全體に浸入したのである。ペテロの如きが、王に從へ、

情なき暴君の如きものにも屈從して居れと書いた處に、ペテロ前書の意味の深い點がある。だから我々は二章二十三、二十四節の氣持でやらなければならぬ。そして倫理的に勝利を得なければならぬ。その倫理的勝利は必ず復活の約束になる。政治的に敗北して宗教的に勝利を得よと教へてゐるが、之は信仰がなければ得られない。ペテロはその道を擇ばしたのである。

大本教はこの點に於て、竹槍やピストルを傳道に使つたために、その出發點をくぢかれた。我々は何處までも神の愛を實現し、政治的迫害を受けても屈從しなければならぬ。この迫害は絕えるものではない。それを考へたのが第三章である。

倫理的迫害と試練

第三章は皮肉な章である。（ペテロ前書三ノ八―一七）表面は柔和に見える。では何處まで辛抱すればいいか、何處で審判されるかと云ふものに對し、それは神の審判に待てばいゝことを說いてゐる。「それ主の目は義人の上に止まり、その耳は彼らの祈に傾く。されど主のみ顏は惡を行ふ者に向ふ」（ペテロ前書三ノ一二）

君等は無抵抗一義をとれ、手段と目的はいつも一つでなければならぬ。人生に於てはレニンの如く、最高の理想を實現する爲なら、隣人に暴力を用ひてもいゝと云ふ事は成立しない。ピラトがバラバを許さうか、イエスを許さうかと民衆に議つた時に、民衆はバラバを許せと云つた。バラバは革命の爲に暴力を用ひてもいゝと云ふし、民衆も暴力を使つてもいゝと云ふ方だから、キリストは十字架に懸けられたのである。が、革命のために暴力を用ひないキリストの教の方が長く殘り、暴力を用ひた方は消えて

しまつた。キリスト教信者に對するペテロの忠言は、目的の爲には手段を選ばないと云ふやうな事をしない。「たとひ義の爲に苦しめらるゝ事ありとも汝ら幸福なり」（ペテロ前三ノ一三）たゞ心の中にキリストを崇め、いつでも辯明が出來るやうに準備してゐなければいけない、それが倫理的迫害と試練の部分である。

我々はそれに引かゝつて、一遍位やつてやれと云ふ氣持になるが、飽く迄屈從する氣持でやらなければならぬ。それを初代クリスチアンが守つた。守つてゐる中に、暴力主義でやつてゐる人間は次から次に消えて、キリストの愛を實行してゐた者は、ロマの亡びた時も社會的組織を持つてゐた。彼等はキリスト教信者だけだつた。で最初の法王としてレオ一世が立つたのであつた。無抵抗を續けてゐる者は、長くはかゝるが、矢張り勝利であつた。ペテロ前書はそれを正しくて教へた。

迫害の馴致と試練

第四章は全部、苦難と試練ばかりである。

君等の魂をふき分ける爲に來る處の火のやうな試練、苦しみと云ふものを大變なものと思つてはならぬ。反つてそれに馴れて、迫害はあたり前と思ふやうにならなければならぬ。（ペテロ前四ノ一二、一三）私の處にK市から一人の青年が訪ねて來た。人に惡口云はれたから修道院に逃げて行き度いと云ふのであつた。然しそこで考へなくてはならぬ。神はヨブに對して忠告してゐる。軍馬を見たか、軍馬は敵の槍が來ても何處でも構はず突き進む、河馬を見たか、河馬は槍を跳ね飛ばす。それをはね跳ばすやうに、迫害、苦しみが平氣にならなければならぬ。私は永年勞働爭議に馴れてゐるから、「辯士中止」位平

氣である。が、社會的鬪爭に馴れない人は、少しやられるとすぐ逃避的氣持になる。我々は強い意志をもつてやらなければならぬ。

ペテロはそれを教へて、一々キリストに當て篏めてゐる。クリスチヤンとして宗教的迫害を受ける時に、我々は悲觀してはならない。（ペテロ前四ノ一四、一五、一六）

試練の光榮

第五章は、苦難により反つて光榮が來る事を書いてゐる。（ペテロ前五ノ八―一一）試練により強く堅く、全く純金にふきかへられ、神の榮光の基礎になる。だから悲觀してはならぬ、苦しみが光榮の糸口である。

ペテロはこれを繰返す場合に、抽象的には說明してゐない。キリストの例を引いて、キリストが宗教的迫害をうけ、キリストが政治的倫理的の迫害を受け、キリストが試練を通して光榮に會ふたと云ふことを中心におき、慰めた手紙を書いてゐるのである。この手紙は一面から見れば、キリストの模範に倣へと云ふこと、即ちキリストの十字架に倣へと云つて、迫害を受ける事により慰めが深くなる事を教へ、血なまぐさい不安な空氣に包まれてゐる時に、勇敢に強く、クリスチヤンが立たなければならぬことを教へてゐる。弱いクリスチヤンであるならペテロは、こんな強い手紙を書かなかつたかも知れない。

惠みの父

時代は惡く黑潮に漂ふてゐますが、我々は信仰の自由を保證されてゐます。之に反して經濟的解放、政治的解放を叫ぶ人が迫害の中に惱んでゐます。彼等は一生懸命であります。然るに宗教的人物は今は居睡つて居ります。然し、惡

は我々を迫害し、正しき者は、昔も今も變らず、凡ゆる苦しみを受けてゐます。我々に剛膽なる意志を與へ、凡てが十字架に從ひ、迫害を充分荷ひ得るものとして育て上げられるやうに、キリストを植付け給はんことを祈ります。勇敢に我々が立ち、日本の神の國運動と世界平和のために戰はしめて下さい。勞働運動の爲に政治的迫害を受けてゐる者のために、純金のるつぼのあることを教へて下さい。イエスによりて祈ります。アーメン

ペテロ前書梗概
第一章　宗教的迫害と試練
第二章　政治的迫害と試練
第三章　倫理的迫害と試練
第四章　迫害の馴致と試練
第五章　試練の光榮

第二十二章　敬虔の福音

—ペテロ後書の概要—

闇に輝く燈明臺

一般の空氣が宗教に反對し、敬虔が嘲笑せられ、好色が讃美せらるゝ時に、ペテロ後書は書かれた。ペテロ後書は、決死を覺悟したペテロが、殉教の近きを知りつゝ、小亞細亞方面のキリスト教信者に送つたものと見える。この手紙は、內容から云つて、著しくユダ書に類似してゐる。殊に第二章三章の言葉遣ひまでが似てゐるのに驚かされる。卽ち宗教を嘲ける者に對する刑罰を豫言してゐる處、また、好色文化に挑戰してゐる處などは、ユダ書そつくりである。小亞細亞方面の淫蕩なる氣分が、一旦組織された教會の中にまで浸透し、折角、キリストの中に光明を發見した小さき群が、見る〳〵中に崩壞して行くのを見たキリストの高弟ペテロは、恐らく見るに見かねてこの手紙を書いたのであらう。

ユダ書の思想とペテロ後書の思想の類似してゐるのは、ユダとペテロが同一地方に居つた關係上、相似た思想を持つやうになつたと考へられる。殊に、淫亂な空氣に對して反抗しなければならないといふ心持は、ユダもペテロも一致したものと見える。

末世末法時代

キリスト愛を中心とした小さき群が、僅かな年月の中に、地中海の各地に成立し、その教會がまだ塊らない中、滔滔として墮落して行く時代の風潮に、教會は根こそぎ押倒されさうになつたものと見える。その暗い影が、ユダ書にもペテロ後書にも表れてゐる。外には迫害、內には墮落、異端は橫行し、一旦信じたものゝ中にも道德的破壞者が、次から次に出た爲に、新約聖書の終の方を讀むと、一種云はれない淋しさと暗さを感じる。實際、よくまあ、紀元一世紀から現代に至る迄、キリストの宗教が不思議に保存せられたものである。私はペテロ後書を讀んで、舊約聖書の士師記を讀むやうな氣がする。

また、キリストの再來が近い中にあるかと思つてゐた者にとつて、それが十年延び、二十年延び、三十年と延びた結果、多少の失望があつたらしい。それがペテロ後書第三章八節九節に辯解せられてゐる。ペテロをして云はしめるならば、再來が遲れるのは、神が一人の亡ぶるをも喜び給はないのであつて、神に忍耐力がおありになるからだと云ふのである。ペテロはキリストの再來が遲れても、少しもそれを惡くとつてゐない。若しもこの書が書かれる必要があるとするなら、再來が遲れた理由を說明する爲であつたらう。この書はまた他の多くの書簡に比べて珍しい程、敬虔と云ふことを高調してゐる。それは第一章（三、六、七節）にも、第二章（五、六、九節）にも、第三章（七、一一節）にも繰返し繰返し說かれ

てゐる。斯うした敬虔な態度は、全くペテロの特徴であつて、恩寵を說くパウロにも、聖愛を敎へてくれるヨハネにも發見出來ない處である。

ペテロはパウロのやうな宗敎的天才ではない。然ればと云つてヨハネのやうに愛の人でもなかつた。たゞ辛じてキリストによつて、人間の運命が敬虔の道の他ないことを發見したのであつた。

キリストの神たる能力は、生命と敬虔とに係る凡てのものを我らに賜へり。（ペテロ後書一ノ三）

ペテロは、生命宗敎と宗敎的敬虔が、共にキリストによつて啓示せられたことを深く考へた。敬虔は靈魂の藝術である。一種の生命藝術である。ペテロ後書の著者は、生命宗敎と生ける藝術が、共にキリストによつて完成せられたことを述べてゐる。

敬虔の判らない時代が多い。戯曲や音樂や繪畫が理解せられても、魂の藝術としての敬虔が理解せられないことが多い。ある人はそれを面倒臭がり、ある人はそれを無用の長物視する。實際考へやうによれば、人間の顏の中心にある鼻の突出も無用な計劃であり、髮の美しく生えることも無用な事である。けれども、鼻の軟骨がなかつた場合に、人間は何と云ふ醜い動物だらう。髮に就ても同樣のことが云へる。敬虔が人類に對する持分は、顏面に對する隆鼻骨と同じ役目を持つてゐる。鼻は人間の藝術のためである。恐らく人間の存在も神の藝術のためであらう。斯う考へることによつて、私は人間の存在が、神に對する絕對の信賴即ち敬虔の一生であらねばならぬと思ふ。

ペテロは、キリストに對する反逆と、悔改めと、放浪の後に、敬虔と云ふことを學んだ。初代敎會の多くの有志は、社會的効用から發生する各種の宗敎的形式を排擊し、たゞ一つ神への忠節を敬虔と呼んだ。ペテロが、この短い手紙の中に繰返し述べてゐるのは、その苦勞の報告にしか過ぎない。

天への梯子

彼は、神に屬ける者が、精神的に成長せねばならぬことを述べた。

この故に勵み勉めて汝らの信仰に德を加へ、德に知識を、知識に節制を、節制に忍耐を、忍耐に敬虔を、敬虔に兄弟の愛を、兄弟の愛に博愛を加へよ。（ペテロ後書一ノ五、六節）

ペテロは、信仰と敬虔とをやゝ區別してゐる。之で見れば、信仰は神の恩寵に對する信賴であり、敬虔は、信仰生活を人格的にひき直した形を意味してゐるらしい。即ち、神の恩寵に縋つて道德生活を送り、その道德生活の上に理性を發達させ、迷信に走らず、本能に落ちず、熱情的になつても脫線せず、盲目的慾望に對して節制を加へ、時間的には之に忍耐を加へ、信仰を基礎にした知情意の生活は、やがては神への祀とならねばならぬことをペテロは考へた。ペテロはこの神への捧供としての人格生活を敬虔を呼んだのである。然し、人格者が往々個人主義的に流れ、兄弟愛と社會愛を忘れる傾向があるために、その二つを更に附加して、宗敎的敬虔が、唯單に自己滿足に終らないやうに注意した。默示錄は禮拜を中心として書かれ、パウロの書翰などでも、テモテ前後書のやうなパウロの末期の書翰には、敬虔に就ての敎訓が多い。（テモテ前書一ノ九、二ノ二、三ノ一六、四ノ七、八、六ノ三、六ノ五、一一、テモテ後書二ノ一六、三ノ一二）ロマ書などでは不敬虔に對する敎訓はあるけれども、敬虔に對する積極的敎訓はない。之はコリント前後書、ガラテヤ、エペソ、コロサイ書を通じて同樣である。敬虔を標準として、その時代の風潮を判斷した時に、あまりにも表裏のある異敎文明とキリスト文明の差に、ペテロは驚いてしま

つたらしい。彼は今や將に世を去らんとして、不敬虔の異教文化に敬虔の群が吸込まれてしまふことを怖れた。彼は自分の體驗から、キリストによる至高の天啓が、人類を救ふ最後の道であることを再び力説したのであつた。彼は第一章十七、十八節に、キリストの變貌の際、彼が聞いた神秘的な聲を證してゐる。この神秘的な敬虔の上に、彼はキリストの測り知るべからざる體驗を添へんとした。

ペテロは更に一歩進んで、この大きな默示にあつたものが再び墮落することは、許すべからざる罪惡であることを力説し（ペテロ後二ノ二一）更に筆を伸ばして、キリストの再來の日が遲延しても、善惡が明確に審判せられるときの必ずあることを說き、（ペテロ後三ノ一〇—一二）敬虔の道を歩むものが必ず救はれることを教へた。（ペテロ後三ノ一四、一五）

歷史の結論

初代教會の人々は、迫害が加はるにつれ、審判の近きことを祈つた。その祈はキリストの再來の期待となつた。之は社會心理から云つて決して嗤ふべきことでなく、眞面目な人々の間にはいつも斯うした審判の期待が存在する。たとひキリストの再來が遲れたとしても、歷史に結論を與ふべき期待の宗教的なものは、昔からあつた。私は、盜人が夜來る如く來る、と信じた初代教會の再來信仰が　その遲延によつて多少緊張を破つたことは、事實であらうと思ふ。今日でも、時代の進化のみを考へて、嚴肅なる宇宙の審判がないことを思ふならば、それは大きな誤であると私は思ふ。

宇宙は進化する。然し必ず、その進化の中に淘汰もあれば、審判もあり、進化に區劃もあれば、一時期の終末もあると私は考へる。審判は卽ち淘汰である。世の終は一時代の終である。默示錄を見ても

一つの世界の初りは、新しいエルサレムであることが記されてゐる。かういふ意味に於て初代教會の信者が待つてゐた再來が遲れるにしても、眞面目な彼等の審判に對する期待のおくれたことは、審判がないと云ふことの證據にはならない。また審判の日を信ずる必要がないといふことにもならない。我々が最も嚴肅な意味に於て、神が猶、救の計劃を進展せしめ給ふ意味に於て、審判が遲れてゐることに於て、神に感謝しなければならぬ。

私は、最近支那に於て神の審判を待つ人の多いことを聞かされたが、支那のやうに混亂が二十年近くも續くときに、人々が神の審判を待つことは當然であると思ふ。しかし我々はその審判を通しても、神の恩寵の現れてゐることを見なければならぬ。審判は善人のための審判であつて、敬虔なる者にとつて懲怖すべきものでない。惡人にそれが滅亡を意味してゐても、善人にはそれが救を意味してゐる。宇宙進展のために審判卽ち淘汰がなければ、進化はない。私は淘汰を進ずるが故に審判をも信ずる。我々はキリストの再來に對する信仰を恐怖の的にしてはならない。愛につくもの、義に屬くもの、神聖につく者にとつて、キリストの再來は、愛し奉るものに面接する喜の日である。それは結婚式の日であり、歡喜の日である。私は歡喜の日の近づく爲に、その日の一日も早からんことを待つ。

天の父なる御神、

人類の墮落はその時代時代に於て形を變へて現れてまゐります。然し邪淫な氣持と不敬虔な氣持は、狡猾な蛇の樣に隙を窺つて出入いたします。この邪淫な蛇は我々の胸の中にすら、小さい穴から潛り込んできます。父なる御神、願くは、まづ我々の胸より、この邪淫の巢をとり除き、不敬虔なるこの我儘な心をうち碎き給へ。そしてキリストによ

つて新しく我々を甦へらせ、不淨の近づかず、汚穢の浸まない無垢なる魂に我々を鑄換へて下さい。たゞ我々一人のみならず、日本の國土を初めとし、支那に印度に、ヨーロッパにアメリカに、この清淨なる靈氣を漲らせ、一日も早くあなたの國を地上に近づけさせ給へ。その日には醜惡なるものは逃去り、キリストの血をして勝利あらしめ給へ。その日が來るまで我々は決して緊張を破りますまい。その日が遇れることによつて、あなたの救か更に伸びて行くことを信じます。願くはあなたの救を萬民に徹底せしめ、人々が悔改めてあなたにたち歸り、神の神聖を宇宙の凡ゆるものに到る日を來らせ給へ。キリストの御名によりて祈ります。アーメン

ペテロ後書梗概　第二章　反キリスト者に就ての注意
第一章　殉教者の教訓　第三章　再來と救の確信

第二十三章　聖愛の福音

ヨハネ傳とヨハネ第一書

—ヨハネ第一書の概要—

ヨハネ第一書の優れたる點は、その圓滿なる宗教的體驗の姿である。私は亞細亞人が體驗し得る體驗と云ふのはこれより以上に出ないと思ふ。

ヨハネ第一書とヨハネ傳とを比べて氣付くことは、ヨハネ傳はヨハネ第一書の宗教的體驗を基礎にして書かれたと云ふことである。それは疑ふべくもない。少くもそこに非常に似たものがある。永遠に關する思想、愛に關する思想、潔めに關する思想、神と偕なる同心の思想、勝利に關する思想、聖靈に關する思想、キリストに對する絕對の信賴、神の子の思想、脫俗的出世間的思想、表象主義としての信仰等の點が、香の高い氣持をもつて、ヨハネ第一の書に記載せられてゐる。我々がヨハネ第一書を讀返す

程、その宗教的感情の高いのに驚く。それを貫いてゐる一つの思想は聖き愛である。この思想は默示錄にも一貫してゐる。默示錄は變つてゐるやうであるが、ヨハネ第一書の著者と同じ氣持で書いてゐる。私はヨハネ第一書の書かれたことをヨハネ傳と並べて考へたい。

例へばヨハネ第一書一章の一、二、三節はヨハネ傳の第一章の一節から四節までと似てゐる。ヨハネ第一書第一章一節二節の生命と云ふことが出てゐるが、それが五節には「神は光にして少しの暗き所なし」とあり、七節には同じことを書いてゐるが、この第一書の著者は命と光を喰付けて考へてゐる。斯くの如くこの著者は生命宗教を高調してゐる。第三章十四節、十五節がそれである。第四章にも永遠の生命に關することを書いてゐる。第五章十一節にもその事が出てゐる。ヨハネ傳の第三章十六節の生命の宗教、永生の思想はヨハネ傳及びヨハネの書の著者の根本的信仰である。

生命の方面から宇宙を見る見方と、宇宙を冷たい死物として見る見方により、その宗教思想が變る。宇宙を死物として見る見方はマルクス主義等である。眞理とか法とか云ふ非人格的に見る見方は佛教である。フランスにもこの見方がある。例へばクラルテ運動の如きがそれであるが、我々はそればかりでなく、冷たい眞理や法といふものでなく、生命として見ねばならぬ。生命の中に目的、選擇、成長、力、法があるから、その全部を見なければならぬ。我々の時代には生命を纒めて考へないで、分解しようとする。進化論者は成長ばかり、プラグマチスト或ひはヒューマニストは能率をやかましく云ひ、カントは目的ばかり、佛教やクラルテ運動の連中は法のみを見、物理學者は力のみを見ようとする。が、我々はその全部を生命として見なければならぬ。多くの人は部分的に見て、生の體驗としての宗教を排斥す

る。ヨハネ第一書の著者も分解的でない。全體として、その生命の内容として愛を考へてゐる。それが第一書の特徴である。この著者は、愛は永遠に新しく、永遠に古いと云ふ。（ヨハネ第一書二ノ七、八節）つまり古いもので新しいものである。生命は新しいものだが、世界の初からある。が、生命は永遠に進歩するから永遠に新しい。愛も同樣である。

愛による見神

愛は古臭いものである。愛は無意識的に愛する場合と、半意識的の場合と、意識的の場合とある。無意識的愛と云ふのは、哺乳動物の如く、哺乳する場合に我々が乳を拵へて持たうと思はないのに、無意識的に備へられてゐる。半意識とは今日の多くの母性愛の如きである。もう一段進み、眞の意識になると、十字架、即ち苦痛があつても愛しようとする意識が生れる。互助愛の如きはまだ半意識であるが、十字架愛に迄進まなければならぬ。愛は古いが、意識的になると眞の十字架愛が生れる。宇宙の進化から云ふと、愛は古くからあるが目醒めてくるものである。蕾が春になると開くやうに、愛は開くものである。無意識的愛から半意識的になり、それから意識的になつたと考へさへすればいゝ。それがキリストのやうに、人の爲に責任を持つことである。多くの人はそこまで責任を持つてゐることを信じない。

みんなは眠つてゐるが、キリストは反對に醒めてゐる。その愛を繰返して數へてゐるのが、ヨハネ第一書である。人間に受ける愛は神から來たと云つてゐるが（ヨハネ第一書四ノ九）ヨハネ第一書の力强い點はこれである。神がまづ我々を愛してくれる。我々が無意識的愛から意識に目醒めるのであるが、人

間としての愛なら簡單な愛で、好きな者だけを愛するのであるが、神の愛は嫌ひなもの、罪作るものをも愛するのである。我々が脱線しても救つてくれる。我々が神を愛するのでなく、神の方から我々を愛する、これがキリスト教である。これによつて再生の原理、救の原理が示された。我々は一本道に進化するのでなく、再進化の道がある、神の深い愛により再進化が備へられてゐる。その再進化に對する連帶意識を贖罪愛と云ふ。この愛は一本道の愛ではない。複線である。利己的でない、他愛的である。戀愛は好きなものを擇んで行く氣持であるが、嫌ひなものをも選んで行く氣持は神の愛である。それが贖罪である。こんな汚い厭なものと思ふ者を愛して行かう、當然棄てられなければならないものを生命に返さうと云ふ、それがキリスト教の大發見である。（ヨハネ第一書四ノ九、一〇）

この再進化、再生力、リゼネレーチーヴ・パウワーが宇宙にあることを發見した愛は、世界に於る人間生活にとつて大變な出來事であつた。この點で近代科學は徹底的に發展してゐない。今日の道德は進化論的で、再進化的になつてゐない。キリストは救の原理を再進化から見ようとする。それが、「神がまづ我々を愛して云々」（ヨハネ第一書四ノ七）と書いてある處で、斯ういふ風に我々を愛する愛があるのだから、我々も愛さなければならぬと主張してゐるのである。これは新しき道德の出發點である。この原理から無抵抗主義の倫理も出て來る。

愛があれば、神の本質が愛であることがわかる。だからこのヨハネ第一書の見神は、單に神秘主義の見神ではなく、倫理的の見神である。愛によつて見神しようと云ふのである。（ヨハネ第一書四ノ八）それには理由がある。

我々が神を知らうとした處で、もしも鬪爭主義に立つなら世界は分裂して神はわからぬ。分裂すれば分裂的神觀が出て來る。分裂的神觀は偶像教である。宇宙の愛による統一があると見れば、統一神觀が出て來る。それは一神教であり、キリスト教である。一方は愛、一方は鬪爭の違である。愛が統一するから宇宙が變る。キリスト教は愛の統一により宇宙を統一しようと云ふ。一方は鬪爭により宇宙を分裂させようとする。それは僅かの差である。ユダヤが統一したのはローマ時代の愛によつた。宇宙の統一はだん〳〵宇宙に擴まる。我々が愛を持てば必ず統一的になり、それを實行するものには愛が出て來る。それが反對になると醜いものになる。

愛による潔め

潔めとは神の姿になることである。神の姿になることは愛による外道がない。智に於てまた意志に於て、神の姿を見ることは困難である。だが愛に於て最も近く神の姿を見ることは可能性がある。

潔めと云ふのは消毒である。清潔の清潔である。我々は病氣に勝つやうにしなければならぬ。我々は天使になつてゐない。で、ある方法を持つて勝たねばならぬ。犯罪もさうで、昔は殺すな、姦通すな、盜むな、嘘をつくな、博奕するなと云ふ、之位守つて居れば潔められたのであるが、今はなか〳〵多くなつて慢むな批評すなと云ひ、また筆の方が刀で殺すより大きいと云ふ譯で、昔と殺し方が違ふ。口で人を殺したり、筆で殺したり出來る。我々が文明になればなる程、潔められる種類がむつかしくなる。今日の時代は、教會ではいゝ人であるが、自分の町へ歸ると高利貸しをしてゐる人がある。幼稚な罪の時代なら潔めが早いが、人類になるときよめが遲くなる。それを神が潔め得るのである。

ヨハネ第一書はこれが完全になることを云つて、絶望してゐない。（ヨハネ第一書四ノ一八）全き愛に入ることを拒む必要はないと考へてゐる。それがきよめの秘訣である。

愛による勝利

同心の愛は、神と我々を完全に調和させる。夫と妻、親と子、友人と友人、民族と民族が調和する如く、神と人間を一つに調和する。そして我々の中に神の姿が現れる。そこに勝利がある。

この書は勝利を繰返してゐる。（ヨハネ第一書四ノ四、五ノ四、五）この著者は世に勝たねばならぬことを說き、そして世俗的な唯物的な世界を蹂躙しなければならぬと說いてゐる。この事はヨハネ傳第十六章三十三節にも出てゐる。キリスト教信者の多くは負けてゐる樣な考を持つてゐるが、壓迫せられ、苦しめられて何十年も經つたが、實際は勝つてゐるではないか。で、キリストの精神は世に勝つ工夫である。大臣は片つ端から監獄に行つてゐるが、我々は監獄に行く必要はない。我々が勝つてゐるのである。

內住する愛

ヨハネ第一書はまた、神の內住に非常に重きを置いて、內にある御靈を高調してゐる。（ヨハネ第一書二ノ五、一五）神は聖靈として働く。（ヨハネ第一書五ノ七）神のうちに靈が働いて我々に愛を與へてくれる。我々に愛を發芽さしてくれるのである。

從つて、愛を完全に現すもの〻力はキリストである。キリストと云ふのは前に云つた法とか文化とか、成長とか、單なる選擇とか、單なる力とか云ふものでなく、人格的であり、生命であり、愛であり、全體である。現代人は非人格的に宇宙を見んとする。宇宙の眞理は信ずるが人格を信じない、成長は信ず

るが人格を信じない、法を信ずるが人格を信じない。力を信ずるが人格を信じないと云ふ。人格的に宇宙を信じようとしない、宇宙の完成は人格の完成である。人格を完成する處に宇宙の完成の歸結がある。

で、我々は人格としてキリストの中に愛を完成しなければ、宇宙はぼんやりしたものである。

我々は宇宙の本體は人格的だと云ふ。人格のある部分が法として見られ、人格の不變の部分が法として見、また力として、或ひは選擇として、時間的に目的として、そして進んで行くものが成長となる。

斯く人格の分解したものが五つあると考へる。佛敎ははつきりしてゐないから方便だと云ふ。そして宇宙は法だ、佛法だと云ふ風に、非人格的なものを佛敎とする。我々は人格的のものを現して行かなければならぬ。

完全なる姿

同時に我々が神の子にならなければならぬ。度々これは書かれてゐる處である。（ヨハネ第一書三ノ一、二節）第三章二節には神に肖んことを知ると書いてゐる。墮落する筈の者が神の子になる。したがつて出世間的なものになり、表面的、偶然的、機械的、決定的なものでなく、我々は自由と自在のものにならなければならぬ。だから宇宙に於る物的存在と創造とはちがふ。だん〳〵意味が違つて來る。そこに表象の原理がある。物とは價値創造の原理から云へば、ある意味を持つてゐる。同じ物でも意味が違つて來る。形や物がだん〳〵變つて來る。それが表象の原理である。土で陶器を作り、家を造り、ある場合には人間の身體を作る。同じ土で違つたものを創造し得る。

第五章八節には「證するもの三つ、御靈と水と血」とあつて、みたまは内在的のもの、水は物的、血

は生命である。之によつて證がせられる。血が歴史的に働いて神の愛を現し、みたまが神の方面から、物を超越した永遠の現在として、水は我々を洗つてくれる、それが三つの符號である。この表象主義は默示錄の思想となつて發展してゐる。

ヨハネ第一書全體を通じて、贖罪愛の根本的原理を敎へてゐる。ヨハネ傳はヨハネ第一書の思想を背景としてゐる。だからヨハネ第一書の圓熟したものがヨハネ傳である。

天の父なる神樣、
生命の宗敎に就き、愛の宗敎につき、神の子とせられる宗敎につき、十字架の血により贖ひ給ふ宗敎につき敎へられて感謝いたします。我々の罪惡は神の前に大にして、神の御姿を仰ぐに充分でありません。神の大いなる力もて我々を許し導き、あなたの御姿をはつきり印刻し、我々を完全にあなたの子として知ることを得しめて下さい。救主の御名により祈ります。アーメン

ヨハネ第一書梗概
第一章　神との同心
第二章　罪と世よりの救
第三章　神の子と愛の實現
第四章　愛の宗敎の完成
第五章　神による誕生

第二十四章　受肉の福音

—ヨハネ第二書の概要—

肉體と完全の姿

この手紙はヨハネと云ふ人が書いたもので、そのヨハネが恐らくはキリストの弟子ヨハネであらうと考へられる節が多い。

この短い手紙の中に現れた一つの問題は、果して我々肉體に居る者が、完全なる生涯を送り得るか否かである。

人を惑すもの多く世にいで、イエスキリストの肉體にて來り給ひしことを云ひ表さず、斯る者は人を惑す者にして非キリストなり。（ヨハネ第二書七節）

キリストが肉體で來たことを信じないと云ふ意味に於て、人間が肉體に居る間は完全なものになれない、と云ふ悲觀絶望の氣持が出てゐる。恐らく、我々も五尺の身體で居る間は、立派なものになれない。智慧も財産も力も無い、心も感情も亂れてゐるし、我々はこの肉體に居る間神聖なものになれないといふて、この肉體そのものに愛想をつかす傾向がある。殊に東洋人はこの肉體を馬鹿にする傾向がある。それには臺所を見れば判る。肉體は重んずべきものでないのだから、土鍋一つ、箸一本持つて居ればいい、肉體はどうぞこうぞ四本の手足が付いてゐればいゝといふ風に、身體を虐待することを、宗教のいい部分と考へる人が多い。恐らくヨハネが肉體を書いた時には、肉體を不完全なもの、肉體は罪惡の巣窟である。出來るだけ早く區切をつけてしまつた方がいゝと云ふ考が、誰にもちよつとはあつたに違ひない。有限の間は無限に接觸出來ないといふ絶望の考が多い、之が非キリスト教的な大事な分子である。

キリスト教は唯物主義に反對する。だからキリスト教は唯物論ではない。が、キリスト教は物質を見る時、死んだものとしてではなく生き物として見る。それが神と直接關係があり、神聖なものであるとする。物にあきらめを付けてはならない。マルクス主義は物を死物として取扱ふが、キリストは生物として扱ふ、それが非常な差である。マルクス主義は宇宙に心はないと云ふ、然るにキリストの教は宇

宙には心があると信ずる。從つてキリスト教は肉體を尊敬し、肉體に完全な姿があると見るが、小乘佛教は肉體は汚はしいから、肉體を早く離脱した方がいゝと云ふ。これが小乘佛教とキリスト教の差である。キリストに於ては大乘佛教の主張する卽身成佛と云ふことが完成し得るやうになつてゐる。で、印度思想は卽身成佛と云つても、靈魂の潔め、良心のきよめを強く主張しない。それで、淫亂なる卽身成佛に墮する嫌がある。

所謂東洋思想の肉體輕蔑でもなく、共産主義のやうに肉體中心でなく、東洋西洋の教をすつくり引くるめて、愛に於てキリストの姿を宿すと云ふ綜合的の眞理の教がキリスト教である。

我々はこのキリストが肉に於て現れ給ひしことを瞑想し、キリストの姿を我々の肉體に現すやうな信仰生活の勝利を得たいものである。

我々は學問が足らず、科學と一致しない不滿足な肉體に居る間、進んだ生活をし得ないと思ふ者がある、だから或人は絶望して自殺しなければならなくなる。あまり肉體が醜いからと云つて絶望し、また人間は有爲轉變の時代に住んでゐるからと云つて惱み、犯罪を重ね、梅毒にかゝり、肉體を邪淫の巣窟のやうに考へる。けれどそれらは肉體の病的方面で、肉體の健全なる建設的方面でない。我々にはつきり判らぬが、不思議なこの人間の肉體は、何かしら深い一つの設計があつて生れたに違ひない。

神の姿の進化

私は下等動物から人間に到る迄の筋道を考へ、人間を通つて行く何かの姿、神の子の姿が現れて來ると思ふ。そして人間を通して進化し得る餘地が充分ある。それを絶望しないで純潔を保ち、神の子に進

化する迄肉體をうるはしく完全に保つて行かねばならぬ。我々は肉體に於てキリストの生活をせねばならぬ。それには境遇や社會狀態、衣服、住宅問題、或ひは失業問題、信用組合、生活難の問題も凡てを引くるめて考へ、凡ゆる社會事業、學校の問題、禁酒問題、廢娼問題を考へ、それのみならず、キリストを教へ、神を教へ、神に生きられる運動がそれと共に動かなければ、キリスト肉體にて來り給ひしことを云ひ現すことは出來ない。どうも我々の間では二つが一つにならぬ傾向がある。

我々は唯物主義には反對である。肉體を死んだもの、生物を死物として取扱ふやうな考を持つてはならない。我々は、肉體は神の生命の作り成せるもの、日用の糧を今日も與へ給へとキリストが祈られた如く、糧そのものゝ中に、神の深い生命のあることを考ねばならぬ。だからキリストは我は生命のパンなり、我は生命の水なりと云はれた（ヨハネ傳六ノ五一）一掬の水、一片のパンの中に、生命との連絡があることを考へざるを得ない。

近頃日本でも肉體を尊敬する運動もないではないが、宗教的肉體を尊敬する運動はない。この宗教的意味の籠つた肉體を考へなければならぬ。デンマークでは精神發芽を考へる。肉體は肉體、精神は精神ではない。生物の奥に心がある。その肉體の中に神の種が宿るのである。「處女孕みて兒を生まん、その名をイエスと稱ふべし」この神聖の中に、人間生活の淨化がある。それが神聖視されなければならぬのに、それをふしだらに取扱ふから、肉體を恥かしい罪惡の機械にしてしまつた。

キリストは肉體を持つてゐたが、神の子であつた。この肉體を持つてゐても、神の性質を充分とり得ると云ふ信仰と、キリストは人間だ、肉體だけだ、神は神で、人間は人間だと云ふのとの間に差がある。

そして肉體と神の分子とが分離する。それがデリケートな問題で、肉體の中に神があると云ふのと、肉體は肉體で神の子になれないと云ふのとは大分違ふ。私は肉體の中にあつても神の子になり得る信仰を持つてゐる。神だから肉體に宿れるのである。神に於てはなし能はざるなしである。人間は有限だから無限の神が宿れないとは云へない。パウロはこれを「貫き」と書いてゐる。（エペソ四ノ六）即ち有限を貫く神、キリストの中に現れる神、肉體の中にあらはれる神、この信仰がなければキリスト教の信仰を持つことは出來ない。だからキリストは、この有限の中に現れ給ふた。少くも愛に於てはなし得た。キリストは愛の姿に於ては神の姿そのものである。この意味に於て私はキリストは神の子だと思ふ。隨つて神の子を模範とし、キリストを模範としてキリストの完全を取返さねばならぬ。毛蟲が蝶々になつた姿のやうに、この肉體で神の子になり得るやうにしなければならぬ。小さい感情に左右されるやうでは恥かしいことだ。

キリストは右翼の者も左翼の者も同じやうに愛し、軍人も稅吏も、癩病でも破戸漢でも、大きな氣持で愛してゐられるかと思ふと、女や子供を愛し、乞食でも大臣の奥樣でも、ブルジョアとプロレタリアの區別なしに愛して居られる。肉體の中に於て我々は、圓滿なる信仰を持たなければならぬ。

母性なる教會

ヨハネ第二書は教會宛の手紙である。教會はキリストから見るなら婦人である。

小亞細亞に於ては、選ばれたる集團を凡て女性に考へた。教會は女性で、キリストはその花婚である。それは默示錄を見れば判る。默示錄は全部教會を婦人に譬へてゐる。例へば第十二章の一節に「日を著

たる女ありて其足の下に月あり、その頭に十二の星の冠冕あり。かれは孕り居りしが、子を産まんとして産の苦痛と惱とのために叫べり」とあるが、これは教會が、新しい時代を生まんとしてゐることを默示錄が表象して書いてゐるのである。

ヨハネ傳第八章には「眞理は汝らに自由を得さすべし」と書いてあるが、宗教的眞理、道德的眞理、科學的眞理を根本にするなら、人間は迷はずに行ける。ヨハネ第二書一節から四節を見ると、君らは眞理を中心として送つてくれと云ふことが書いてある。肉體を持てる人間の完成を示した短い手紙であるが、實に大きな意味を含んでゐる。私はこの意味に於て、キリスト教に絕望しない。これほど偏しない徹底した眞理に立脚し、良心を曇らさない宗教はない。我々は反キリスト精神にはふられないで、この肉體の中にキリストの眞理を現したい。

折々我々は迷ふ。神は要るがキリストは要らないと考へる人間に限つて、肉體の中に神を現す大事なことを忘れる。

で、キリストとは、神の姿を肉體に現す實驗に成功したものと云ふ意味である。だから我々はキリストを位取に置く。無限の神の生活を人間に現す時には、キリストに於て表れる。

我々は信仰生活の勝利を持つ爲に、キリストに似たものにならなければならぬ。

父なる神、

我々は肉體を輕んじ、苦行によつてのみ信仰を得られると思ひ、社會運動を輕んじ、肉體を忘れ、神を離れた生活をして居ります。信仰の勝利を得るために、肉體を輕んじ、或ひは肉體のみを重んずる思想から解放せしめ、キリストの地上に於る姿を、この地上に居るものに完全に現して下さい。キリストによつて祈ります。アーメン

ヨハネ第二書梗概

第一節　挨拶—眞理を通しての愛
第二節　眞理による愛
第三節　神による眞理と愛
第四節　眞理に歩むものを見ることの喜び
第五節　互助愛の誡め
第六節　行動の愛と愛の誡め
第七節　化身のキリストを否定する異端者
第八節　勞働の效果を空しくすな
第九節　キリストの教を通過するものの悲哀
第十節　僞教師との絕交
第十一節　異端贊成者の異端感染
第十二節　紙と墨とによる福音の否定
第十三節　挨拶

第二十五章　兄弟愛の福音

—ヨハネ第三書の概要—

感謝と紹介の手紙

宗教と云へば、信仰の事のみを取扱つてゐるやうに思ふが、キリストの福音そのものは愛の福音である。人間が神の子供であり、相愛を實現しなければならぬことが、キリストを信ずる者の本分である。今日と違つて、千九百年前には人種や階級も隔つてゐたであらうが、不思議にもイエスキリストに屬くものだけが、愛し合つてゐた。

ヨハネ第三書は、小亞細亞のエペソから、コリントに居たガヨスと云ふ親切な人に宛てた手紙である。ガヨスは自分の家を開放して、ユダヤ人ギリシヤ人の區別なく、旅人を泊めて親切に持てなした人であつた。で、その御禮の意味と、デメテリオを泊めてやつてくれと云ふ推薦狀がこの手紙である。この短い不思議な手紙が、新約聖書の中に殘つて、我々にとつて意味深いものとなつてゐる。

何處にこの手紙の面白さがあるだらう。これはキリスト教を實行して來た人々の實際生活を敎へてくれてゐる。第一は口先ばかりでなく、初代の人は兄弟愛を實行した。その反對に、中には狹い考で、口には愛を云ふが實行してゐない人もあつた。で、私がこの手紙を特に讀んで考へたい點は、初代教會の實行的方面である。

此處に四人の名前が出てゐる。ヨハネ、ガヨス、デオテレベス、デメテリオである。ガヨスは親切に泊めてくれる人であるが、デオテレベスは泊めてくれないばかりでなく、人の頭になりたい人だつた。自分が頭になるのみならず、彼はヨハネから送られて來る人があれば追つ拂ふと云ふ、偏見な、狹いキリスト教を信じてゐた。それに對する抗議がこの手紙に含まれてゐる。

第一は少しも知らない人をキリストの名によつて推薦してゐる。これには、神を愛する信仰を賴りにしてゐる人を推薦した初代教會の實行性がある。第二にこれを實行した階級的にも人種的にも關係のない人に對する感謝の意味がある。第三に、それに反對する人間がある、その人々は個人主義だから、頭になりたいことを考へてゐる。九節には「彼らの中に長たらんと欲するデオテレベス我らを受けず」と書いてある。さういふ優越觀を持つてゐる人はキリスト精神を持つてゐない。で、眞のキリスト教は實行性のあるものでなければならぬと云ふ事を短い手紙の中に敎へてゐる。

キリスト愛の實行

今日宗教と稱するものが隨分ある。神徒は十三派あり、神社から云へば七萬位あり、佛敎の寺が十三萬位ある。けれどそのお寺に泊る處がない。私が本願寺へ行つて泊めてくれと云つた處で泊めてくれない。が、初代教會は推薦狀を持つて行きさへすれば泊めてくれたのである。斯ういふ家族のやうな溫い氣持が通ふてゐたらしい。それも、北海道の人が東京に來て泊まると云ふのでなく、ユダヤ人の知らない人が、千里も隔つた遠い處へ行つても泊めてくれる、のみならず歡待を受ける。譬へば、私が日本の教會の推薦狀を持つて上海へ行けば泊めてくれる、と云ふ風に、萬國的な超民族的、超人種的な精神が、初代教會の間にあつた。日本人は支那人や朝鮮人が來れば輕蔑して、推薦狀を持つて來ても怪しいと云ふ。ガヨスはそれを受けたが、デオテレベスは受けなかつた。ところが、ヨハネは、受ける方がほんとで、受けない方が間違つてゐる。受けないのはキリスト教でないと云つてゐる。全然無知な人間でも推薦狀を持つてさへ居れば、次から次へ行けたらしい。

今日、日本のキリスト教がこれを實行すればどんなに善くなるだらうと思ふが、我々は實行してゐない。どく少數の我々の間にロッデの如きものがあつて、紹介狀を持つて行きさへすれば泊めて貰へるやうになつてはゐるが、今日のやうな冷酷な都市生活に於て、兄弟の愛をもて泊めてくれるやうにするならば、どんなに溫い善い社會が生れるだらうと思ふ。これがユダヤ人とギリシヤ人の間に出來た、これは大變な事であつた。旅人を懇ろにせよと聖書に書いてあるが、これを實行したことを見ると、初代教會は實に信仰的だつたことが判る。

五節に「なんぢ旅人なる兄弟達にまで行ふ所みな忠實をもて爲せり」と感謝の意味を籠めて書いてゐる。また、さういふ組織をしておかなければ、キリスト教的實行が出來なかつたのである。傳道しながら次から次へ送つて行けるやうな組織をしておかなければならなかつた。

中世紀の教會はみな枝だつた。モナスタリーに行きさへすれば、溫かいベッドに、葡萄酒とパンをくれて泊めてくれた。さう云ふ親切がなければ、眞の意味のキリスト愛の實現は出來ない。私はこの精神がずつと、もしも初代から今日まで行はれてゐさへすれば、今日の現代文明に對し、キリストの精神が實現せられると思ふ。これが顯れた爲に、今日の產業生活にキリストの精神が薄くなつたのだと思ふ。

宗教の優越性と愛の優越性

私はデオテレベスに就て考へたい。彼の考へた事は三つある。一、優越性、二、排他主義、三、信仰一點張で愛の實行を缺いたことで、兄弟愛運動の反對はこの三つである。

即ち、宗教の一つの要素は、むつかしく云ふなら藝術的な部分がある。自分の方が他人より優つてゐる、例へば、自分の信仰が、自分の宗教哲學が他人より優つてゐると云ふ考が强いことである。或人はキリスト教より佛教が優つてゐると考へ、禪宗は禪宗、佛教は佛教で自分の方がいいと思つてゐる。音樂家が歌をうたふ時、矢張り斯ういふ氣持である。だから音樂家の中には、自分の競爭の相手方に毒を飲ましたといふ話が隨分ある。けれど、たゞにこれは音樂家ばかりでなく、宗教の中にもさう云ふものが含まれてゐる。佛教に東本願寺と西本願寺とあり、キリスト教も舊教と新教は互ひに惡口を云ひ合ひ、神道は神道で、日本の宗教の中で、神道が一番いゝと思つてゐる。宗教の中には藝術的部分があるから、自分ばかりがいゝと思ふ癖がある。これが狹量的方面である。で、愛がなければ、宗教のいゝ處はなくなつて、狹量的部分のみ殘る。そこがキリスト教の偉い處で、キリスト教には愛があるから狹い處がない。キリスト教が狹い量見を持つてゐないから、世界的になつたのである。愛

の優越性なら誤はない。

二は排他的である。十節に、「彼は惡しき言をもて我らを罵り、なほ足れりとせずして自ら兄弟達を受けず、之を接けんとする者をも拒みて教會より逐ひ出だす」とあつて、斯ういふ黨派的考をもつて人を排斥する贈玉の小さい人間を排他主義と云ふ。

信仰一點張と愛の宗教

であるから、私は、心の中にキリスト教でない人があるとして、神が判らない人があつても、さう云ふ方面だけで、その人を判斷しないで、いゝ方面を見なければならない。つまり愛が徹底しないことがいけない。眞の宗教には愛の實行性がなければならない。

デオテレベスの優越性、排他主義、實行の缺けた信仰を持つ階級の人を排し、民族や社會性を超越して愛したガヨスの事を本當だと云つてゐるヨハネの手紙に感動を與へられる。その不思議なる兄弟愛が即ちキリスト教である。これをするには、世界を造つた神が親で、我々は兄弟であると信じなければならぬ。

よく人は、あの人は救はれてゐるとか、救はれてゐないとかと云ふが、道德的に分離された道德的階級の差をも、キリストはたてない。民族的階級などいろ〳〵あるが、道德的階級が一番恥かしい。これを無くなすには、キリスト教の贖罪愛による愛の實行をしなければならない。

「愛する者よ、惡に倣ふな、善になら へ、善を行ふものは神より出で、惡をおこなふ者は未だ神を見ざるなり」（ヨハネ第三章一七節）眞に我々が愛の實現をしてゐるなら、神がはつきり解る。斯ういふ短い手

紙の中に、我々は兄弟愛の實行に就て教へられたことを意味深く思ふ。日本では宗教と云へば、慰め半分のやうに思つてゐる人があるが、宗教は愛の實現性を持たなければならないものである。

天の父

我國に宗教は多くありますが、愛の實現性を缺いたものが大部分であります。世界に宗教が多いと云ひますけれども、愛の實行のないものばかりで、國境や民族や、社會的因襲に捉はれて居ります。が、さういふ考を超越して、經濟的、道德的優越性を破壞し、愛による實現性を我々に與へて下さい。我々が貧しい人、農民、勞働者を愛し、病氣に惱む人を愛して、虐げられたる民族が早く解放せられるやうに、我々に愛の實現性を與へて下さい。キリストによりて。アーメン

ヨハネ第三書梗概

第一節　挨拶
第二節　祈
第三―六節ガヨスの親切に對する著者と教會の感謝
第七―八節　旅行者への兄弟愛
第九―十節　デオテレペスの不親切
第十一節　惡に倣ふな
第十二節　デメテリオ推薦
第十三―十五節　挨拶

第二十六章　純潔の福音

―ユダ書の概要―

キリストの兄弟

人間の活動は、その時代によつて焦點が變る。ある時は運動熱が旺んになり、或時は學問熱が旺んになり、次の時代には音樂熱が盛んになると云ふ風に、人間の勢力が滿遍なく行き亙らないから偏して發達する。この傾向は宗教生活に於て最も現れる。高い宗教生活があるかと思へば、次の瞬間には理想の

低く落ちた反動的な場合がある。

ユダ書はキリストの兄弟が書いたものであるが、ユダは謙遜をもつてイエスの僕と最初に記してゐる。このユダ書は、反動時代の反キリスト的生活に對する挑戰の手紙である。（ユダ書三節）卽ち、信仰のために戰はんとする手紙が必要だと思つて書かれたものである。この意味で私はこの書を聖戰の福音とも云ひたい。ユダ書も表面はキリスト教であるが、實際は脫線したものに對する訓戒書である。

第一は女の問題である（ユダ書四節）之はその當時の事情を精しく知らなければ判らない。フランスの批評家ルナンの書いた「マーカス・オーレリアス」と云ふ書は、ローマ皇帝として最も賢い哲學者と云はれてゐる紀元二世紀の名君を中心とした思想史であるが、「マーカス・オーレリアス」を書いたのは極僅かで、當時のローマの民族宗教或ひは、宗教的思想史を精しく書いてゐる。その中に、紀元二世紀に於るノスチック宗教の現狀を面白く記述してゐる。殆ど宗教病理的に扱はねばならぬことばかりである。屢々私は、各種の本の中に書いてゐる如くキリスト前二百年から、ギリシヤ、ローマ、エジプト、小亞細亞地方では、人間生活に愛想をつかしてゐた時があつた。戰爭があり、疫病があり、ローマ皇帝は暗殺され、國が二つ三つに割れ、善い人は沙漠に逃れて、世から引籠つた時代があつた。その時ギリシヤでは、キリストに對する憧憬、キリストが天から降りて來て欲しいと云ふ期待があつた。

エジプトでもオシリスと云ふ宗教は復活を待ち望み、小亞細亞に於ても、非常に神秘的なシヴルと云ふ宗教がキリストを待ちもうけてゐた。その傾向がキリスト教の運動と合致した。が、キリスト教が餘

り精神主義的に行くから、何かギリシャ人にそぐふやうな多少表象的に美的に、肉感的に現したいと云ふことから病的になつてしまつた。それが「マーカス・オーレリアス」の中に書かれてゐる。「アンドリアスとサイケ」と云ふ、つまり男女相愛の宗教があつた。巴里のルーブル博物館へ行くと、男の天の使と女の天の使が接吻してゐる美しい彫刻物があるが、この當時の物語を彫刻したものである。日本でも二十年程前、上田敏氏がアンドリアスの事を美しく小説體に書いたものがあつた。つまり男女の戀愛を現したのが、小亞細亞の傾向であつた。凡ての小亞細亞の宗教的傾向は戀愛が中心であるから、キリスト教の愛が小亞細亞に行くとさういふ風に脫線する傾を持つてゐた。そして二世紀になると、教會の中に裸體の女を二十四人も並べて神を禮拜するといふ極端なる精神病的な宗教禮拜が始つた。之は世界の宗教歷史の病的方面に於ては珍しくない。これは紀元二世紀の處女禮拜に似てゐる。その後も度々さういふ脫線振りを示した邪宗教がある。イエスキリストの弟子の中にもこれに脫線した人が、一、二あつた。使徒行傳の中にニコライが出てゐる。(使徒行傳六ノ一五) ニコライは、默示錄を見ると、好色を奬めてゐる。(默示錄二ノ六) 使徒行傳に出てゐる改宗者と云ふのは、墮落したものと云ふ意味である。「ニコライ宗の行爲を憎む」と云ふのは、好色的な方面に墮落して行つたものがあつたのである。斯ういふ傾向があつたから、手紙を書く必要があつた、それがキリストの兄弟ユダが書いた手紙になつた。

性慾脫線時代と宗教

現代は戰爭の反動時代である結果、恐ろしく性慾方面につゝしみがなくなつた。我々はその好色的な

方面を征服して時代の惡い傾向に挑戰する必要がある。好色の最も露骨になつたのがカフエーや私娼である。立派な家の奧樣や娘が、東京府下の玉の井方面に私娼に出ると云ふが、これは好色的精神に迎合せんとする傾向である。之に挑戰するのでなければ、眞の宗教は確立しない。ロシアは宗教を棄てゝとの好色方面に走つた爲に困つてゐる。その結果は必ず來る。ユダはいろんな例をひいて、その結果がよくない事を書いてゐる。五節、六節にそれを說き、七節にはソドム、ゴモラの事を書き、十一節に來ては、ユダヤ人がエジプトを出てモアブの土地に居た時は、彼等はモアブの娘をユダヤ人の陣營に忍ばせ、色慾をもつて進擊の精神を鈍らせようとした。バラムはその策略をした人である。その結果、青年の多くは戰鬪的氣分を忘れて神に逆いた。キリストの宗教運動が個性の確立を主張する結果、若き男女が親の云ふ事を聞かず、性的方面に走る事が屢々あり得る。そして取返しのつかない事になる。また極端なる自由思想家が、今日の結婚制度に疑惑を持つてゐるので、性問題に就き癲痒してゐる傾向を持つてゐる。十九節を見ると、彼等は分裂主義者になり、情慾主義者になり、高い神の心を持たなくなり、愛餐を得て共にしたものでもさうなつてしまふ。(ユダ書一三節)

初代教會に於ては住居を共にし、家を開放し、教會を組織し、食物をともにしてゐた。貧乏な人が多かつたから、プリスキラとアクラの家の教會叫ひはピレモンの家の教會、ヌンパの家の教會、ガヨスの家の教會と云ふ風に、家をまで開放して宗教生活をともにしてゐたのである。然し、家や食物をともにしたその美しい處に於てすら、それを利用して惡い方面に持つて行つたものがあつたので、それをユダ

が指摘したのである。彼等は愛餐の氣持にならず利己的だつた。（ユダ書一二、一六節）愛の生活から離れたものがキリスト教を罵つた。そして詰らない生活のために、人に詔つて脱線した。之を眞のキリストイエスの精神と比べると大きな差である。

聖淨の生活

ユダはキリスト生活を、二十節から二十三節までに簡潔に云ひ現してゐる。そこには六つ七つの階段を設けてゐる。

第一は潔き信仰とあつて、良心宗教的信仰のことを云つてゐる。ある性慾生活をする爲に信仰をする人があるが、それは潔き信仰ではない。次に出てゐる德と云ふのは、單なる道德ではなく、信仰生活をしてその上に德をたてることである。ロマ書にも同じやうなことが書いてあり、ペテロも同樣なことを云つてゐる。信仰の上に新しき道德を建てると云ふことは、人間的人間道德でなく、宇宙の愛を基礎にした道德である。

次に聖靈によりて祈るとある。祈るのでも單に利己的な祈があるが、聖靈により祈るのは、宇宙全體の神の氣持で祈るなら、我儘がないからきかれることである。

「神の愛の中に己をまもり」（ユダ書二一節）と云ふ神の愛は、宇宙全體の愛である。自分を疎外するのでないが、自分を愛する時も、神を基礎にして「自分」がなければ、神の愛が現れる。次に出てゐる「永遠の生命」と云ふのはヨハネの思想である。眞の宗教をヨハネは永遠の生命と云つた。ギリシヤ語では、

ゾーエ・アイオニオスと云つて、ゾーエと云ふのは生命、アイオニオスといふのは永遠と云ふことである。その絶對の生命を得るまで、宇宙の生命の大動脈に觸れてゐれば安全である。その生命を得るまで我々はキリストの側に居なければならぬ。即ち、信仰、德、聖靈、祈、神の愛、自己完成、永遠の生命が、キリスト生活の徹底した方面である。そこには自己完成はあるが、利己的な好色はゆるされない。自己を完成することが、神の愛を現すことである。そこには信仰と祈があるが、信仰は道德を離れたものでない。而もそれが、キリストのやうな神の愛を肉體の上に表現さした力强いものである。

更に進んでは第二十二節、二十三節に、罪を恐れつゝ憎みつゝ憐んでやれとユダは書いてゐて、棄てしまへとは書いてゐない。我々は、一旦離れたものは棄ててしまふが、憎むけれど救ひたいと云ふ態度を持ちたい。

私はイエスキリストの兄弟が、かくまでキリストを尊敬してゐた謙遜なる態度を不思議に思ふ。これだけでもユダ書は充分値打があるが、更に書いてゐることに對し我々は現代も考へさせられる。この中の文獻エノク云々とあるのは、エノク書と云ふ幻示文學の中に出てゐる。幻示文學は紀元前二三世紀に流行つたもので、それをユダが讀んだと見える。それは六節、九節にも出てゐる。これはキリストの言葉にはない。今日我々の使はない幻示文學から言葉を持つて來たに違ひない。で、ある人はユダの言葉を多少値打ないものとして見てゐる傾向がある。即ちキリスト教の正當と認めてゐる文獻から言葉を見出さず、キリスト教の認めてゐない幻示文學のやうな脱線的文學からひいてゐる事を喧しく云ふが、